

2024年度 芸術文化観光専門職大学 芸術文化観光研究センター事業 シンポジウム 報告書

社会的インパクトから見た芸術文化観光の力
～豊岡演劇祭を中心に～

- 日時：2024年11月24日(日) 13:30～16:30
- 場所：芸術文化観光専門職大学 学術情報館





CONTENTS

1. 登壇者プロフィール(基調講演、パネリスト)	1
2. シンポジウムの趣旨・ご挨拶	2
3. 芸術文化観光学の確立を目指して	
大社 充 芸術文化観光専門職大学 教授	3
◆テーマ：豊岡演劇祭「総合調査」の概要	
4. シンポジウム記録	
基調講演 太下義之 同志社大学経済学部 教授	13
◆テーマ：「クリエイティブツーリズムと文化観光」	
 豊岡演劇祭の総合評価に係る研究報告	
I. 熊倉敬聰 芸術文化観光専門職大学 教授	24
◆テーマ：豊岡演劇祭 2024 上演作品の芸術的価値に関するアンケート調査と報告	
II. 直井岳人 芸術文化観光専門職大学 教授	28
◆テーマ：豊岡演劇祭来場者の行動的セグメントの特性	
小畠克典 芸術文化観光専門職大学 准教授	33
◆テーマ：豊岡演劇祭の地域への「真水」の追加的経済効果計測の試み	
III. 古賀弥生 芸術文化観光専門職大学 教授	38
◆テーマ：豊岡演劇祭 2024 サポートスタッフ調査に見る演劇祭のインパクト	
IV. 荒益克文、金子松美香、菅谷祐一、野村仁志	42
大阪公立大学大学院 都市経営研究科 博士前期課程	
◆テーマ：豊岡演劇祭がまちにもたらしたもの—宵田商店街（カバンストリート）への影響について—	
 パネルディスカッション	
課題提供 大久保広晴 （公財）読売日本交響楽団事業課長	47
◆テーマ：「豊岡演劇祭 課題と期待」	
質疑応答 大久保広晴、太下義之、藤野一夫	52
◆テーマ：「演劇祭が地域にもたらす価値を考える」	
5. 政策評価と芸術的評価へのこころみ	
藤野一夫 芸術文化観光専門職大学副学長（教授）・研究センター委員長	
◆テーマ：豊岡市の文化政策と演劇祭の（政策）評価について 57	
「批評」にもとづく豊岡演劇祭の芸術的評価の試み 67	

1. 登壇者プロフィール

◆基調講演 講師

太下 義之

文化政策研究者、同志社大学経済学部教授



博士（芸術学）。文化経済学会<日本>監事、文化政策学会理事、デジタルアーカイブ学会理事。2025年大阪万博アカデミック・アンバサダー、公益社団法人全国公立文化施設協会アドバイザー。静岡県文化政策審議会委員、アーツカウンシルしづおかカウンシルボード議長、愛知県県民文化局アドバイザー、鶴岡市食文化創造都市アドバイザー、など文化政策関連の委員を多数兼務。2023年、文化庁長官表彰。単著『アーツカウンシル』（水曜社）。

◆外部パネリスト

大久保 広晴

（公財）読売日本交響楽団 事業課 課長



1977年生まれ。1999年から2010年まで（公財）武蔵野文化事業団でクラシック音楽を中心に市民バレエや伝統芸能などのプロデュースを手がける。10年から（公財）読売日本交響楽団の事業制作部・広報担当、現在は事業課課長。主催公演をはじめ、地方自治体などからの依頼公演の企画・制作などを行う。神戸大学発達科学部（アートマネジメント）非常勤講師、トリトンアーツ（第一生命ホール）外部評価委員、小金井市芸術文化振興計画策定委員などを務めた。

2. シンポジウムの趣旨・ご挨拶

本学では、芸術文化と観光を架橋することで地域社会に新しい価値を生み出す「芸術文化観光学」の確立をめざし、2024年4月に「芸術文化観光研究センター」を創設いたしました。歓びに満ちた共同体をインターローカルに紡ぎ出す知の拠点となることが、本センターの目的です。

その最初の研究成果を広く公開し、ディスカッションを通じて課題を明確にするために、2024年11月24日、本学においてシンポジウムを開催いたしました。テーマは「社会的インパクトから見た芸術文化観光の力」。本シンポジウムでは、同年9月に5回目の開催を終えた豊岡演劇祭の総合評価を通じて、芸術文化観光の力の検証を試みました。

さまざまな視点からの評価に先立ち、国の文化観光推進法の策定にも関わられた同志社大学教授の太下義之氏に、基調講演「クリエイティブツーリズムと文化観光」をお願いいたしました。また、内外の芸術祭に精通し、毎年豊岡演劇祭にも運ばれている読売日本交響楽団事業課長の大久保広晴氏に、他の演劇祭との比較を踏まえ、豊岡演劇祭の特徴と課題を深掘りしていただきました。

さらに、芸術文化観光の観点から見た豊岡演劇祭の社会的効果と展望について、ご参加のみなさんと活発な議論をすることができました。

本シンポジウムの報告書が、芸術文化観光学を確立する布石となることを願っております。本学ならびに芸術文化観光研究センターへのご支援、ご協力を引き続き賜れれば幸甚です。

2025年3月吉日

芸術文化観光研究センター長
(芸術文化観光専門職大学 副学長)
藤野 一夫



3. 芸術文化観光学の確立を目指して

豊岡演劇祭「総合調査」の概要

大社 充

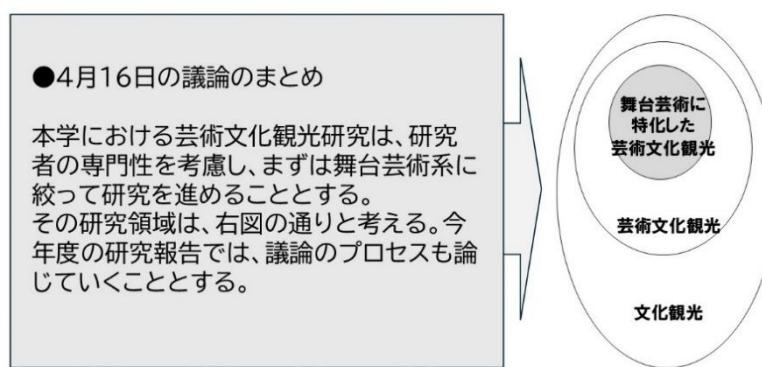
(芸術文化観光専門職大学 芸術文化・観光学部 教授)

●本調査の背景となるリーディング・プロジェクト研究

本学は、芸術文化と観光を架橋する「芸術文化観光学」を確立するという壮大な構想を掲げ、芸術文化観光研究センター（以下、研究センター）を開設し、大学院の設置も視野に研究活動が進められている。しかしながら、「芸術文化観光」という言葉は新たな造語であり、その定義は学内研究者の間でも定まっていない。そこで、研究センターでは、（1）「芸術文化観光の定義を言語化する」、（2）「芸術文化観光に特有といえる特徴を探求する」というリーディング・プロジェクト研究を立ち上げ、2023年度より、以下のような基礎的な研究を進めてきた。

【研究会の内容】

- 「〇〇観光（ツーリズム）」という単語を列挙し、その名称の特徴を分析（〇〇は名詞や形容詞）
- 芸術文化観光に分類されると想定される具体的な事例を選び出す
- 各自の研究分野から「芸術文化観光」についての視座を語る
- 「芸術文化観光学の理念 ーその理論枠組のためにー」（著者である藤野一夫氏が解説）
- 本研究における「芸術文化観光」領域の確認（下図、参照）



研究会では、「芸術文化観光は、どのような特徴を有するのか」を明らかにするため、芸術文化観光に該当する実際の取り組みにおいて、データ収集と検証を行うことで、その特徴を明らかにするという研究方法を採用することにした。

特定の地域に地域外から人が訪れることで、その地域におけるさまざまな側面に影響が

及ぼされ、何らかの変化が生まれる契機となることは少なくない。観光が地域に与える影響については、これまで経済的側面について語られることが多かったが、最近になって、文化的・社会的な側面にも着目すべきとの指摘がなされるようになってきている。このリーディング・プロジェクト研究では、芸術文化観光の特徴を探求するにあたり、次の仮説を設定することにした。

■仮説■

「芸術文化観光においては、他の観光形態との比較において、
地域に与えるインパクトに質的な特徴がみられる」

芸術文化観光が地域に与えるインパクトについて想定される項目を言語化して整理し、項目ごとの評価指標やその計測方法について検討を行い、調査を実施する。そして最終的に、表出する各項目の指標における他の形態の観光との比較において、芸術文化観光を定義することを想定している。

なお、2024年度・2025年度におけるリーディング・プロジェクト研究は、実証的な調査・研究を通して、芸術文化観光研究を進める上での議論の敲き台となる基礎資料を作成することを目指すこととした。

●豊岡演劇祭「総合調査」の全体テーマと調査実施に向けた研究会の開催

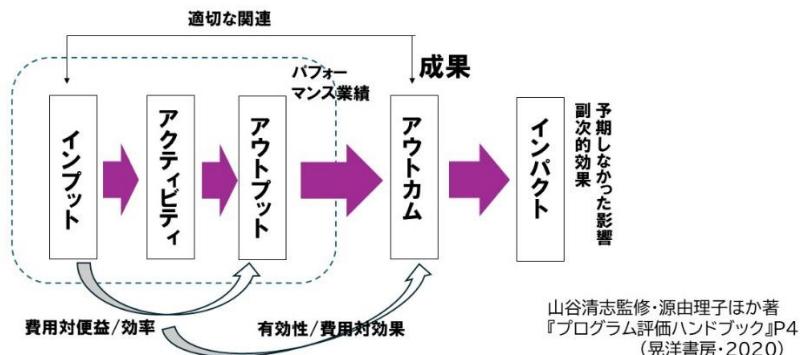
上記の背景をもとに、2024年度は芸術文化観光に該当すると想定される具体的な事例を選んで実証的な調査・研究を行うこととした。検討の結果、本学が所在する但馬地域で開催され、本学関係者も深く関与する「豊岡演劇祭」をその事例に選び、調査の全体テーマを以下のように設定した。

■豊岡演劇祭「総合調査」テーマ■ 「豊岡演劇祭は地域にどのような価値をもたらしているのか」

上記の通り、調査対象事例と調査テーマを設定したが、さらに具体的にどのように調査・研究を進めていくのかを検討（調査設計）する必要があることから研究会を開催することにした。本調査に参画する教員・研究者が、目線をあわせるとともに、本総合調査の意図と内容をより深く理解し、関係者間で調査設計に関する議論を行う必要があったからである。

研究会においては、2022年に翻訳書が発行された『芸術文化の価値とは何か』（水曜社）を参考文献に定め、同書の訳者・中村美亜氏を招聘して勉強会を行った。同書に記される各論に関しても議論を行い、芸術文化の価値に関する多種多様な調査手法についても検討を行った。また豊岡演劇祭に関して、「現時点で可視化されていること」、「現時点では可視化されていないこと」についても、演劇祭関係者の教員から説明を受けて整理・共有した。そして、全体テーマが「演劇祭のインパクトを評価する」ことから、評価の基本とインパクト評価について文献学習した。

●評価の基本 政策評価(評価基準と評価対象)



また、豊岡演劇祭「総合調査」の実施にあたって参考になる国内における取り組みを探したところ、静岡市「フェスティバル・シティ政策評価」がそれに該当することから、その考え方や実際を学ぶことにした。(研究会に関する資料は末尾)

●静岡市「フェスティバル・シティ政策評価」の概要●

【調査目的】

静岡市の5大構想のひとつ「まちは劇場」の推進によって実現しようとする、2030年の静岡市の姿（「市民の姿」「来訪者の姿」「まちの姿」「ビジネスの姿」「世界都市との関係」「環境の姿」）に対して、「フェスティバル・シティ政策」がどのような貢献をすることができたのかを検証すること。

【調査期間】

2018年～2022年の5年間

2018～2020「ロジックモデル」作成、2018年「基本調査」、

2020年「拡大調査」

【調査内容】

それぞれの姿について「文化的価値」「経済的価値」「社会的価値」の3つの側面から、その成果を捉える。

○参考文献：「国際文化芸術発信拠点形成事業フェスティバル評価システム構築業務 2019 報告書」

P06・07、調査方法については、2020年「拡大調査」

（1）拡大調査の調査目的

2018年、文化庁「国際文化芸術発信拠点形成事業」に採択されてから3年間のフェスティバル。シティ政策の成果を「文化的価値」「社会的価値」「経済的価値」の視点から分析を行うための包括的なデータを得ること。

〈評価の特徴〉

- ・静岡市のフェスティバル・シティ政策が政策目標を達成しているかを把握するための

評価

- ・静岡市のフェスティバル・シティ政策は、観光客の消費支出による経済波及効果を主たる目的とするのではなく、都市の持続的発展を支える創造的産業の立地やその担い手となる人材の定住などを最終目的としている。こうした観点から、創造産業の立地、フェスティバル関係者の働く場としてのフェスティバルなどの視点から現状と課題を抽出する。
- ・世界的なフェスティバル・シティとして知られるエディンバラの取り組みを参考とする。

(2) 拡大調査の種類

	定量調査	定性調査
(1) 専門家調査	<input type="radio"/>	
(2) 参加アーティスト調査		<input type="radio"/>
(3) スタッフ調査（推進組織含む）		<input type="radio"/>
(4) 各フェスティバルの来場者調査（社会的・文化的・経済的インパクト）		<input type="radio"/>
(5) 産業界調査	<input type="radio"/>	
(6) 市内ホテル調査		<input type="radio"/>
(7) 静岡市民意識調査		<input type="radio"/>
(8) 全国対象インターネット調査		<input type="radio"/>

○参考文献「国際文化芸術発信拠点形成事業フェスティバル評価システム構築業務 2019 報告書」P39・40・

41

また、本調査の実施にあたり学生の参画も求めるため「芸術文化観光プロジェクト実習2～4」に組み込むことを考え、以下の要領で募集を行った。結果として学生の申込みはなかった。

◆芸術文化・観光プロジェクト実習2～4◆ 『芸術文化観光学・研究調査プロジェクト』

豊岡演劇祭がもたらす、さまざまなインパクトを評価するプロジェクト。開催地域と演劇祭の周辺環境が調査対象。演劇祭には、地域内外の多様な人や組織が関与・参画しており「地域住民」「演劇祭実行委員会」「来訪者」「関連事業者」という4者 の視点から調査を予定。

- ・演劇祭期間前 8月 26 日～30 日、9月 2 日～6 日
- ・演劇祭期間中 9月 9 日～9月 23 日

●豊岡演劇祭「総合調査」の概要

本調査では、芸術文化観光の具体的な事例として「豊岡演劇祭」を選び、その開催地域と演劇祭の周辺環境を調査対象とし、豊岡演劇祭に参画・関与する、市民をはじめとする複合的な関係者を対象に調査を実施することとした。予定した調査項目は以下の通り。

- (1) 豊岡演劇祭の芸術的価値
- (2) 豊岡演劇祭に参加（観劇）する人たちの特性
- (3) 豊岡演劇祭により市民にもたらされる価値（1）
- (4) 豊岡演劇祭により市民にもたらされる価値（2）
- (5) 豊岡演劇祭の来訪者がもたらす経済的価値
- (6) 豊岡演劇祭のメディア掲出により豊岡ブランドにもたらす価値
- (7) 豊岡演劇祭で豊岡に滞在するアーティストが地域の人や社会にもたらす価値
- (8) 豊岡演劇祭を直接支える人にとっての演劇祭の価値
- (9) 演劇祭に資金提供する意図（期待する成果）は何で、その成果をどう評価しているのか
- (10) 実行委員会・演劇界にとっての豊岡演劇祭の価値

●個別調査の内容

1. 豊岡演劇祭（作品）の芸術的価値

【調査目的】

演劇祭で上演される作品の芸術的価値を専門家の視点から評価することで演劇祭そのものの芸術的価値を見定めることが可能となり、演劇業界におけるステータス評価に直結する。

【調査方法】

- (1) 専門家観劇 ディレクターズ・プログラムを批評者が観劇し批評を記す
- (2) 観客の採点 ディレクターズ・プログラム観劇者に対してアンケート調査

2. 豊岡演劇祭に参加（観劇）する人たちの特性（来訪者の実態）

【調査の背景】

毎年、豊岡市が演劇祭期間中に実施している公式アンケートがあり、同調査の実施に際し、本学教員（直井と野津）が毎年アドバイスを行っている。このアンケートに本調査で可視化したい設問を組み込むことが可能と考えられる。

【調査目的】

演劇祭で開催される各種プログラムに参加する人は、どのような人たちなのか、その実態を把握することを目的とする。

【調査方法】

書面によるアンケート調査 + 二次元バーコード利用のWEB調査

3. 豊岡演劇祭により豊岡市民にもたらされる価値（1）

【調査の背景】

豊岡市では、豊岡演劇祭がはじまる前の2016年（公表は2017年3月）、文化芸術振興に関する施策を総合的に推進する指針となる「豊岡市文化芸術振興計画」（2018 - 2022年度）の策定にあたり、市民等の意向を把握し基礎資料とする目的に「豊岡市の文化

芸術に関するアンケート調査」を実施している。

【調査目的】

豊岡演劇祭が市民にどのような価値をもたらしたのかを可視化することにある。調査対象は、「市民」「文化芸術団体（運営者）」に絞ることとし、個々の対象者にとって、演劇祭が行われていなかった2016年時と、2024年度演劇祭が終了した時点とで比較して、どのような変化が生じているかを問うこととする。

【調査方法】

豊岡市に本調査の目的と内容を説明したところ調査に協力して貰えることとなった。それによって市民対象の調査が可能となり、2016年度の調査との比較研究も可能となった。

- ・郵送による書面アンケート + 二次元バーコード利用によるWEB調査

4. 豊岡演劇祭により豊岡市民にもたらされる価値（2）

【調査の背景】

豊岡演劇祭のなかでも特殊な取り組みが行われているのが但東地域である。通常の演劇は、作品を提供する人・作品を鑑賞する人、という2項構造で構成されるが、但東地域において行われる公演は、そうした枠組みを超えて作品が上演されている。

【調査目的】

通常の公演とは異なる形態で構成される但東地域における公演は、但東地域の市民にとって、他地域とは異なる影響を与えていていることが想像される。同地域での作品の構造と市民との関係性、そして但東地域の市民が公演からどのような影響を受けているのかを明らかにする。

【調査方法】

市民・関係者に対する半構造化インタビュー

5. 豊岡演劇祭の来訪者がもたらす経済的価値

【調査目的】

- (1) 豊岡演劇祭への参加（観劇）者を対象にその消費実態を把握すること
- (2) 演劇祭の作品製作者や演者の消費実態もあわせて把握すること
- (3) 上記（1）（2）の調査を行うことで通常の旅行との差異があるかを確認すること

【調査方法】

- (1) (2) を対象に、留置アンケート調査またはQRコード利用のWEB調査

6. メディア掲出により豊岡ブランドにもたらす価値

【調査目的】

様々なメディアが豊岡演劇祭に関する情報を発信する。各種メディアのなかでも特にマスメディアが豊岡演劇祭を扱うことで、豊岡ブランドの向上に、どのように影響を与えているのかを計測して可視化することを目的とする。またメディア掲出による広告換算も行うこととする。

【調査方法】

- (1) マスメディア（新聞・テレビ・ラジオ）における豊岡演劇祭の掲出データを収集
- (2) 京阪神地区の不特定多数を対象にインターネットによる意見収集を行う。

7. アーティストが地域の人や社会に与える価値

【調査目的】

演劇祭における作品提供者の多くはクリエイターやアーティストといった属性の人が多い。従来、地域には稀有といえるこれら属性の人たちが豊岡市域に滞在し、作品の公演を行うことで、地域の人たちにどのような影響を与えている（価値をもたらしている）のかを把握する。

【調査対象】

カテゴリ①「演者」「製作者」、 カテゴリ②「滞在施設の人」「交流する地域の人」

【調査方法】

- (1) カテゴリ①②に対するWEBアンケート調査
- (2) カテゴリ①②に対するWEBでの半構造化インタビュー調査

8. 演劇祭を支える人にとっての演劇祭の価値

【調査目的】

演劇祭の開催にあたり、多くの人や組織がその活動を支援している。これら支援者は、どのような意図で演劇祭の支援を行い、その支援活動にどのような価値をみいだしているのかを明らかにする。

【調査方法】	調査対象	調査方法
	実行委員会事務局（地域協力隊員）	WEB調査/半構造化インタビュー
	サポートー（豊岡市内外一般市民）	WEB調査/半構造化インタビュー

9. 演劇祭に資金提供する意図（期待する成果）は何で、その成果をどう評価しているのか

【調査目的】

豊岡演劇祭は、主に国の地方創生推進交付金（交付金と同額の豊岡市負担金）、文化庁の補助金、そして豊岡市がふるさと納税で得た資金をもとに運営されている。本調査では、まず実行委員へのヒアリングにより演劇祭の財政構造を把握する。その後、主要な資金提供者が演劇祭に資金提供する理由（期待する成果）、そして演劇祭が創出した成果をどのように評価しているのかを明らかにするとともに、今後の資金提供の可能性、拠出先への要望などを調査する。

本調査は、資金提供の満足度（意図と成果）を明らかにするとともに、演劇祭実行委員会において、資金提供者の意図と成果にミスマッチがある場合、演劇祭の在り方や運営方法を見直す材料となり、今後の資金調達を行うツール開発に寄与する情報を得ることを目的とする。

【調査方法】	■調査対象	■調査内容	■調査方法
	豊岡市担当者	意図・成果評価・展望	対面または WEBインタビュー
	内閣府担当者	同 上	同 上
	文化庁担当者	同 上	同 上
	協賛企業担当者	同 上	同 上

10. 実行委員会・演劇界にとっての豊岡演劇祭の価値

【目的】

演劇祭の実施主体である実行委員会は、豊岡演劇祭の地域にもたらす価値をどう捉えているのか、また演劇業界全体に及ぼす価値をどのように捉えているのかを明らかにする。

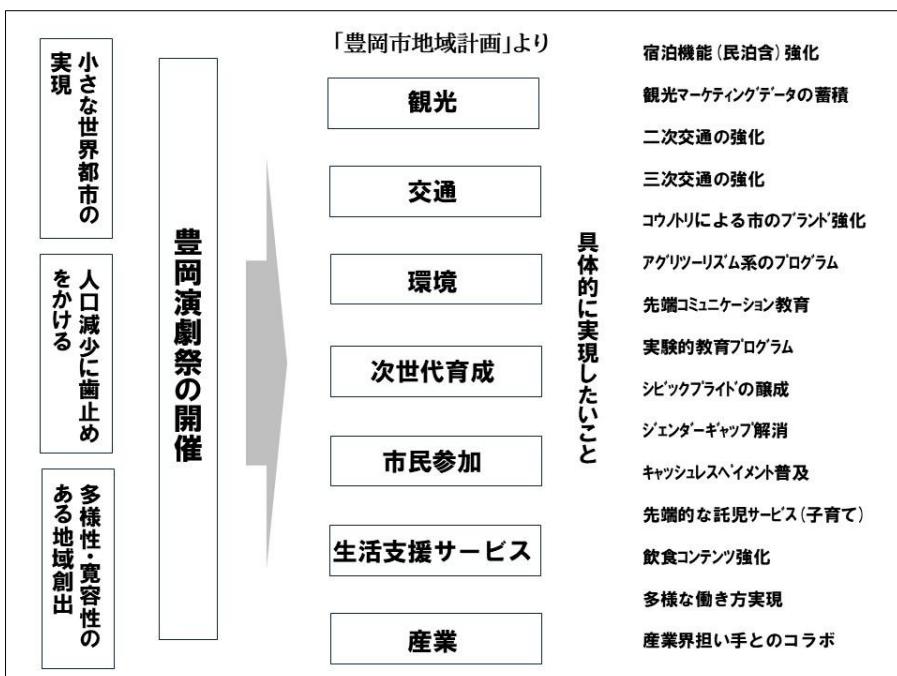
【調査方法】

半構造化インタビュー調査 (調査対象者は要検討)

●2024年度末時点の考察

結果として、すべての調査を年度内に完了することはできなかった。よって本報告書は報告書作成時点で完了した調査結果が記されていることを確認しておきたい。

最後に筆者担当の調査(未完了)について考察を記しておきたい。財政支援を行う豊岡市・文化庁のヒアリング調査において、政策立案時のロジックモデルが見あたらず、関係者の話から資料を探すと「豊岡市地域計画」がそれに該当することが想定された。そこで、同地域計画をロジックモデル風に表すと以下のように整理できる。



※「豊岡市地域計画」から筆者作成

演劇祭の開催によって図の右に列記されるアウトカムを創出するのは、かなりハードルが高く感じられたが、実際その成果は限られたものであった。豊岡市地域計画には、「演劇祭を実施する」という側面と、演劇祭を触媒として「地域政策を進める」という二つの側面が記されているが、後者の取り組みにおけるアウトカムの達成においては、実行委員会の人員含めた体制的な脆弱性が課題と思われる。インタビューを経てこの事例から見えてきたことは、特に地域政策系の政策評価を行うにあたっては、単線型のロジックモデルをベースに政策立案・評価を行うことには限界があり、KIAC の活動、演劇祭の開催、芸術文化観光専門職大学の開学といった複合的な取り組み（政策）が地域にインパクトを与える要因になっているという俯瞰する視点からの評価が必要ということである。なお、本調査報告では、豊岡市文化政策の政策評価の報告が詳述されるが、政策評価は本調査の一部であり、あくまで豊岡演劇祭が地域に与えるインパクトを可視化することであることを付記しておきたい。

また、本調査は本学教員が中心となって取り組んでいるが、リーディング・プロジェクト研究と個々の教員の興味関心（研究領域）が必ずしも一致しないことから研究リソースに限界があった。学生が調査に参画する実習が実現しなかったことも想定外であり、次年度以降の課題といえる。

———— 研究会の内容 ———

- 【研究会①】
- ・日時 2024年3月5日（火）13:30～16:00
 - ・場所 芸術文化観光専門職大学「ラーニングコモンズ」
 - ・内容 『芸術文化の価値とは何か』（水曜社・2022）を読む
講師：中村美亜（九州大学大学院芸術工学研究院教授／同書翻訳者）
◆「イギリスの文化的価値プロジェクト」（講師作成）
- 【研究会②】
- ・日時 2024年4月16日（火）16:00～17:30
 - ・場所 芸術文化観光専門職大学「大社研究室」
 - ・内容 （1）リーディング・プロジェクトの目的とその内容の確認
（2）「豊岡演劇祭の目的とその取り組み」
報告書：河村竜也（本学教員・豊岡演劇祭実行委員会）
◆「豊岡演劇祭 2023 報告書」（実行委員会ホームページ）
- 【研究会③】
- ・日時 2024年4月23日（火）14:30～16:00
 - ・場所 芸術文化観光専門職大学「大社研究室」
 - ・内容 （1）「豊岡演劇祭の地域への経済的効果」
報告者：直井岳人（本学教員）
◆「豊岡演劇祭関連プロジェクト（直井主担当）の概要」（報告著作成）
（2）「豊岡市の文化政策と住民意識調査」市民の芸術文化に対する意識と態度

報告者：藤野一夫（豊岡市文化芸術振興計画策定委員会委員長）

- ◆ 「豊岡市文化芸術振興計画」（豊岡市・2018）
- ◆ 「豊岡市の文化芸術に関するアンケート調査・報告書」（豊岡市・2017）

【研究会④】	・日時	2024年5月30日（木）14:00～16:00
	・場所	芸術文化観光専門職大学「ラーニングコモンズ」
	・内容	(1) 「演劇祭の来訪者特性と交通マネジメント」 報告者：野津直樹（本学教員・豊岡演劇祭実行委員会） (2) 読書会『プログラム評価ハンドブック』（晃洋書房・2020） 講師：小島寛大（本学教員・日本評価学会会員）
【研究会⑤】	・日時	2024年6月18日（火）13:15～15:15
	・場所	芸術文化観光専門職大学「ラーニングコモンズ」
	・内容	「静岡市において『フェスティバルがもたらす価値の評価・分析』をどのように実施したのか（フェスティバル評価システムについて）」 講師：片山泰輔（青山学院大学教授・フェスティバル評価研究会委員長） ◆ 「静岡市フェスティバル・シティ政策評価」（講師作成）
【研究会⑥⑦】	・日時	2024年7月16日・23日
	・場所	芸術文化観光専門職大学「大社研究室」
	・内容	調査設計に関する議論
【ヒアリング】	・日時	2024年7月30日（火）13:00～14:00
	・場所	東京大学先端科学技術センター
	・対象者	東京大学先端科学技術研究センター 特任助教 大野はな恵
	・内容	設問設計に関してのインタビュー

以上

4. シンポジウム記録【基調講演】



皆さん、こんにちは。

今ご紹介いただきました太下です。文化政策の研究をしています。今日は「クリエイティブ・ツーリズムと文化観光」という題をいただきまして、40分間という短い時間ですけれども、お話をさせていただこうと思っています。

先ほど、今日1日のプログラムの御紹介ありましたけれども、この後、豊岡演劇祭の総合評価という非常に面白そうなプログラムがありまして、最後、パネルディスカッションという形になっていますので、最初は前座と思って気楽に聞いてください。

●クリエイティブ・ツーリズムとは

お題をいただいた「クリエイティブ・ツーリズム」というところからまずお話をしたいと思います。この概念は、どんなものかというのを簡単に御理解いただくだけでも、今日の私の話のミッションは達成されると思っています。

クリエイティブ・ツーリズムは英語ですので、輸入された概念です。これもともとはクリスティン・レイモンドとグレッグ・リチャードという2人の世界的な観光コンサルタントである、彼らが作り出した概念です。彼らの最初の定義は、「休暇先の特徴であるコースや体験学習への積極的な参加を通じて、観光客が創造性の可能性を伸ばす機会を提供する」というものです。日本語で言うと、文化観光のような概念だと理解していただいて結構です。これを提唱したのが2000年です。クリエイティブ・ツーリズムという

語感もよかったです。結構いろんなところで取り上げられるようになります。

日本だと、ユネスコを世界遺産の認定機関とだけ思っていらっしゃる方もいるかもしれませんけど、もちろんそうではなくて、国際的な機関として、世界の文化政策、それから科学技術政策、教育政策を紹介しています。このユネスコは、クリエイティブシティーズネットワークという世界の文化都市をつなぐネットワーク事業を行っていますが、その一環で、クリエイティブ・ツーリズムに関する理解促進と普及振興に取り組んでいるという状況になります。

クリエイティブシティーズネットワーク（UCCN）を、簡単に御説明しておくと、世界の文化的な都市をユネスコが認定するという制度になっています。兵庫県でも篠山市が「クラフト&フォークアート」というカテゴリーで認定されています。ポイントはネットワークにあります。認定された都市同士が、様々な交流を行っていくところにポイントがあるわけです。

クリエイティブシティーズネットワークの一つの都市であるアメリカのサンタフェが「クラフト&フォークアート」に認定されていますが、2008年の9月の終わりから10月の頭にかけて、クリエイティブ・ツーリズムをテーマにした初めての国際会議、「サンタフェ国際クリエイティブ・ツーリズム会議」を開催しました。これはクリエイティブ・ツーリズムというものが世界的に認知される大きな契機になったと思います。この会議の中でも、クリエイティブ・ツーリズムの定義がさらに行われまして、そこでは「本物のアート、文化遺産、特別な場所において参加型の学習を通じた本物の体験を得る観光」と定義されています。

実は同じ年の10月に金沢市で「世界創造都市フォーラム2008」が開催されました。ここにも世界のクリエイティブシティーが参加したわけですが、そのシンポジウムのパネリストに、

たまたまサンタフェの文化担当の市議会議員が参加して、彼によって、クリエイティブ・ツーリズムという概念が日本に公式に初めて紹介されました。ですから、日本で言うと、2008年が最初の紹介のタイミングであったということになります。

創造都市論の第一人者である佐々木雅幸先生も、この流れの中で、クリエイティブ・ツーリズムについて解説をしておりますけれども、そこではこのように書かれています。

「マスツーリズムの弊害を避け、地域固有の文化資源を生かした新しいタイプのツーリズムであり、ツーリストと地域住民とが感動や体験を共有することにより、新たな価値を生み出し、地域の持続的発展に貢献するもの」。

ここで解説の内容にもう一つ意味が加わっているのですけれども、「ツーリストと地域住民とが感動と体験を共有することにより、新たな価値を生み出す」。要するに従来ツーリズムというのは、観光客の問題だったわけですが、そうではないのだと言っています。地域住民における価値というものがここで注目されている。そして、それが地域の持続的発展にも貢献することになってきているわけです。

クリエイティブ・ツーリズムというと、非常に新しい概念で、きらきらワードのようなイメージがありますけれども、そもそも観光の歴史をひも解いていくと、ヨーロッパの貴族の子弟たちが、文化的、または教育的な体験のために、若い頃にヨーロッパ各地を巡るという「グラン・ツアー」を、17世紀頃から行っていた風習に起源を遡ることができます。これはまさに各地域の文化・風俗に触れて教養を高めるということが目的だったのです。いわゆるツーリスト側からの体験という意味では、グラン・ツアーは、今日を描くツーリズムの原点と考えることもできるような気がします。

今、私がクリエイティブ・ツーリズムをどう考

えているのかというと、先ほどの佐々木先生の定義をさらに深めたといいますか、やはり観光客側、ツーリスト側だけのものではないだろうと考えています。ツーリズムのステークホルダーは大きく、地域内と地域外に分かれます。地域外のステークホルダーについては売上げイコール観光客数というように考えられることが多いですけれども、観光客が対象とする地域のクリエイティビティーを体験することを通じて、当該地域に愛着を持つようになり、継続的に関わるようになることが期待される場合があります。

一方で、地域内のステークホルダーも、非常に重要な役割を果たすと思います。これは地域における文化関係者であり、観光関係者だけではなくて、地域住民も入ってきます。地域内のステークホルダーからの新たな視点の導入により、地域の魅力を再認識し、誇りとアイデンティティーを醸成し、持続可能な地域づくりがより進展することが期待されるわけです。

このように地域内と、地域外の両方のステークホルダーが双方向的にクリエイティブな環境を作り出していくことをクリエイティブ・ツーリズムというように私は考えたいと思っております。すなわち、クリエイティブ・ツーリズムというのは、まさに観光における社会的インパクトを重視した概念と言ってもいいです。

ここまでが概念的な整理になりますけど、日本で実際に、クリエイティブ・ツーリズムが、うまくいっている、またはうまくいっているように見える事例というのはあるのでしょうか。豊岡と同じ日本海側にある福井県の「R E N E W」という取組を御紹介したいと思います。

一言で言うと、「R E N E W」は自治体でいうと、鯖江市、越前市、越前町、この辺りで開催されている工房見学イベントです。このエリアは、越前のほうは越前漆器とか、越前打刃物とか、越前箪笥、越前焼等々の様々な伝統的な工房が多数集積しています。一方、鯖江は眼鏡の町として

有名です。眼鏡の上流から下流までの様々な作り手たちがいまだに集積している世界的な眼鏡の産地になります。

こういった様々な工房企業が一斉に工房、工場を開放して、見学とかワークショップを行っています。一般の人々は、製品としてはもう知っているわけですけれども、その作られるプロセスとか、または作り手という存在は普段あんまり接する機会がないわけです。そういういたものを知りながら、実際自らワークショップや、技術の体験などを通じて、さらにそれを気に入れば、商品の購入をすることもできるという、非常にクリエイティブな取組が行われています。恐らく、この手の取組としては、国内最大級を担っていると思います。

R E N E Wの取組というのは、アウターブランディングとインナーブランディングの双方向的な関係だと書かれています。当然イベントですので、お客様として、地域内外から非常に多くの方々が来られるのです。観光客と言ってもいいですが、この人たちがいろんな発見をするわけです。今までは製品は知っていたかもしれない、例えば、越前漆器というものは知っていたかもしれないけど、その作り手のことは知らなかつた、またはどういうふうに作られるのかを知らなかつた。そういういたものを学び、その価値を新たに認識して、そして、そのこと

クリエイティブ・ツーリズムとは：事例

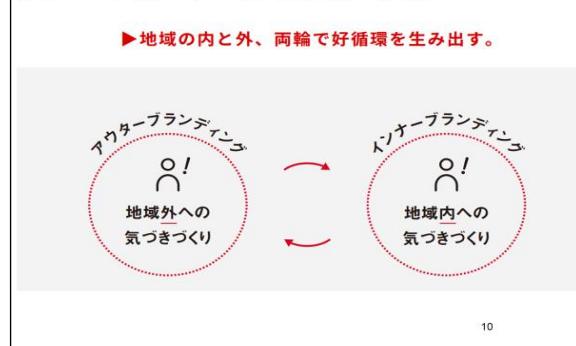


図1 R E N E Wの取組

さらにこの製品、ないしはその地域に対する意

識、愛着を持っていくという、アウターブランディングが期待されるわけです。

同時にそういったことで多くの方がこの地域に来ます。そして地域の人たちにとってみると、ごく日常的な光景であり、日常的なものや製品に対して、価値を見いだして、感動してくれるということは、自分たちが非常に普段普通に当たり前に持っているものというのは、かなりすごい価値を持っているということで、地域内の気づき、再認識につながっていく、これはインナーブランディングです。こういう両方のインとアウトの好循環が生み出されるじゃないかと思います。

この結果、R E N E Wに絡んで、新たな移住者、そしてその移住者が工房を経営する、または工房そのものじゃないけれども、何かクリエイティブな新しい職業を鯖江とか、越前の地域で始めることが実際に起こり始めているわけです。これはある意味、クリエイティブ・ツーリズムの一つの典型的な例であると思います。

●文化観光：その意義・重要性

ここからは先、文化庁の資料を基に文化観光について触れたいと思います。先ほど、クリエイティブ・ツーリズムは、日本語で言うと、文化観光と言ってもいいかもしれないというふうに申し上げましたが、日本で、文化観光というものが、今政府によって強く推進されています。2020年に文化観光推進法という法律もできています。ただ、今から思い出してみると、2020年はほんの4年前ですけれども、実は世界中がとんでもないことになっている時期でして、コロナ禍で世界中の観光がストップしたときに、非常にタイミング悪く文化観光推進法が出てきたというので、実は法律できて2、3年は実質的にあまり機能しないような状態でスタートしてしまったのです。

この文化観光推進法ですけれども、概要図2の囲みのところにちょっと書いてありますので読んでみましょう。「地域の様々な文化資源を磨き上げることで、文化についての理解を深める機会を充実させ、これによる国内外からの観光旅客の来訪を促進することにより、文化の振興、観光の振興、地域の活性化の好循環を生み出す」。官僚が書いた文章ですから、文法的な誤りもない、よどみなく読めるような文章ですが、あまり心に残らないなという気もしますけど。

文化観光推進法:2020年公布

地域の様々な文化資源を磨きあげることで文化についての理解を深める機会を充実させ、これによる国内外からの観光旅客の来訪を促進することにより、文化の振興、観光の振興、地域の活性化の好循環を生み出す。

文化観光推進法の主な内容

- ・「文化観光」：文化資源の観覧等を通じて文化についての理解を深めることを目的とする観光
- ・「文化観光拠点施設」：
博物館等の文化施設のうち、文化についての理解を深めるための解説紹介を行い、観光関係者に連携することにより、地域における文化観光の推進の拠点となるもの
- ・主務大臣（文部科学大臣及び国土交通大臣）が策定する基本方針に基づく拠点計画・地域計画を認定
 - ・文化施設による「地図計画」、自治体が組織する協議会による「地域計画」の2種類
 - ・手上げ方式（意識ある主体が申請）、設置主体（國・公・私）や規模を問わない
- ・認定計画に基づく事業に対して、法律上の特例措置や予算支援を行う
 - ・国や国立博物館が所有する文化資源を文化観光拠点施設において公開するする能力
 - ・公共交通機関券等の交通アセスの向上による手続き簡素化など、従来の文化政策では対応できなかった特例措置
 - ・博物館等を中心とした文化クラスター推進事業：15億円（令和2年度予算）Jによる支援

<https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/bunkakanko/pdf/92199401_06.pdf>

図2 文化観光推進法（2020年）

この法律ができるようになって、文化庁のほうでは文化観光の意義とか、重要性を改めて整理しています。このことが多分、今日のシンポジウムの趣旨に近い内容がより書かれているような気がします。全部で3つの項目が立てられています。

1つ目、「日本には文化財をはじめ、有形・無形の貴重かつ魅力ある文化資源が多く存在する。これらの文化資源の保存・修復などを適切に進めていくことを大前提として、多くの人々に文化資源の魅力を伝えることは、文化の保存・継承の意義の理解につながり、新たな文化の創造発展につながる」。これもよどみなく表現、普通に平明な言葉で書いてある文章です。

でもちょっと説明しますけれども、官僚が書く文章には、必ず意味があるのです。特に、普通の人がさらりと見過ごしてしまうかもしれない部分に意味があります。例えばここに書かれた

文章でいうと、「文化資源の保存・修復などを適切に進めていくことを大前提として」とありますが、当たり前ですね。何で当たり前のことわざわざ書くと思われるかもしれませんけど、これには意味があるのです。これは後でお話しします。

2つ目、「文化の振興を起点として、経済の牽引や国際相互理解の増進につながる観光の振興を図り、さらには人の往来や購買・宿泊などの消費活動の拡大などを通じた地域の活性化を実現することで、新しい文化の創造も含めた地域の振興に再投資される好循環が創出される」。これはある種、理想像を描いています。文化の振興や再投資、ここが一つのポイントであると思います。

3つ目、「文化観光の推進によって、地域住民が文化財などの文化資源の価値を再認識するとともに、地域への愛着心が高まり、地域住民自らの情報発信など、地域の活性化にもつながる」。まさに社会的な効果です。

今、文章で書いてある、硬い感じでしたけど、図3にすると、よりもっと分かりやすくなります。

文化観光推進法の目指す地域の姿というのは、こういう図になるのです。一番上の文化の右上から始めると、「文化資源の保存・活用」、これは当たり前で、当然やっていかなければいけないことです。このことが、地域の文化資源として魅力を持つ、そして右下に行くと、これが観光の資



図3 文化・観光・経済の好循環

源にもなるという（ことですが）、「地域の魅力が向上する」・「来訪者が増加する」とあります。どういうことが起こるかというと、この左側のほうに来て、「人の往来・消費活動を拡大する」と、「地域ブランドを向上する」と、こういったことを通じて、地域経済が活性化するでしょう。そのことがさらにもう一回、矢印が文化のほうに向かって、地域の文化に対する再投資という好循環を生み出すというわけです。

これは文化観光推進法が目指している、理想としている、文化に再投資される好循環というモデルです。こういうことで、文化観光推進法ができたのですね。

●文化観光拠点施設を中心とした地域における文化観光の推進に関する法律（文化観光推進法）について

この法律は、単なる理念法ではないのです。もし仮にこれが理念法だとすると、「文化の観光というのは非常にすばらしいから進めましょう。以上」で終わるのです。理念法じゃないので、実はポイントがあって、主な内容の点々のところがポイントになります。

この法律の中で、文化観光拠点施設というものが定義されています。文化観光拠点施設って何なのというと、定義を読み上げますと、「博物館などの文化施設のうち、文化についての理解を深めるための解説紹介を行い、観光関係者と連携することにより、地域における文化観光の推進の拠点となるもの」とあります。それに「博物館などの」と書いていますけど、劇場は入らないのと思われるかもしれません、「など」と書いたら、大抵のものは何でもほかにも入ります。どうせん劇場も入ります。

これを地域ごとに考えてもらって、それを（地域が）文化庁に申請してもらい、文化庁側が審査の上、認定できるもの、いいと思われるものは認定しましょうということです。そして認定され

たものに対しては、いろいろな手続の簡素化、例えば交通関係とか、港湾手続の簡素化との特例措置を図るか、財政的な支援をします。こういう立てつけになっているわけです。

さっきちょっと申し上げましたけど、豊岡の場合は、城崎国際アートセンターを文化観光拠点施設ということにして認定計画を策定されて、それが認定されています。

一応、認定計画に2種類があって、拠点計画と地域計画という2つのパターンです。これ何が違うかというと、そんなに違いはないですけれども、もうザクつと言うと、地域計画のほうがより広い意味だということです。おおむねですけれども、全県レベル、または県内のかなり広い地域、複数の自治体も入れたものが地域計画になり、特定の文化施設を中心とした、ある程度限られたエリアでの展開が拠点計画になるわけです。こういうふうに考えていただければ結構です。

ただし、実はこれは、官僚が設定したにしては割とアバウトな区分で、両者の間に明確な線引きはありません。結果として認定されたものというのは、うちは、これは拠点だと考えていますから、我々は、これは地域計画と考えていますという申請ベースで採択されていますので、全体の認定されたものを見ると、地域計画の割には狭いものもあります。拠点計画の割には広過ぎるじゃないかとか、地域計画にしてはちょっとステークホルダーが少ないじゃないかみたいなのも若干あったりもする状況になっています。

全国で、今年の8月時点では、53（計画）の認定がなされています。毎年、数が積み重なっています。兵庫県内ですと、篠山が認定されています。丹波伝統工芸公園を中心とした拠点計画です。

●文化観光推進法とその他の法律

今、文化観光推進法は、2020年公布・施行というお話を簡単にしたわけですけども、この法律

は急にぱっと出てきたわけではない。本学ですと、観光を専門に研究されている方、学んでいる方がいらっしゃるので、釈迦に説法になってしまふかもしれませんけれども、もともと日本は、特に訪日外国人を中心とした観光というものに非常に近年、力を入れているわけです。これの大いな節目が、安倍政権時代だったと思いますけれども、2016年に「明日の日本を支える観光ビジョン構想会議」というものが設けられて、ここで目標が設定されました。

2016年時点の目標ですが、この中でよくマスコミ等に取り上げられたのは、幾つか数字あるうちの一番上で、訪日外国人旅行者数の目標です。当時の目標では、最初は、2020年に2,000万人、2030年に3,000万人になりました。ところが、2020年ベースの2,000万人というのが、あつという間にクリアできちゃったというところで、「じゃあ、どうするだろう」と思っていたら、急に一気に倍増したのです。2020年4,000万人、2030年6,000万人というなかなか大胆な積増しです。なので、2020年4,000万人、2030年6,000万人というのが、当時の安倍政権で作られた訪日外国人旅行者数の目標ということになります。

4,000万人は多分、近々達成できるだろうというふうに思います。一方、2030年の6,000万人については、恐らく数として達成不可能ではないですが、6,000万人を本当に達成しようと思うと、一つ大きなハードルがあるのです。それは何かというと、要はオーバーツーリズムの問題です。訪日外国人のお客さん、数多く日本に来ていますけれども、実は、彼らが行く場所というのではなく特定の場所に集中しています。具体的な場所でいうと、東京、富士山、京都、みんな、東海道新幹線沿いになんです。いわゆる「ゴールデンルート」というふうに言われています。

この趨勢を伸ばしていくとすると無理があるのです。東京はまだキャパシティーがあるかもしれませんけど、富士山と京都はほぼないで

す。新幹線によく乗られる方は、分かっていると思いますけど、新幹線の乗車率も今非常に高いです。じゃあ、新幹線が増便できるかというと、今現状、ピーク時は2、3分ピッチで時速300キロ近い列車が走っているので、これもあり得ないです。

となると、どうしたらいいのか。すごいシンプルです。現状以外のゴールデンルートを創ればよいと、観光庁は考えたわけです。これが当時の観光庁の一番の目玉政策です。新しいゴールデンルートをつくろう。実は私もこの委員だったのですけれども、委員をやりながら、この政策はないだろうと思いました。ないだろうというのは、仮に政府が、ここゴールデンルートですとつくって、観光客がそのとおり動くのかというと、動かないですよ。観光というのは人から押し付けられて移動するというものじゃないので、発想としておかしいと思っていたのです。

ところが、政府がゴールデンルートつくるって、現実問題として結構難しいのです。例えば、兵庫県のエリアで政府がゴールデンルートをつくりましたという場合を想定して、もしも仮に豊岡がルート外れちゃいましたという時に、豊岡の皆さんには、素直に納得しますか。「政府が作ったのだし、しようがねえ」とはならず、あんまり納得感がないですよね。そこで、政府はどうしたかというと、各地域ブロックからの応募、申請によるものを認めていくと、そういうスタンスを取ったのです。どういうゴールデンルートが提案されてくるのか、それを見て審査してみればいいということでした。

結果として分かったことは、非常に日本の現象で、各ブロック内で実質的な談合が行われて、基本提案は各ブロックに1件ずつ上がってくるということになりました。そして、例えば、四国エリアでは、四国全域がゴールデンルートですと、そういう認定結果となったのです。一体どこがゴールデンルートだというのかという感

じで、もう日本中が全部、ゴールデンルートです。

本来は、へんてこりんな話だし、ナンセンスですけれども、私は、文化観光の推進に当たっては、意味があると思ったのです。要するにどこの地域もこれから発展し得る可能性があるということです。そして、国がゴールデンルートを定めたということは、定めた後、そこに何らかの財政措置とか、特例措置を施していくこと、そういう思惑があるわけです。そうすると結果として、日本全域がゴールデンルートになったこと自体は現象としてナンセンスだけど、日本全国がやる気があれば、そういった補助をもらえる可能性が残ったということです。ナンセンスが、結果オーライになった感じです。

さつき、2016年頃に国の目標が定められたと言いましたけど、何で2016年頃だったのかといいますと、一つの背景に、オリンピックというのがありました。2020年に東京でオリンピックが開催されるということだったのですけど、オリンピックというのは、多くの方はスポーツの国際的な祭典というふうに思っていらっしゃると思いますけれども、もちろんそれは間違いではないですが、実はオリンピックはスポーツの祭典であると同時に文化の祭典でもあるのです。それが、近年で顕著だったのは2012年のロンドン大会、あとは今年のパリ大会も実はそうでしたけど、ロンドン大会が文化に着目して大成功だったということです。

2016年のときには、リオが終わって、次は東京だというときに、実はロンドン大会は、ロンドンだけじゃなくて、イギリス全土で文化プログラムがあつて、これも日本で同様なことをすべきだろうと、ロンドン大会の規模を上回る文化プログラムを日本全国でやるべきじゃないかと、こういう議論が起こってきました。そして、訪日外国人旅行者数の2020年4,000万人に文化プログラムが貢献するというロジックが政府のほう

でつくられています。これが非常に大きな背景としてあったわけです。

このことを裏打ちするかのように、あまり知られてないかもしれませんけど、2016年に、これは当時の観光庁の長官の久保さんと、当時の文化庁の長官の青柳先生、お二人の記者会見ですけど、文化庁と観光庁が包括的連携協定というものを締結しました。これが2016年です。ちなみにこの包括的連携協定、今スポーツ庁を加え、3庁による包括的連携協定に発展しています。

在野の私のような人間からすると、包括的連携協定を締結しないと一緒に仕事ができないのかしらと思ってしまうのですが、そんなことは別にして、もともと文部科学省系列の文化庁と国土交通省系列の観光庁が、とにかくオリンピックを背景に一緒にやろうといように、ほかに例がないような包括的連携協定を結んだということはかなり大きなインパクトがあったのです。

そして翌2017年に、文化芸術基本法といが施行・公布されました。これはもともと、2001年につくられていました文化芸術振興基本法というのを大きく改正する法律です。字面でいうと、文化芸術振興の「振興」の2文字が落ちたという点です。それだけかと思うかもしれませんけど、ポイントは、改正の趣旨です。

文化芸術基本法(2017年)

文化芸術振興基本法の一部を改正する法律概要

第一 総則

1. 文化芸術の振興にとどまらず、観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業その他の各関連分野における施策を法律の範囲に取り込むこと
2. 文化芸術により生み出される様々な価値を文化芸術の継承、発展及び創造に活用すること

第二 改正の概要

1. 頭文字等 法律の題名を「文化芸術基本法」に改めるとともに、前文及び目的について所要の整理を行う。

2. 総則 基本理念を改めるとともに、文化芸術団体の役割、関係者相互の連携及び協働並びに税制上の措置を規定する。
（基本理念の内容）
① 文化芸術の振興は経済的な状況にかかわらず等しく文化芸術の鑑賞等ができる環境の整備、②我が国及び「世界」において文化芸術活動が活発に行われる環境を整備、③児童生徒等に対する文化芸術に関する教育の重要性、④観光、まちづくり、国際交流などの各関連分野における施策との有機的な連携

3. 文化芸術推進基本計画等

- 政府が定める「文化芸術推進基本計画」、地方公共団体が定める「地方文化芸術推進基本計画」（努力義務）について規定する。

この図4のマーカーの部分になります。ちょ

図4 文化芸術基本法（2017年）

っと読んでみます。「文化芸術の振興にとどまらず、観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業その他の各関連分野における施策を法律の

範囲に取り込むこと」。これも官僚が書いた文章で味わい深いです。特に、「文化芸術の振興にとどまらず」の部分ですね。旧来の文化芸術振興基本法は当然ですけど、文化芸術を振興するための法律でした。そして、新しい本率では、それは当然だとしつつも、その上にその他様々な政策分野を取り組んでいくということです。要するに文化芸術政策が総合政策だということをここで宣言しているのです。そして、その趣旨の順番に、意味があります。観光が一番重要だということです。

同じく、2017年に文化庁は、文化経済戦略というものを、この法律とは別途、並行して策定しています。そこに基本となる6つの視点というのを上げていますけど、当然ここにもオリンピックの話、観光の話も入っていたわけです。

翌年、2018年には、国際文化交流の祭典の実施の推進に関する法律ということができます。これはマイナーな法律で知らないと思います。日常生活には全く関係ないので、別に知らなくてもいいです。何のための法律かというと、大規模な祭典、例えば豊岡の演劇祭もそうかもしれません、そういうものをもっともっと推進していくということです。でも、これがつくられたときに、何らそれに伴う財政的な措置がなされませんでした。だから、法律としては、ちょっと問題です。それに気づいた官僚が、新しい仕掛けを考えます。それが、日本博というものになります。「JAPAN CULTURAL EXPO」、何かすし屋のロゴみたいのがついていますけど、そしてエキスポというと、何か万博を想像させますけど、別に万博とは関係ないです。日本全国いろんなところで行われる様々な文化プロジェクトを国としてきちんと財政面から支援していくこと、かなり大型の助成金になります。この背景に、文化観光推進法というものの検討が入ってくるわけです。当然これは、訪日外国人というものが大きなターゲットにな

っていくことになります。

さらに時間が前に戻っちゃいますけど、2018年には、文化財保護法の非常に大きな改正がありました。文化財保護法自体は、ちょろちょろ改正はされているのですけど、この改正は非常に大きな改正です。やはり改正の趣旨が上のほうに書いてあります。これもちょっと読んでみましょうか。「過疎化・少子高齢化などを背景に、文化財の滅失や散財、散逸などの防止が緊急の課題であり、未指定を含めた文化財をまちづくりに生かし、地域社会総がかりで、その継承に取り組んでいくことが必要。このため、地域における文化財の計画的な保存・活用の促進や、地方文化財保護行政の推進力強化を図る」。これも官僚が作ったので、なかなか味わい深い文章です。

どこが味わい深いかと、多分皆さん取っ掛かりがなく、ずっと入っていたと思います。最後のほうから、下から2行目です、「文化財の計画的な保存・活用の促進」、もし、今日この場に、文化財保護行政に関わっているプロパーの方がいたら、すごく敏感に反応します。「活用」という2文字です。文化財保護法はその名のとおり、文化財を保護するための法律です。大変ですもんね、保護しないと。従来の改正前の文化財保護

文化財保護法の改正(2018年4月1日施行)

趣旨　過疎化・少子高齢化などを背景に、文化財の滅失や散逸等の防止が緊急の課題であり、未指定を含めた文化財をまちづくりに活かし、地域社会総がかりで、その継承に取り組んでいくことが必要。このため、地域における文化財の計画的な保存・活用の促進や、地方文化財保護行政の推進力の強化を図る。

概要

1. 文化財保護法の一部改正

(1) 地域における文化財の総合的な保存・活用

① 都道府県は、文化財の保存・活用に関する総合的な施策の**大綱**を策定できる

【第183条の2第1項】

② 市町村は、都道府県の大綱を勘案し、文化財の保存・活用に関する総合的な**計画**（文化財保存活用地域計画）を作成し、国の認定を申請できる。計画作成等に当たっては、住民の意見の反映に努めるとともに、**協議会**を組織できる。（協議会は市町村、都道府県、文化財の所有者、文化財保存活用団体（ほか、学識経験者、商工会、観光関係団体などの必要な者で構成））

【第183条の3第1項、同条第3項、第183条の9】

【計画の認定を受けることによる効果】

・國の登録文化財とすべき物件を提案できることとし、未指定文化財の確実な継承を推進
・現状変更の許可など文化行政長官の権限に属する事務の一部について、都道府県・市のみならず認定町村でも行うこと可能とし、認定計画の円滑な実施を促進

③ 市町村は、地域において、文化財所有者の相談に応じたり調査研究を行ったりする民間団体等を**文化財保存活用支援団体**として指定できる

【第192条の2、第192条の3】

図5 文化財保護法の改定（2018年施行）

法は、活用のことは一切触れません。これを活用しようということです。保護と活用が両輪だということをここで初めて明言しています。

これに関しては、本当にいろいろ議論がありました。さらにさりげなく書かれていますけど、その後で、「地方文化財保護行政の推進力の強化を図る」。これ何かというと、従来、文化財保護行政というのは、教育委員会の所管でした。そういうふうに定められています。それが、いわゆる首長部局でも所管できるということになりました。

首長部局で所管できるということはどういうことかというと、首長部局のほかの部局、例えば観光、まちづくり、地域振興、こういう部局との連携がより進めやすいということです。どっかで聞いたフレーズですけど、これは、先ほどの文化芸術基本法の改正の趣旨とぴったりとするはずです。要するに、個々の法律というのは単体でつくられたり、改正されたりしているわけではなくて、一定の大きなストーリーみたいなものに沿って、それぞれが連関する形で改正されていくということになります、ということでかなり大きく改正されました。さらにそれに基づいて、博物館法の改正、本当にかなり大きな70年ぶりと言われる改正をしました。このように、一連のものがつながっていくということになっていくのです。ここに文化観光推進法が乗っかってきたということです。こういう大きなフレームをまず振り返ったわけです。

●オーバーツーリズムと「プラス万博」

あともうほとんど時間がないので、若干だけ触ると、さっきお話しした、今、観光における一番大きな問題は、オーバーツーリズムです。直近では、2023年、昨年定めた「観光立国推進基本計画（第4次）」というものが動いています。この中で、実は昨年に大きな転換点がありました。この上の部分、目標という部分で、

「持続可能な形での観光立国の復活に向か、質の向上を重視する観点から、人数に依存しない指標を中心に設定」とあります。これもなかなか

か味わい深い文章です。簡単に言うと、前に立てた人数の目標はもうやめますということになっているわけです。その代わり、じゃあ何なのっていうと、その下にあります、消費額、消費単価に注目していこうとこういうことです。

この背景には、実はコロナ前の動きが接続さ

2023年: 観光立国推進基本計画(第4次)

(参考) 観光立国推進基本計画(第4次)概要 -持続可能な形での観光立国の復活に向けて-

国土交通省

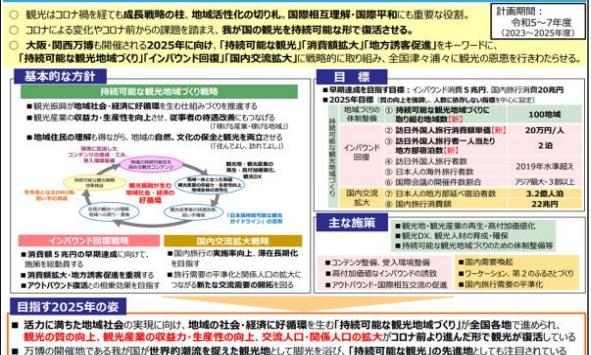


図6 観光立国推進基本計画（第4次）（2023年）

れているわけです。我々コロナで随分翻弄されて、感覚がちょっとずれちゃったというか、鈍っちゃったというのがあるのですけど、もしコロナがなければ、今、一番観光において問題になっているのはオーバーツーリズムです。もう持続可能じゃないんじゃないかということが言われていました。

観光庁も2018年にそのための専門本部をつくりています。これは日本だけの問題じゃないです。実は、同じく2018年にUFWTO、世界観光機関が「オーバーツーリズム」という特集の白書を出しています。

さらには、コロナの直前で、2019年の10月末にG20の観光大臣会合が日本の北海道の俱知安で行われましたけども、そのときの主要なテーマの一つが、やはり「オーバーツーリズム」です。これは、日本語で言うと、観光公害です。コロナで一度ゼロクリアだったので、みんなないことになっちゃったんですけど、抜本的課題は何ら解決していません。観光客がまた回復してくると、全くこのコロナ前と同じ、オーバーツーリズムの課題が再浮上するということになります。

ちなみに日本で最初に観光公害という概念を提起したのは、梅棹忠夫先生です。梅棹先生は1970年の講演の中で、観光公害という言葉を使っています。

オーバーツーリズムの問題は、抜本的な解決方法は、実はないということです。関所でもつくって、とにかく日本に外国人を入れないということができれば、オーバーツーリズムは解決しますけれども、一方で、もっともっと観光振興をしていこうというアクセルを踏んでいる中で、抜本的な解決策はありません。ミクロな対症療法ですが、例えばタイムシフト、集中する時間ももっと分散させましょう、朝とか夜のナイトカルチャー。あとはやはりミクロのレベルでのプレイスシフト、特定の場所に集中するから、それをもっと分散させましょうということで、京都でいえば、特定の寺院とかじゃなくて、もっともっと日の当たってない観光スポットを開発して、分散させていくというプレイスシフトがありますけれども、抜本的な解決にならないです。

一方で、日本は島国ですので、日本に入国する外国人の98%ぐらいは空港から入国しています。最近はクルーズ船とかもありますけれども、それにしてもごく一部です。実は、各空港では、これから一応6,000万人というのを出しちゃったので、それを受け入れるために様々な増強計画というのをつくっているのですけども、なかなか単純にはそういかないです。関空ですと、2018年、コロナ前ベースで764万人の関空からの入国がありました。2030年に、いろんな滑走路の運用とか、施設の増強とか当たっていっても、せいぜい1,000万人から1,200万人ぐらいまでしかいかない。そう考えると実は、今たくさん受け入れている空港をそのまま伸ばしていくべきいいということではなくて、それ以外の空港がひとしく、これを担っていくかなくてはいけないです。例えば、小松空港では、計算すると、現状だと約9万弱ですけれども、これがもしかしたら90万人分

ぐらい受け入れないと、政府がもともと考えていた目標には達成できないようになってきます。

但馬空港もそうです。但馬空港、今現状って、ほとんど入国はしないはずです。仮に1,000人として考えても、もしかしたら2030年ぐらいには1万人ぐらい入国してもらわないといけないかもしれません。でも、年間、但馬空港から1万人入国する状況を考えると、大分景色が変わってきます。

実は、オリンピックのときに、東京に人が集中するかもしれないと言われました。でも、羽田も成田もキャパは一杯で、東京都内のホテルもほとんどいっぱいでした。じゃあ、どうすればいいかというときに、首都圏以外の全国の空港を活用すれば良いというアイデアが提示されました。内陸県を除いて、日本はなぜか、ほとんど各県に空港があって、ほとんどの空港から、足は短いですけど国際線が飛んでいます。だったら、各地方空港から入港してもらって、その地方に長期滞在してもらって、もしオリンピックを見たいというのだったら、「どうぞ、新幹線なり、高速バスなり、飛行機で移動することができます」。多分全国から日帰りもできます。そういう「プラス東京」が望ましいではないかという話も出ていました。

実は、政令指定都市市長会で、「プラス東京」という政策が採択されています。恐らく、2025、来年万博ですけれども、同様です。万博も関空だけでは処理できないであれば、もう全国の空港から入国してもらって、そしてそこに長期滞在をしてもらって、もし万博を見たければ、「どうぞ、日帰りもできますよ」と、こういう形で各地域に訪日外国人を移動する、「プラス万博」が望ましいではないかなと思います。その一つのキーに、芸術祭というのが位置づけられるかもしれません。こういう話で、私の話は終わりにさせていただきたいと思います。どうも御清聴ありがとうございました。



図7 講演者 太下義之 氏

【豊岡演劇祭の総合評価に係る研究報告】

豊岡演劇祭2024上演作品の芸術的価値に関する アンケート調査と報告

熊倉 敬聰

(芸術文化観光専門職大学 芸術文化・観光学部 教授)

はじめに

本稿は、豊岡演劇祭2024において上演された作品の芸術的価値に関して、特に観劇経験の豊かさと芸術的価値の評価との関連性に注目してアンケート調査を行った結果の報告を目的とする。

ただし、豊岡演劇祭2024全体としては、公式プログラム、フリンジプログラム、関連プログラムを合わせると約70のプログラムがあるため、その全てに対してアンケート調査を行うことは困難であることから、特に作品の芸術的価値を担保していると思われる公式プログラムのディレクターズ・プログラムを対象にアンケート調査を行った。作品としては、マームとジプシー『Chair/IL POSTO』（9月13日・14日・15日、芸術文化専門職大学・静思堂シアター）、Platz市民演劇プロジェクト『空き家』（9月15日・16日、豊岡市民プラザ）、KIACレジデンス・セレクション2023→24：コーンカーン・ルーンサワーン『Mali Bucha: Dance Offering』（9月13日・14日・15日、城崎国際アートセンター）、岩下徹(dance)×梅津和時(sax./cl.)即興セッション『みみをすます(谷川俊太郎同名詩より)』（9月16日、ワークス・サントピア、9月21日、あさご芸術の森美術館、9月23日、ショッピングタウンペア）、たじま児童演劇『転校生』（9月6日・7日・8日、江原河畔劇場）、青年団『銀河鉄道の夜』舞台手話通訳付き公演（9月14日・15日、江原河畔劇場）、読売テレビプロデュース『ムーンライト・セレナーデを聴きな

がら』（9月14日・15日、出石永楽館）、堀川炎『野火』（9月22日・23日、出石永楽館）、んまつーぽス×Unlock Dancing Plaza（9月23日、やぶ市民交流広場ホール）の計9作品であった。（なお、やはりディレクターズ・プログラムである、スリーピルバーグス第2回野外公演inスタジアム！『リバーサイド名球会』に関しては、アンケート調査スタッフの都合によりアンケート調査を行うことができなかった。）

1. 「上演作品の芸術的価値に関する アンケート」

筆者は、作品の芸術的価値の評価と観劇経験の豊富さとの間に有意な関連性があるのではないかと仮定し、以下の仮説を立て、アンケート調査に臨んだ。「観劇経験の豊富さと作品の芸術的価値の評価には関連性があるのではないか？ 観劇経験が豊かな人ほど、作品の芸術的価値の評価が厳しいのではないか？」

上記の演目の上演会場で観客に配布したアンケートでは、以下の五つの問い合わせて回答してもらった（問5を除き、全ての回答は選択式で1回のみ）。

- 問1：豊岡演劇祭に来るのは何回目ですか？
- 問2：今回の豊岡演劇祭では、いくつの作品を観劇しますか？
- 問3：年に何回、舞台芸術作品（演劇・ダンス・音楽など）を鑑賞しますか？
- 問4：今回鑑賞した作品の芸術的価値を星の数で評価するとしたら、いくつの星をつけますか？

問5：なぜその星の数をつけたか、その理由をお書きください。

そして、問1に対しての回答としては、①初めて ②2回目 ③3回目 ④4回目。問2に対しての回答としては、①この作品だけ ②2～3作品 ③4～5作品 ④6～10作品 ⑤10作品以上。問3に対しての回答としては、①今回だけ ②2～3回 ③4～5回 ④6～10回 ⑤11～20回 ⑥20回以上。問4に対しての回答としては、

- ①★★★★★ 芸術的価値が非常に高い
- ②★★★★ 芸術的価値がかなり高い
- ③★★★ 芸術的価値が高くも低くもない
- ④★★ 芸術的価値がかなり低い
- ⑤★ 芸術的価値が非常に低い。

2. アンケート結果、ならびに問1・2・3と問4のクロス集計結果

「問1：豊岡演劇祭に来るのは何回目ですか？」
有効回答数：1,100。以下、①から⑤は問4の星の数を表すが、アンケートでは上記のように①～⑤の番号と星の数が逆転していたため、クロス集計ではその逆転を修正し、①=星一つ～⑤=星五つとして集計した。「/」前の数字は人数、後の数字は各項目でその人数が占める割合を示す。

1回目：513人

①0/0%, ②3/0. 58%, ③51/9. 94%, ④181/35. 28%
⑤223/43. 47%

2回目：239人

①1/0. 42%, ②1/0. 42%, ③14/5. 86%, ④81/33. 89%, ⑤116/48. 54%

3回目：182人

①0/0%, ②1/0. 55%, ③33/18. 13%, ④68/37. 36%,
⑤64/35. 16%

4回目：166人

①0/0%, ②3/1. 80%, ③15/9. 04%, ④69/41. 57%,
⑤67/40. 36%

さらに、低評価①②と高評価④⑤の数値を纏めてみる。

1回目：513人

①②3/0. 58%, ③51/9. 94%, ④⑤404/78. 75%

2回目：239人

①②2/0. 84%, ③14/5. 86%, ④⑤197/82. 43%

3回目：182人

①②1/0. 55%, ③33/18. 13%, ④⑤132/72. 52%

4回目：166人

①②3/1. 80%, ③15/9. 04%, ④⑤136/81. 93%

「問2：今回の豊岡演劇祭では、いくつの作品を観劇しますか？」

有効回答数：1,099。

この作品だけ：485人

①1/0. 20%, ②3/0. 62%, ③57/11. 75%, ④175/36. 08%, ⑤198/40. 82%

2～3作品：313人

①0/0%, ②3/0. 96%, ③30/9. 58%, ④116/37. 06%,
⑤138/44. 09%

4～5作品：150人

①0/0%, ②1/0. 67%, ③15/10. 00%, ④57/38. 00%,
⑤65/43. 33%

5～10作品：99人

①0/0%, ②1/1. 01%, ③6/6. 06%, ④32/32. 32%, ⑤42/42. 42%

10作品以上：52人

①0/0%, ②0/0%, ③5/9. 62%, ④20/38. 46%, ⑤25/48. 08%

さらに、低評価①②と高評価④⑤の数値を纏めてみる。

この作品だけ：485人

①②4/0. 82%, ③57/11. 75%, ④⑤373/76. 90%

2～3作品：313人

①②3/0. 96%, ③30/9. 58%, ④⑤254/81. 15%

4～5作品：150人

①②1/0. 67%, ③15/10. 00%, ④⑤122/81. 33%

5～10作品：99人

①②1/1. 01%, ③6/6. 06%, ④⑤74/74. 74%

10作品以上：52人

①②0/0%, ③5/9. 62%, ④⑤45/86. 54%

「問3：年に何回、舞台芸術作品（演劇・ダン

ス・音楽など)を鑑賞しますか?」

有効回答数: 1,093。

今回だけ: 210人

①0/0%, ②4/1. 90%, ③28/13. 33%, ④73/34. 76%,

⑤83/39. 52%

2~3回: 371人

①0/0%, ②2/0. 54%, ③38/10. 24%, ④140/37. 74%,

⑤154/41. 51%

4~5回: 183人

①0/0%, ②1/0. 55%, ③17/9. 29%, ④71/38. 80%,

⑤81/44. 26%

5~10回: 152人

①0/0%, ②1/0. 66%, ③9/5. 92%, ④45/29. 61%, ⑤

83/54. 61%

11~20回: 94人

①0/0%, ②0/0%, ③10/10. 64%, ④39/41. 49%, ⑤

38/40. 43%

20回以上: 83人

①1/1. 20%, ②0/0%, ③10/12. 05%, ④32/38. 55%,

⑤31/37. 35%

さらに、低評価①②と高評価④⑤の数値を纏めてみる。

今回だけ: 210人

①②4/1. 90%, ③28/13. 33%, ④⑤156/74. 28%

2~3回: 371人

①②2/0. 54%, ③38/10. 24%, ④⑤294/79. 25%

4~5回: 183人

①②1/0. 55%, ③17/9. 29%, ④⑤152/83. 06%

5~10回: 152人

①②1/0. 66%, ③9/5. 92%, ④⑤128/84. 22%

11~20回: 94人

①②0/0%, ③10/10. 64%, ④⑤77/81. 92%

20回以上: 83人

①②1/1. 20%, ③10/12. 05%, ④⑤63/75. 90%

3. アンケート結果のまとめ

まず、「問1: 豊岡演劇祭に来るのは何回目ですか?」と「問4: 今回鑑賞した作品の芸術的価値を星の数で評価するとしたら、いくつの星をつけますか?」のクロス集計の結果は、1

回目から4回目の低評価①②が、0. 58%, 0. 84%, 0. 55%, 1. 80%と、有意な差が見られなかった。高評価④⑤は、78. 75%, 82. 43%, 72. 52%, 81. 93%となり、低評価に比べて72%台~82%台と振れ幅は広いが、1回目と3回目が70%台で並び、2回目と4回目が80%台で並んでいて、ここにも特段有意な差が見られるとは言い難い。

次に「問2: 今回の豊岡演劇祭では、いくつの作品を観劇しますか?」と問4のクロス集計の結果は、「この作品だけ」から「10作品以上」の低評価①②が、0. 82%, 0. 96%, 0. 67%, 1. 01%, 0. 00%と、ここでも有意な差が見られなかった。高評価④⑤は、76. 90%, 81. 15%, 81. 33%, 74. 74%, 86. 54%と、「この作品だけ」と「5~10作品」が70%台で並び、「2~3作品」「4~5作品」「10作品以上」が80%台と、問1同様、ここでも特段有意な差が見られるとは言い難かった。

最後に「問3: 年に何回、舞台芸術作品(演劇・ダンス・音楽など)を鑑賞しますか?」と問4のクロス集計の結果は、「今回だけ」から「20回以上」の低評価①②が、1. 90%, 0. 54%, 0. 55%, 0. 66%, 0. 00%, 1. 20%と、ここでも有意な差が見られなかった。高評価④⑤は、74. 28%, 79. 25%, 83. 06%, 84. 22%, 81. 92%, 75. 90%と、「今回だけ」という鑑賞経験が一番少ない人たちと「20回以上」という鑑賞経験が一番多い人たちが共に最も高評価が少なく75%前後、他の鑑賞回数の人たちも共に80%前後と、ここでも問1・問2同様、有意な差があるとは言い難かった。

おわりに

筆者は、本稿の冒頭で述べたように、今回のアンケート調査に臨むにあたり、「観劇経験の豊富さと作品の芸術的価値の評価には関連性があるのではないか?」観劇経験が豊かな人ほど、作品の芸術的価値の評価が厳しいのではないか?」という仮説を立てた。しかし、「観劇経験の豊富さ」を問う問1・問2・問3と「芸

術的価値の評価」を問う問4のクロス集計の結果は、いずれもその関連性を証拠立てるような有意な差を示すことはなかった。

つまり、本アンケート調査による結論はこのようになるだろう。「観劇経験の豊富さと作品の芸術的価値の評価には有意な関連性が見受けられなかった。よって、必ずしも観劇経験が豊かな人ほど作品の芸術的価値の評価が厳しいわけではない。」

筆者は、自らの批評家としての経験からいつても、上記仮説が本アンケート調査によって論証されると予期していたが、実際は観劇経験の豊富さと作品の芸術的価値の評価には有意な関連性がみられないという結果となり、この結果をどのように解釈すべきかいまだ思案中である。この結果は、問3があることから、豊岡演劇祭特有の現象とは言えないと解釈されるが、今回の結論がはたして今後の豊岡演劇祭、さらには他の演劇祭にも汎用性のある結論なのかどうかは、今後の豊岡演劇祭での追跡調査、さらには他の演劇祭での同様の調査を行うことにより明らかになることだろう。

謝辞

本アンケート調査にご協力いただいた豊岡演劇祭運営スタッフの皆さんに改めて感謝いたします。そして、本アンケート調査の入力ならびに集計にご協力いただいた芸術文化観光専門職大学一期生五月女桜子さん、二期生芋生留奈さん、四期生田中もえさん、中満香穂さんに感謝いたします。

豊岡演劇祭来場者の行動的セグメントの特性

直井 岳人

(芸術文化観光専門職大学 芸術文化・観光学部 教授)

はじめに

本稿では、兵庫県で開催された豊岡演劇祭2024公式来場者アンケートへの回答をデータとし、開催地外からの同演劇祭来場者のセグメント（類似したグループ）の特性を分析した結果を報告する。豊岡演劇祭は、2020年より、2021年コロナ禍による中止を挟み、毎年9月に兵庫県但馬地域を中心に開催され、2024年で4回目を迎えた。同報告者は、2022年より、豊岡演劇祭公式来場者アンケートへの回答をもとに、来場者の「来場前」の先有傾向（過去の開催地への訪問及び演劇祭への来場経験など）、「来場中」の行動および演劇祭や開催地に対する評価、「将来」の演劇祭来場および開催地訪問意向の関係を明らかにすることを目的とした研究を行っている（直井・野津・河村, 2023, 2024）。本調査では、来場者の豊岡演劇祭2024来場前の先有傾向に当たる「過去の豊岡演劇祭来場経験の有無」、「過去の豊岡演劇祭開催地（但馬地域）への訪問経験の有無」、豊岡演劇祭2024来場中の行動に当たる「宿泊の有無」に基づいて、豊岡演劇祭2024公式来場者アンケート回答者を「有」、「無」の2セグメントに分け、セグメント間で「同演劇祭来場中の行動と評価」、「将来の開催地訪問意向」に違いが見られるかどうかを検証した。同演劇祭来場者の特性の違いを踏まえた誘客のための手がかりを提供するのが本調査の実学的な目的である。

セグメンテーション

セグメンテーションは、観光においては「すべての訪問客などの市場全体、または休暇旅行や出張などの市場を、マーケティング目的でサブグループまたはセグメントに分割するプロセス」と定義できる（Middleton, Fyall & Morgan, 2009, p. 101）。セグメンテーションは、人々の好み、ニーズ、態度、ライフスタイル、家族の規模や構成などが異なるという認識（Chissnall, 1985）、および、ニーズ、要望、要件、期待が似た消費者がいるという認識

（Morrison, 2022）に基づいており、市場を細分化し、ターゲットとする消費者セグメントにあつたマーケティング施策を打ち出すために必要だとされる（コトラー, 2003）。

訪問客に関する調査で参照されるセグメンテーションは多様だが、居住地や職場のある場所をもとにした「地理的（geographic source）」、年齢などを基にした「人口統計学的（demographic）」、職業などの「社会経済的（socio economic）」、「行動的（behavioral）」セグメンテーションが主なものとしてあげられる（Morrison, 2022）。このうち「行動的セグメンテーション」は、訪問頻度（例：初回訪問客かリピーターか）、滞在期間（例：日帰り客か宿泊客か）、出費、目的など、訪問客の多様な行動特性に係わる（Morrison, 2022）。また、このセグメンテーションは、上記の他のセグメンテーション（年齢、職業、居住地など）と比べ、回答者（訪問客）が普段から意識するものではないが、彼らの旅行中の行動特性をよ

り直接的に表すものである。

豊岡演劇祭2024公式来場者アンケートは、後述の通り「行動的セグメンテーション」を可能とする回答（データ）を収集する質問項目を含んでおり、本調査ではこのセグメンテーションをもとに回答者の特性の理解を目指す。

調査概要

豊岡演劇祭2024の公式来場者アンケート調査では、2024年9月6日（金曜日）から9月23日（月曜日）までの会期中に、A4両面1枚アンケートが客席留置き方式で配布・回収された。紙媒体のアンケート用紙には、同じ内容のWEBアンケート（Google Form）にアクセスするための二次元バーコードとURLが印刷され、WEBアンケートでの回答も可とし、回答期間は同年9月30日（月曜日）までとした。なお、開催期間を通して1回のみアンケートに回答するよう依頼した。以上の調査の結果、1,550名分の有効回答が得られた（WEBアンケートによる回答は110名）。なお、同アンケートへの回答のうち、豊岡演劇祭2024の兵庫県但馬地域の開催地（但馬地域以外の開催地は兵庫県宝塚市）である豊岡市、養父市、朝来市、香美町からの来場者は、但馬地域の開催地の住民とみなされ、後述するいくつかの質問に答えることができないため、これらの来場者を除く615名分の回答を分析対象とした。

分析概要

豊岡演劇祭2024公式来場者アンケートでは、前述の「行動的セグメンテーション」に関わる、「但馬地域の豊岡演劇祭2024開催地訪問経験（初めて、数回くらい、數え切れないくらい、過去に住んでいた、の4択）」（以下、開催地訪問経験）、「豊岡演劇祭来場経験（今回が初めて、2回目、3回目、4回目、の4択）」（以下、演劇祭来場経験）、「宿泊日数（日帰り、1泊、2泊、3泊以上、の4択）」という質問項目を含

む。本調査では、「開催地訪問経験」、「演劇祭来場経験」と「宿泊日数」への回答をそれぞれ「無（開催地訪問経験・演劇祭来場経験がない、日帰り）」と「有（それ以外）」に分け、それをセグメントとした。なお、「開催地訪問経験」と「宿泊日数」は、但馬地域の開催地外からの来場者のみに回答を依頼している。

以上の「有」、「無」のセグメントを従属変数（カテゴリー）、以下の表1に示す項目を従属変数とし、両セグメントの間に評定平均値に有意な差があるかを、両セグメントの回答の分布の等分散性が仮定できる場合は独立したサンプルのt検定、仮定できない場合はWelchの検定を用いて検証した。表1中の①などの丸付きの数字は、データ入力時に変換した数値を表している。例えば①は1に変換している。なお、表1に示す項目は、選択肢間の程度の差が等間隔（間隔尺度）とみなしうると考えられる。

表1：従属変数

変数名	選択肢
訪問地数	その他を含む19選択肢（場所）を複数回答可で選択してもらい、選択された場所の実数を集計
会場間の移動の評価	③はい、②どちらともいえない、①いいえ、より1択
観劇有料公演数	実数を記入（観劇していない場合は0を記入）
観劇無料公演数	実数を記入（観劇していない場合は0を記入）
豊岡演劇祭2024の感想	④大変良かった、③良かった、②普通、①良くなかった、より1択

分析結果

回答者の概要、本調査の分析対象となる変数に関する回答の分布は表2の通りである。

表2：回答者の概要と回答の分布

項目	選択肢	人数
年齢	15歳未満	25
	15-24歳	57
	25-34歳	63
	35-44歳	69
	45-54歳	117
	55-64歳	156
	65-74歳	81
	75歳以上	31
	無回答	16
居住地 (2桁回答人数 以外はその他)	兵庫県	209
	京都府	85
	大阪府	81
	東京都	60
	鳥取県	32
	神奈川県	25
	愛知県	22
	その他	101
	無	305
開催地訪問経験	有	299
	無回答	11
	無	335
演劇祭来場経験	有	170
	無回答	110
	無	273
宿泊日数	宿泊	329
	日帰り	13
	無回答	13

表2から、年齢は中年層が目立ち、居住地は兵庫県が3分の1強の人数を占める。但馬地域の開催地については、有る回答者と無い回答者がほぼ同じ割合である。宿泊に関しては、宿泊した回答者がやや多いが、日帰りの回答者との人数の差はそれほど大きくない。豊岡演劇祭の来場は初めての人が半分を超えている。

なお、表1に示す従属変数については、記述統計を算出し、その結果は表3の通りとなった。

表3：記述統計の結果

変数名	平均値	標準偏差	無回答数
訪問地数	0.89	1.22	当てはまらず
会場間の移動の評価(3段階)	2.6	0.65	156
観劇有料公演数	1.96	1.79	204
観劇無料公演数	1.22	2.32	391
豊岡演劇祭2024の感想(4段階)	3.46	0.6	170

「会場間の移動の評価」と「豊岡演劇祭2024の感想」は平均値がかなり高いことが分かる。また、「会場間の移動の評価」と「豊岡演劇祭2024の感想」以外は、平均値に対して標準偏差が大きいものが多く、かなりばらつきがある。また「訪問地数」以外は、両面アンケート用紙の裏面に配されていたこともあってか、無回答数がかなり多く、分析の信頼性の観点から懸念が残る結果である。なお、「訪問地数」は、どこにも訪問していない回答者がいる可能性があるため、選択されたものがなくても無回答とは限らない。

続いて、「開催地訪問経験」、「演劇祭来場経験」、「宿泊日数」の「有」、「無」を従属変数、表1に示す項目を従属変数とし、両セグメントの間に評定平均値に有意な差があるかを検証した結果を表4に示す。また、等分散性の検定(F検定)の結果と、用いられた検定の種類も表4に示す。なお、紙面の関係で、表4には有意な差が見られたもののみ示す。

表4から、「開催地訪問経験」、「演劇祭来場経験」がある回答者、「宿泊した」回答者は、観劇有料公演数の平均値が有意に高いことが分かる。また、「宿泊した」回答者は、訪問地数の平均値も有意に高いが、「会場間の移動の評価」の平均値は有意に低いことも分かる。

表4：平均値の差の検定

カテゴリー	区分	平均値	検定/p値
開催地訪問経験	無	1.39	Welch/
	有	2.44	6.25e-10
変数			F検定p値
			2.20e-16
カテゴリー	区分	平均値	検定/p値
演劇祭来場経験	無	1.47	Welch/
	有	2.82	2.67e-10
変数			F検定p値
			2.20e-16
カテゴリー	区分	平均値	検定/p値
宿泊日数	日帰り	0.43	Welch/
	宿泊	1.28	2.20e-16
変数			F検定p値
			2.20e-16
カテゴリー	区分	平均値	検定/p値
宿泊日数	日帰り	1.38	Welch/
	宿泊	2.3	8.41e-13
変数			F検定p値
			5.20e-09
カテゴリー	区分	平均値	検定/p値
宿泊日数	日帰り	2.7	対応のないt検定
	宿泊	2.53	0.005
変数			F検定p値
			0.056
会場間の移動の評価			

考 察

表4から、「開催地訪問経験」、「演劇祭来場経験」がある回答者、「宿泊した」回答者は、有料公演数をより多く観劇する傾向がある。宿泊客は、日帰り客よりも開催地あるいは周辺に長時間滞在する場合が殆どだと考えられ、全体傾向として予想できる結果だと考えられる。

「演劇祭来場経験」に関しては、観光地一般的な場合を考えると、過去の経験があることで見残し・やり残しの余地が減り、必ずしもその観光地の再訪に繋がるとは限らないと思われる。ただ、豊岡演劇祭の場合は、毎年新たな演目の上演の機会がある。また、表3に見られる「豊岡演劇祭2024の感想」の評定平均値が高く、同様に高い平均値が2022年、2023年の開催地外からの来場者を対象としたアンケート調査の結果

にも見られる（直井ほか, 2023, 2024）ことから、演劇祭に対する累積的な高い評価がありつつ、毎回新たな経験ができるという認識が、演劇祭来場者がより多くの有料公演も観劇する傾向と関係する可能性が考えられる。「開催地訪問経験」に関しては「演劇祭来場経験」との重複があることもあるが、演劇祭の来場経験は無いが開催地の訪問経験がある回答者もいる。豊岡演劇祭では、但馬地域内でも3市1町に跨がる複数の場所で演目が上演されており、本調査の結果から確かなことは言えないが、開催地の様々な場所の印象が、そこで上演される演目の鑑賞に繋がった可能性が考えられる。

「宿泊日数」に関しては、「宿泊した」回答者が演目をより多く見る傾向に加え、より多くの場所を訪問する傾向も示唆されている。観劇演目数が場所の訪問数に繋がった可能性があるが、豊岡演劇祭の演目の上演場所が散らばっているため、場所の移動が生じ、それもきっかけとなり、演目とは直接関係ない場所の訪問が生じた可能性もある。

「会場間の移動に関しては」、評定値は悪くはないものの、「宿泊した」回答者の評価が低い傾向が見られる。「宿泊した」回答者がより多くの演目を観劇し、より多くの場所を訪問する傾向が見られたことと合わせて考えると、移動範囲が広がる分、交通の不便さを感じる機会が増えたことが理由の1つとして考えられる。

本調査の結果から示唆できることは限りがあるが、演目の上演場所が広域に跨がること、演目の更新があることが、来場者経験の積み重なりと、滞在時間の長期化と関係する可能性が考えられる。

制 約

本稿における報告では、行動的セグメンテーションを意識し、「有無」というわかりやすい区分をもとに分析を行った。ただ、「演劇祭来場経験」、「開催地訪問経験」、「宿泊日数」とも、実際は、数回、数泊といった程度の段階

があり、豊岡演劇祭2024公式来場者アンケートでも、それぞれに関して4段階で程度をたずねている。また、表1に示す変数も間隔尺度だと考えられるため、「演劇祭来場経験」、「開催地訪問経験」、「宿泊日数」とこれらの変数との相関関係を分析することで、今回示唆されなかつた傾向が見られる可能性がある。

また、本稿で報告した分析では、「演劇祭来場経験」、「開催地訪問経験」、「宿泊日数」の「有」、「無」それぞれのセグメントの人数が数百あつたため、対応のないt検定、およびWelchの検定を行ったが、先述の通り、表1に示す変数は分布にかなりばらつきがある。また、豊岡演劇祭2024公式来場者アンケートには「豊岡演劇祭再来場意向」を尋ねる項目があるが、選択肢が「絶対行く」、「たぶん行く」、「分からない」、「行かない」で、「たぶん行かない」がないため、選択肢の間に順序関係はある（順序尺度だとみなしうる）が等間隔だとは仮定できず、上記の検定の対象としなかった。例えばスピアマンの相関係数とその有意確率を算出することで、このような変数間の関係を、回答の分布の状況に大きく影響されずに検証できる可能性がある。

謝 辞

本研究はJSPS科研費 JP24K00032の助成を受けたものである。また、豊岡演劇祭2024公式アンケート調査のデータの活用を許可して下さった、豊岡演劇祭実行委員会ならびに豊岡市観光文化部観光政策課の皆様に謝意を表する。

文 献

フィリップ・コトラー、ジョン・ボーエン、ジエームズ・マーキンズ（著）、白井義男（監修）、平林祥（訳）（2023）コトラーのホスピタリティ&ツーリズム・マーケティング 第3版 ピアソン・エデュケーション
Middleton, V. T. C., Fyall, A., Morgan, M., & Ranchhod, A. (2009). Marketing in

Travel and Tourism (4th ed.). London: Routledge.

Morrison, A. M. (2022). Tourism marketing in the age of the consumer. London: Routledge.

直井岳人・野津直樹・河村竜也（2023）演劇祭による観光への時空間的影響：豊岡演劇祭2022を事例とした試行的分析 芸術文化観光学研究（2），131-138.

直井岳人・野津直樹・河村竜也（2024）演劇祭来場者の行動に時空間的影響を及ぼす要因：豊岡演劇祭 2023 初回来場者とリピーターの比較 芸術文化観光学研究（3），130-138.

豊岡演劇祭の地域への「真水」の追加的経済効果計測の試み

小畠 克典

(芸術文化観光専門職大学 芸術文化・観光学部 准教授)

はじめに

ここでは、豊岡演劇祭が開催地に及ぼす経済効果について、「真水」部分を取り出して計測する試みについて報告する。

各種芸術祭の経済効果について一律の評価軸が存在するわけではない。そもそも、各芸術祭は各々ユニークな目的・運営形態・ファンディングの構造を持っており、それらの価値が一律の評価軸で計測可能だと考えることは、一種乱暴でもある。しかし一方で、芸術祭の成果や効果を、何かしら納得感の得られる軸を用いて計測し、広く社会に共有することは、芸術祭の存在意義を議論する上で大きな材料となるだろう。また、それが、他の芸術祭との間で一定の比較可能性を持つことも重要である。

そこで、今回、豊岡演劇祭について、「非経済的」「非金銭的」価値を一旦横におき、金銭的な指標で計測可能な「経済効果」に焦点を当てる。さらに、「他のイベントとの比較可能性」を意識した経済効果の計測方法の可能性を検討する。具体的には、英国エдинバラ・フェスティバルが用いる経済効果計測手法の援用を試みる。

1. 豊岡演劇祭の経済効果

豊岡演劇祭は、毎年、演劇祭を通じた豊岡市での観光消費額と豊岡市への経済波及効果を公表している。2023年9月に開催された豊岡演劇祭2023については、観光消費額は112,601千

円、経済効果は191,421千円と推計されている。

ただしそこでは、必ずしも「演劇祭があったからこそ」の経済効果を切り出した計測は行われていない。

例えば「豊岡演劇祭の観光消費額・経済波及効果」として計上されている観光消費に下記のケースを含めることの是非については、議論の余地があるだろう：

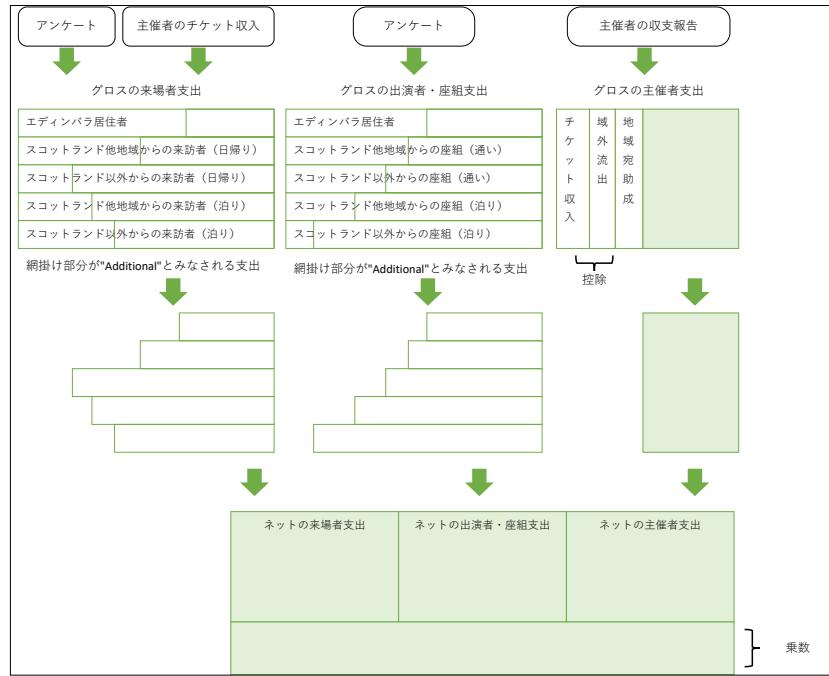
- ・演劇祭がなかったとしても、開催地域在住者が、同時期に豊岡市内で行ったであろう消費
- ・演劇祭がなかったとしても、開催地域を同時期に訪れた観光客による消費
- ・それが演劇祭でなかったとしても、同時に他のイベントが開催されていたら、開催地域で在住者・観光客が行なっていたであろう消費

逆に、演劇祭を種目艇として開催地を訪れた訪問者による観光消費は、「演劇祭があったからこそ」の消費として経済効果に貢献しているとみなしうる。

「豊岡演劇祭があったからこそ」の経済効果をより正確に計測するためには、上記を考慮した観光消費額の加除を行う必要がある。

2. エдинバラ・フェスティバルにおける経済効果の計測

英国、スコットランドの首都であるエдинバラでは、年間を通じて11の芸術祭（フェスティバル）が開催され、年間300万人以上の来場者を迎える。



各フェスティバルは個別に運営されるが、これらが協働で設立したFestivals Edinburgh（エдинバラ・フェスティバル）が、11のフェスティバルを束ねる形でプロモーション、活動成果のアセスメント等を行なっている。

2011年以降、2015年、2022年の合計3回にわたり、エдинバラ・フェスティバルは、フェスティバルがスコットランド及びエдинバラにもたらす経済効果の計測を実施した。

以下、エдинバラ・フェスティバルが2023年6月に公表したレポートとテクニカル・レポートに即して、彼らが採用している経済効果の計測手法について簡単にまとめてみる。

(1) エдинバラ・フェスティバルの経済効果測定手法（概観）

$$\text{経済効果} = \text{来場者による支出} \cdots (4)$$

- + 出演者と座組関係者による支出 … (5)
- + 主催者による支出 … (6)
- * 乗数 … (7)

(2) 測定の材料

- ① 来場者による支出（来場者アンケート（22,000超）、公演のチケット情報）
- ② 出演者と座組関係者による支出（出演者アンケート）
- ③ 主催者による支出（主催者の収支報告）
- ④ 乗数（Scottish Tourism Multipliersに依拠）

(3) 計測に通底する考え方=Additionality (追加性)

計測に際しては、あくまでも「フェスティバルによる追加的な経済効果」を抽出している。すなわち、フェスティバルによる追加的な経済効果でないと見なされる支出項目を名目の経済効果から控除し、フェスティバルがあったからこそその「真水の」経済効果を測定することとしている。主な控除項目は次の3つである：

- Deadweight (自重) : フェスティバルがなくとも支出されていたと推計される金額
- Displacement (移転) : 地域内の他項目からの振替であり、真水ではない支出額
- Leakage (流出) : 地域外への支出額

$$(4) \text{ 来場者の支出額} = \\ 1\text{日あたりの支出金額} \times \text{滞在日数}$$

A. ネット訪問客数の推計

まず、総来場者数からネットの訪問客数を抽出することが必要となる。1人の訪問客が複数イベントに来場している可能性を考慮するためである。

$$\text{ネット訪問客数} = \text{総来場者数} \\ \div \text{一人当たりの参加イベント数}$$

B. 訪問客の5分類（地元居住者/域外からの訪問者、泊り/日帰り）

① エдинバラ居住者

- ②スコットランド他地域からの日帰訪問者
- ③スコットランド以外からの日帰訪問者
- ④スコットランド他地域からの泊り訪問者
- ⑤スコットランド以外からの泊り訪問者

C. 訪問客1人1日の項目毎支出額（9分類）

- ①宿泊費
- ②飲食費（フェスティバル会場）
- ③飲食費（フェスティバル会場外）
- ④その他エンターテイメント（クラブ等）
- ⑤買い物（フェスティバル会場。プログラム、グッズ等）
- ⑥エдинバラ市内の公共交通機関
- ⑦買い物（フェスティバル会場外）
- ⑧エдинバラ・スコットランド迄の交通費
- ⑨チケット代の支出はアンケートからではなく、フェスティバル会場のチケット収入の集計をもとに算出

下記2点には留意を要する：

- a. フェスティバル会場の内と外での支出の分別（フェスティバルがなくとも支出されていたであろう金額を特定するため）
- b. エдинバラ市内での交通費とエдинバラ・スコットランドに来るまでの交通費の分別（開催地までの交通費は、必ずしも開催地の経済に貢献しないため）

D. 追加性の計測（1）全体旅程アプローチ（Whole Trip Approach）

スコットランド外からの訪問客が10日間スコットランドで過ごし、うちエдинバラ・フェスティバルを訪れたのは6日間だとする。

「もし、その訪問客が、『フェスティバルが無かつたらエдинバラには来なかつた』と述べた場合には、10日分の旅程の支出全体を、フェスティバルの経済効果として計上する」

すなわち、フェスティバルの存在が、エдинバラの経済にとって追加的な効果を産んだとみなす。

E. 追加性の計測（2）「フェスティバルなかりせば」

アンケートに次の質問を用意している：

問：「もし（この）フェスティバルが無かつたら、あなたは、今、どうしていると思いますか？」

- ①家にいるか仕事をしている
- ②それでもやはりエдинバラに来て、何か他のことをしている
- ③スコットランドの他の場所に行っている
- ④スコットランドではないどこか他の場所に行っている

例えば、エдинバラ在住者の殆どは、この質問に対して①か②で回答する。すなわち、フェスティバルがなくともエдинバラで仕事をするか余暇を過ごすかして、エдинバラで（他の何らかの形で）支出するのだから、フェスティバルがあったからこそその追加的な支出はないと考える。

従って、エдинバラ在住者がフェスティバル期間中にエдинバラで消費する金額は、エдинバラ・フェスティバルの経済効果ではないとみなすこととなる。

F. フェスティバル間の重複計上（一日に複数のフェスティバルに来場するケース）の考慮

（5）出演者と座組関係者の支出額

$$= \text{1日あたりの支出金額} \times \text{滞在日数}$$

（6）フェスティバル主催者による支出

- ①コア・スタッフへの支出
- ②フェスティバル・オフィスの経費
- ③フェスティバル開催にかかるその他経費
- ④出演者へのギャランティー支払い

これらは、まさにフェスティバルがあればこそその支出ではあるが、ここでも、追加性の分析が必要となる。すなわち、主催者から提出を受けた収支について、支出額を以下の通り調整し

ている：

- a. チケット収入の金額を控除（来場者の支出との二重計上を排除）
- b. 追加性分析（1）：域外流出金額を控除（域外への支払いは開催地の経済効果と見做さない）
- c. 追加性分析（2）：国・地方自治体から当該地域への助成金額を控除（そのフェスティバルが無かったとしても、他のルートで当該地域に助成金が支出されていただろうと看做すため）
- d. 財団や基金からの助成金・補助金は、すべて追加的とみなし、控除しない

（7）乗数

Scottish Tourism Multipliers Studies (STMS)による乗数（エディンバラは1.52）を使用。但し、フェスティバル主催者による支出については、観光支出ではなく、事務経費の支出であるとみなし、Non-tourism Multiplierを使用。

3. エдинバラ・フェスティバルの計測手法の、豊岡演劇祭への援用

上記のエдинバラ・フェスティバルにおける経済効果の計測手法を豊岡演劇祭に援用するに当たっては、特に、追加性の計測をどのようにして可能にするかが課題となる。一方で、これまでの豊岡演劇祭における経済効果の測定と平仄を取った形での計測でなければ、指標の継続性の担保が難しくなる。

これを受け、2024年の豊岡演劇祭の来場者アンケートでは、下記の1点の変更を加えることとした：

＜豊岡演劇祭2023でのアンケート＞

Q8 今回の旅行は豊岡演劇祭2023が主な目的ですか（当てはまる数字に○をつけてください）

（はい） ← 4・3・2・1 → （いいえ）

＜豊岡演劇祭2024でのアンケート＞

- Q11 もし豊岡演劇祭2024がなかったら、あなたは、演劇祭の会期と同じ期間にどうお過ごしだったと思いますか？
- (1) 家にいるか仕事をしていたと思う
 - (2) 但馬地域の豊岡演劇祭の開催地（豊岡市、養父市、朝来市、香美町）で何か他のことをしていたと思う
 - (3) 但馬地域の豊岡演劇祭の開催地以外の場所に行っていたと思う

このアンケートを受けた回答については、今回の新たな設問によって新たに判明する事項を分析しつつ、下記項目について従前の分析・公表内容との平仄を取って進める必要がある：

1. 来場者アンケートからの経済効果の算出
2. 動員数を用いた経済効果の算出
3. アーティストアンケートからの経済効果の算出
4. 実行委員会の支出からの経済効果の算出

おわりに

豊岡演劇祭2024の来場者アンケートの総回答数1,550件のうち、演劇祭に関する予算の金額に回答したものは、1,024件であった（ゼロと回答したものを含む）。

ここから、演劇祭開催地の居住者と、演劇祭の有無に関わらず何らかの形で演劇祭の開催地に経済効果をもたらしていたと思われる回答者を除くと、残りの回答者、すなわち、演劇祭開催地の外に居住しており、かつ、演劇祭があったからこそ但馬地域にきたと回答した回答者は、362名であった。

今後は、従前から公表されている豊岡演劇祭の経済波及効果の計測と平仄を取りつつ、演劇祭の「追加的経済効果」についての分析をさらに進めることとなる。

謝　　辞

original.pdf?1688566135, 最終閲覧2025年
1月20日)

本報告の作成にあたっては、豊岡市観光政策課、
豊岡演劇祭実行委員会に多大な協力をいただ
いた。この場を借りて厚くお礼申し上げる。

文　　献

豊岡演劇祭実行委員会(2024)「豊岡演劇祭2023
報告書」

(<https://drive.google.com/file/d/1GasXPwi0SLT-6ZGW-6H4HgxZqeLji35q/view>, 最終
閲覧2025年1月20日) p. 63

平田オリザ(2023)「但馬日記 演劇は町を変
えたか」岩波書店、p. 201

谷口みゆき(2024)「書評：平田オリザ著 『但
馬日記 演劇は町を変えたか』 岩波書店、
2023年」『文化経済学』第21巻第1号（通算
56号）pp. 81-82

Crossick, Geoffrey and P. Kaszynska, *The AHRC
Cultural Value Project, The AHRC Cultural
Value Project*

(<https://www.ukri.org/wp-content/uploads/2021/11/AHRC-291121-UnderstandingTheValueOfArts-CulturalValueProjectReport.pdf>, 最終閲覧2025年1月20日)、(中村美亜訳
『芸術文化の価値とは何か - 個人や社会
にもたらす変化とその評価』水曜社、2022
年)

BOP Consulting and EdinbrughFesitvalCity.com,
Economic Impact of the Edinburgh Festivals
(https://www.edinburghfestivalcity.com/assets/old/Edinburgh_Festivals_Impact_Study_digital_original.pdf, 最終閲覧2025年1月
20日)

BOP Consulting, *Festivals Edinburgh, Economic
Impact of the Edinburgh Festivals, Technical
Report*
(https://www.edinburghfestivalcity.com/assets/000/000/352/Edinburgh_Festivals_Impact_Study_-_Technical_Report_June_2023_

豊岡演劇祭2024サポートスタッフ調査による演劇祭のインパクト

古賀 弥生

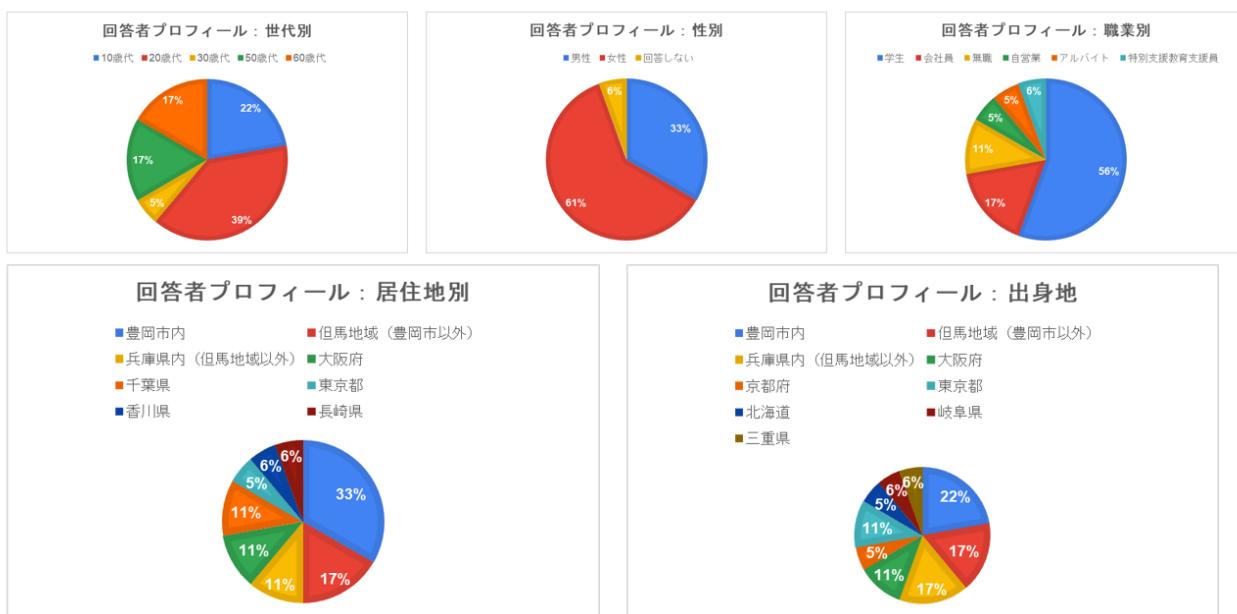
(芸術文化観光専門職大学 芸術文化・観光学部 教授)

はじめに

本稿は、サポートスタッフとして豊岡演劇祭2024に参加した人々の視点から見た演劇祭の影響を探ることを目的とする。

サポートスタッフは、アーティスト・観客・地域をつなぐサポート役として2023年度から募集されることになった、いわゆる市民ボランティアである。会期前のオンラインでの顔合わせ、説明会から始まり、会期中は公演会場の受付、案内、物販などの業務に従事している。2024年度は27名の応募があり、23名が実際に活動している。前年度は25名応募、21名活動であったことから、参加者がわずかではあるが増加している。

サポートスタッフ・アンケートの結果概要1(主に回答者プロフィールを抜粋)(N=18)



1. サポートスタッフ・アンケート

サポートスタッフとして活動した人々を対象にアンケート調査を実施した。調査の概要は以下のとおりである。

【調査方法】

各自の活動（会期中、活動可能な日程をあらかじめ調整して割り振られた日に活動）を終えた後に、サポートスタッフマネージャーを通じてグループフォームでの回答を依頼

【調査対象】

豊岡演劇祭2024サポートスタッフとして活動した23名

【回答数（回答率）】

18 (78%)

- ・年齢（世代）、性別、居住地等のプロフィール
- ・応募動機、活動を終えての感想、次回の参加意欲等
- ・サポートスタッフ制度の改善に向けた意見収集ほか

なお、このアンケート調査は研究目的だけでなく、演劇祭運営サイドと本学学生（実習生）も調査設計に参画し、制度改善等の目的も加味されていた。

ここでは、サポートスタッフのプロフィールに関する部分のみ報告する。

まず年齢層は10歳代と20歳代で61%、職業では学生が56%を占めている。性別は61%が女性、豊岡市を含む但馬地域に居住する人が50%、出身地では但馬地域が39%であった。演劇経験者（現在活動している人を含む）が55%とかなり多く、39%の人がサポートスタッフ活動のために宿泊している。来年度の活動への参加意向は78%が「参加したい」と回答しているが、今回のアンケート回答者のうち昨年度のサポートスタッフ経験者は11%（2名）であった。

2. サポートスタッフ・インタビュー

上記のアンケートで「後日のインタビューへの協力意向」を尋ね、OKの方は氏名とメールアドレスを記載してもらったところ、18名中9名の記載があった。そのうち、実際に連絡がとれた6名と、アンケートには回答していないものの全国各地の芸術祭でボランティア活動を行うベテランボランティア1名に別途アプローチし、計7名に各1時間程度のオンライン・インタビューを実施した。実施した期間は10/17～11/7であった。

対象者の属性は表1のとおりである。7名中3名が兵庫県以外の遠方（東京、香川、長崎）からの参加者であり、4名が但馬地域在住で4名ともUターン者であった。

インタビュー内容は以下の3点を中心に、各自の語りを妨げない半構造化インタビュー形式で実施した。

- ・演劇祭との関わり方
- ・演劇祭による地域の変化
- ・演劇祭による自身の変化

サポートスタッフ・アンケートの結果概要2(主に回答者プロフィールを抜粋)(N=18)

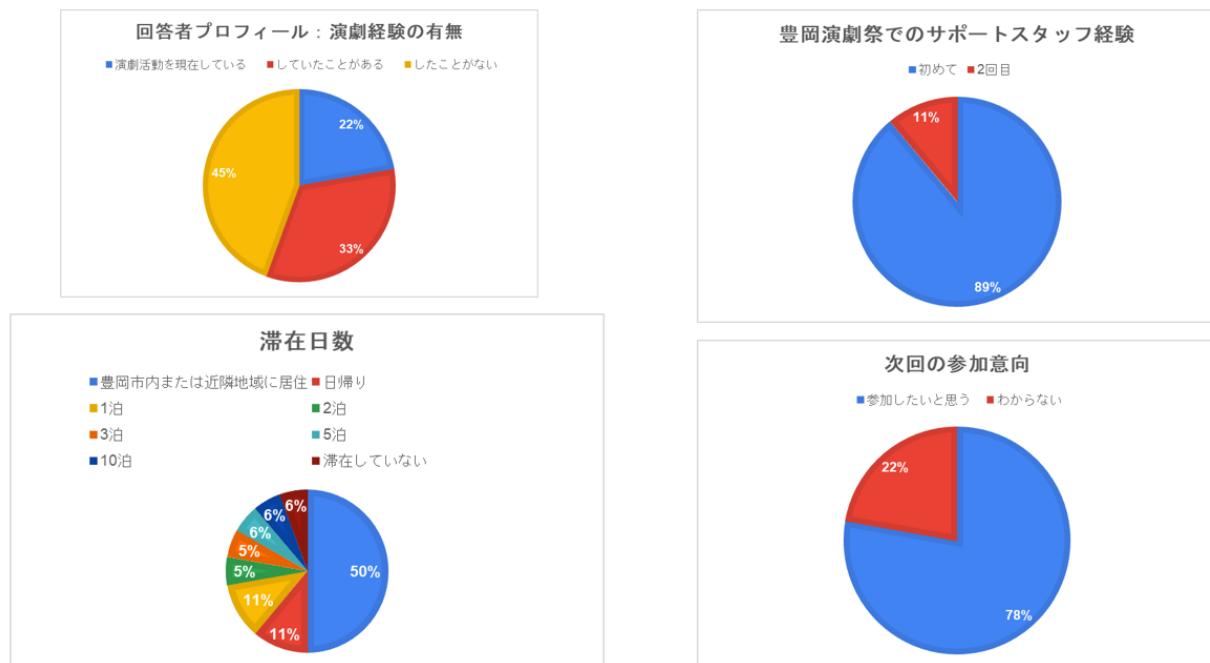


表1 インタビュー対象者の属性

	年齢	性別	属性1	属性2	属性3
1	20代	女性	学生	地域外（遠方）	演劇経験者
2	20代	女性	会社員	但馬在住 Uターン	演劇経験者
3	20代	女性	学生	地域外（遠方）	都市研究
4	30代	男性	アルバイト	豊岡市在住 Uターン	演劇経験者
5	50代	男性	自営業	豊岡市在住 Uターン	
6	60代	女性	美術作家	但馬在住 Uターン	演劇経験者
7	50代	男性	公務員	地域外（遠方）	芸術祭ボランティア経験者

以下、インタビュー結果について、「Uターン組」（4名）「遠方組」（3名）に分け、その概要を記録メモから抜粋して報告する。

(Uターン組)

- 演劇祭をきっかけとした地域の変化
 - ・演劇祭が「人が多く集まる機会」として地域の人に歓迎されている雰囲気を感じた。
 - ・以前は演劇のまちなんて…という受け止め方だったと思うが、最近は少なくとも表立って悪く言う人はいなくなった。
 - ・「演劇のまちづくり」に多数の支持があったわけではなく、積極的な人とそうでない人の間に溝があったと思うが、演劇祭がその溝をほんの少しづつだが埋める役割は果たしている。
 - ・演劇が少しは身近に感じられるようになった人が出てきたのではないか。
 - ・現状維持ではなく前に進む感覚。
 - ・Uターンや移住者はこの機会に何かコラボしたいと考える人もいる。
 - ・変化が見えるようになるには10年15年かかると思う。
- 演劇祭をきっかけとした自身の変化
 - ・普段も以前より多く観劇するようになった。
 - ・自身のアーティスト活動への刺激を受けた。

(造形による表現を行うアーティスト)

- ・演劇祭を「外の風」と捉え、地域の変化がもたらされることへの期待感を持つようになった。

(遠方組)

- 自身の地元の地域での「豊岡」「豊岡演劇祭」の認知
- ・サポートスタッフの地元（東京、長崎など）での周囲の人の反応から、演劇と地域をつなぐ活動に関心がある層、建築や都市デザインに興味がある人々には、「演劇のまちづくり」に取り組むまちとして豊岡が認知されている。

●豊岡・但馬地域での演劇祭の受け止められ方

- ・実際に来てみると来訪前に想像したほど大きな盛り上がりではないものの、住民に演劇祭が認知されている印象を受けた。具体的なエピソードとして、「だいかい文庫」（サードプレイス的私設図書館）に立ち寄った際、スタッフTシャツを見て声をかけてくれる地域住民の好反応、当地で入った飲食店等での「いろいろな人が来てくれてうれしい」「演劇祭が始まって演劇に興味を持つようになり観劇するようになった」「市民としても関わりたい」という声を聞いた。

●滞在中・滞在前後の行動

- ・豊岡滞在の前後も含めて、まち歩きや観光と合わせて活動を楽しんだ。

3. まとめ

以上のインタビュー結果をまとめる。

インタビューに回答したサポートスタッフのうち地域住民（Uターン経験者）は演劇祭の地域への影響について、以下のように感じている。

- ・多くの来訪者があることから、演劇祭への好印象が地域に広がりつつある。
- ・演劇祭をきっかけに自身の演劇への関心が高まったという感覚を得ている。
- ・周囲の人々から以前は感じられた「演劇」や「演劇のまちづくり」への批判的な雰囲気が緩和されている。
- ・地域になんらかの変化がもたらされるきざしがある。

一方、遠方から参加したサポートスタッフへのインタビューからは、以下のようなことが推測できる。

- ・離れた地域でも関心の高い層には「豊岡演劇祭」「演劇のまち・豊岡」が認知されている。
- ・但馬地域の住民に演劇祭の認知が浸透しつつある。
- ・サポートスタッフの中には最長10日間の滞在者もあり、活動の前後に他の地域への旅行を兼ねて行動した人もいる。サポートスタッフへの参加を観光の機会としても活用していることから、ボランティア・ツーリズムとしての可能性も包含している。

おわりに

以上のインタビュー結果は、あくまでサポートスタッフとして積極的な参加意欲があり、かつアンケートやインタビューへの協力者である人々から引き出されたものであり、演劇祭に対する好意的なコメントに偏っている可能性を考慮する必要がある。また、演劇祭実行委員

会が実施した昨年度のサポートスタッフ・アンケートでは回答者の93%が「次回も参加したい」と回答していたにもかかわらず、今回のアンケートでは継続参加者が2名のみであり、昨年度の活動直後には継続参加に意欲的であった人々が多くは活動を継続していない状況が垣間見える。このことは、調査時期（インタビューは演劇祭終了から2か月以内）によっては回答のトーンが変化する可能性も示唆しており、調査対象者の少なさも含めて注意が必要であることを付記する。

文 献

豊岡演劇祭実行委員会（2023）「豊岡演劇祭2023報告書」pp. 21-24.

豊岡演劇祭がまちにもたらしたもの —宵田商店街（カバンストリート）への影響について—

荒益 克文 金子松 美香 菅谷 祐一 野村 仁志

(大阪公立大学大学院 都市経営研究科 博士前期課程)

はじめに

豊岡では、江戸時代に「柳こおり」の生産が盛んになり、近代以降、現在にいたるまで鞆産業は豊岡市の地場産業として知られている。2006年には兵庫県鞆工業組合の登録商標「豊岡鞆」が地域団体商標として認定され、地域ブランドとして広く認知されるようになった。

「演劇のまちづくり」と、地場産業であり、文化・観光資源でもあるカバン産業が、混交することにより、「地域コミュニティにおける文化的ストックの厚み」につながるのではないかと考える。

本調査は、豊岡演劇祭の開催や芸術文化観光専門職大学の開校、いわゆる「演劇のまちづくり」の取組みが、地域社会にどのような効果をもたらしたかを明らかにしようとするものである。本稿では、特にカバン産業の中心地である宵田商店街、いわゆる「カバンストリート」への影響について報告を行う。なお、調査方法としては、インタビューとアンケートに基づく。

1. インタビュー調査

インタビューの対象は、以下のとおりである。

- ① 芸術文化観光専門職大学関係者 3人
(教員・学生・職員)
- ② 豊岡演劇祭関係者 3人 (コーディネーター、自治体職員)
- ③ 宵田商店街関係者 2人 (店舗経営者)

2024年9月から10月にかけて実施し、手法は

半構造化インタビューとした。発言はテキスト化を行ったうえで、3つのカテゴリに分類し分析を行った。

(1) 演劇が持つ特性について

演劇とまちづくりの関係を考えるうえで、演劇という芸術分野における特性に関する発言を抽出したところ、次のとおりであった。

① 芸術文化観光専門職大学関係者

「人と人をつなぐ芸術」
「人を育てる、地域を育てる」
「地域の学校でコミュニケーション教育プログラムを展開」

② 豊岡演劇祭関係者

「時間と空間の共有を通じて、感情の共有が生まれていくアート」
「一方で『時間・空間の共有』は参加しづらさにつながっている」

③ 宵田商店街関係者

「即興性が強く、ライブ感がある」
「収益性が高いとは思えない」
「小学校教育などに取り入れることに疑問がある」

(2) 豊岡が持つ特性について

豊岡というまちが持つ特性についての意見は次のとおりであった。

① 芸術文化観光専門職大学関係者

「情報が少ない分、自分の好きなことをじっくりやれる。人材育成に適している」
「寛容性が高く、チャレンジを受け入れてもら

える」

② 豊岡演劇祭関係者

「事業効果を実感しやすい人口規模」

「合併前の1市5町の特性もあり、文化的な面白さがある」

③ 宵田商店街関係者

「内向的な性格はあるが、『来られた人は家族の一員』という感覚」

(3) 「演劇のまちづくり」の豊岡への影響について

豊岡で展開されている演劇に関する様々な取組みが豊岡というまちにどの様な影響を及ぼしているかについての意見については次のとおりであった。

① 芸術文化観光専門職大学関係者

「大学の実習等、学生の地域活動の機会は多い」

「飲食店や旅館でのアルバイトが多く、学生は生活レベルでも地域に溶け込んでいる」

② 豊岡演劇祭関係者

「豊岡の人たちにとっても新たな人や価値観と出会う場がうまれている」

「宿泊業をはじめ、一定の経済効果もみられる」

「シビックプライドにつながっていくのではないか」

③ 宵田商店街関係者

「まだ5年。変わっていくのはこれからでは」

「演劇祭の関係者や参加者がお店に来ることも出てきている」

「奇抜なアートは、これまでのまちのイメージを損ねるのでは」

インタビュー結果をみると、大学関係者や演劇祭関係者からは、学生をはじめ地域に新たな人材が流入することや経済への波及効果などの側面で、「演劇のまちづくり」が豊岡に与える影響について、積極的な評価をしている。一方、宵田商店街関係者からは、緩やかではあるが店舗への影響があることが感じられるが、演

劇そのものの収益性についての疑問、さらには教育や地域プランディングといった間接的な効果についての否定的な意見もあった。

2. アンケート調査

宵田商店街振興組合(以下、「組合」)は、店舗の閉店や廃業が相次ぐ中、2005年から「カバンストリート」というコンセプトのもと、鞄をあつかう店舗の誘致を行うなど、商店街の活性化に取組んできた。また、組合は、豊岡鞄の販売や地域情報発信の拠点である「カバンステーション」を開業したほか、鞄を販売する自動販売機や鞄をモチーフとしたベンチ・ポストを設置するなど、景観づくりにも取組んできた。そのほか、神戸市内の商業施設や大阪府内の百貨店で組合メンバーが「カバンストリート」催事を行うなど、豊岡市外でも販売活動や認知活動を進めている。

このように「カバンのまち」として地道なブランディング活動を行ってきた宵田商店街の事業者が、「演劇のまちづくり」という豊岡市の新たなブランディングとも言える政策についてどのような感想を持っているのか。宵田商店街にある25の店舗を対象に2024年10月にアンケート調査を実施した。(表)

表：アンケート調査の概要

実施期間	2024年10月7日～18日
対象	宵田商店街の事業者25店舗
配布方法	アンケート用紙(オンライン回答用2次元バーコード付)を訪問・ポスティングによる配布
回収方法	宵田商店街振興組合専務理事の店舗での回収およびオンラインアンケートフォームからの回答
回収率	60%(15件)
有効回答数	15件
設問10問 選択式(一部 自由記述式)	1. 基本属性について ①業種、②開業年度 2.芸術文化専門職大学の開校について ①商店街への影響、②自店への影響 3.豊岡演劇祭の開催について ①商店街への影響、②自店への影響、③豊岡演劇祭参加の有無(参加していない理由) 4.演劇のまちづくりについて ①地域の価値の変化、②自店売上への影響、③今後の課題
※回答内容 は本文で述べ るとおり	①商店街への影響、②自店への影響、③豊岡演劇祭参加の有無(参加していない理由) 4.演劇のまちづくりについて ①地域の価値の変化、②自店売上への影響、③今後の課題
業種	ファッション(カバン)：5、ファッション(カバン以外)：1、食品・飲食店：1、生活雑貨：1、その他(金融機関、整体、情報通信業など)：7
開業年	1980年代以前：7、1990年代：0、2000年～2014年：4、2015年～2020年：2、2021年以降：2

アンケート調査は、芸術文化観光専門職大学の開校や豊岡演劇祭の実施などの豊岡市が進める「演劇のまちづくり」政策が、商店街や自身の店舗に与える影響について、選択式および記述式の設問で行った。

配布は各店舗への訪問やポスティングによって行き、回収は、宵田商店街振興組合専務理事の店舗での回収に加え、オンラインでも回答できるようにした。回収率は60.0%である。

なお、回答者の業種は、鞄関係の店舗が5件、それ以外が10件であった。また、開業年代は1980年代以前が7件、2000～2014年が4件、2015～2020年が2件、2021年以降が2件であった。

(1) 芸術文化観光専門職大学の開校について

2021年、宵田商店街から約1kmの場所に芸術文化観光専門職大学は開校した。学校が宵田商店街や各店舗に与える影響についてアンケートを実施した。

回答は、①とても良い影響がある、②良い影響がある、③どちらでもない、④悪い影響がある、⑤とても悪い影響がある の5つの選択肢に加え、理由については記述式で回答を募った。

まず、専門職大学の開校が宵田商店街に与える影響については、とても良い影響がある(1件)、良い影響がある(13件)、どちらでもない(1件)と9割以上の店舗がプラスの影響があると答えた(図1)。また、その理由については、商店街の空き店舗跡に学生向けのシェアハウスが出来たことや、街を学生が行き交うことなどを挙げる意見が多く、専門職大学の開校が、「まちの若返り」に大いに貢献しているとの意見が多く見られた。

次に、専門職大学の開校が各店舗に与える影響については、とても良い影響がある(1件)、良い影響がある(8件)、どちらでもない(6件)という結果であった(図2)。6割の店舗が好意的に受け止めている。一方で、理由を見ると、アルバイト人材など、労働力として学生に期待している面が大きいことがわかった。収益につ

いては、学生の増加に伴い、家族が豊岡に来る機会が増え、売上にも好影響を与えているとの声が見られた。

図1：芸術文化観光専門職大学の開校が宵田商店街に与える影響について

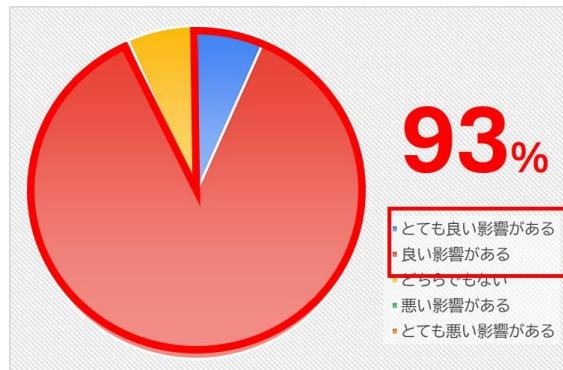
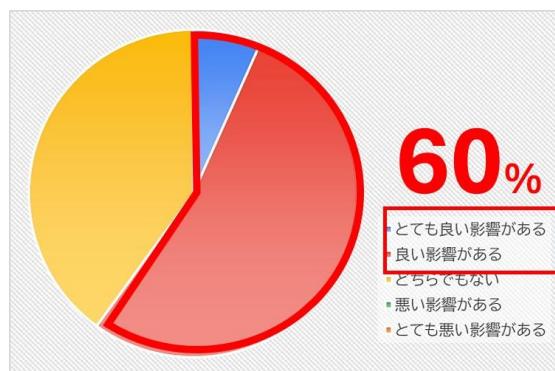


図2：芸術文化観光専門職大学の開校が各店舗に与える影響について



(2) 豊岡演劇祭開催による影響

2020年にはじまった豊岡演劇祭は、2024年で第4回目を迎えた(2021年は新型コロナウイルス緊急事態宣言の発令に伴い中止)。宵田商店街と交差する「大開通」には、9月の演劇祭期間中、のぼりやポスターが掲示され、通りに面する旧豊岡市役所庁舎や庁舎前の広場は、演劇祭のイベントやナイトマーケットの会場として使用されている。演劇祭が宵田商店街や各店舗に与える影響についてアンケートを実施した。

回答は、①とても良い影響がある、②良い影響がある、③どちらでもない、④悪い影響があ

る、⑤とても悪い影響があるの 5つの選択肢に加え、理由については記述式で回答を募った。

演劇祭が宵田商店街に与える影響については、とても良い影響がある(3件)、良い影響がある(10件)、どちらでもない(2件)と約9割の店舗がプラスの影響があると答えた(図3)。

期間中は観光客が増加するほか、演劇祭に出演するアーティストや関係者が宵田商店街を訪れることが多く、「演劇祭関係者の売上は既に無視できない。」という声も上がっている。

また、演劇祭の実施が各店舗に与える影響についても、とても良い影響がある(2件)、良い影響がある(9件)、どちらでもない(4件)と、7割を超える店舗が客数や売上の増加などプラスの影響を感じていると答えた(図4)。観光客を中心とした顧客開拓に繋がっているという声がある一方で、「まだまだこれから」と、更なる好影響を期待している声もあった。また、「まちに文化的な雰囲気がはじめている」という意見や、「演劇祭をきっかけに新たな商店街の活用法が見出せた」という副次的な影響を感じている意見も見られた。

図3：豊岡演劇祭の実施が宵田商店街に与える影響について

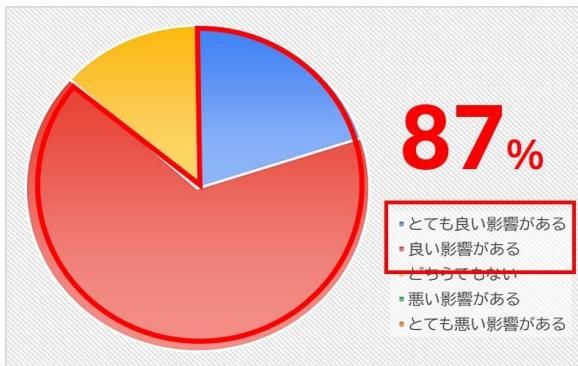
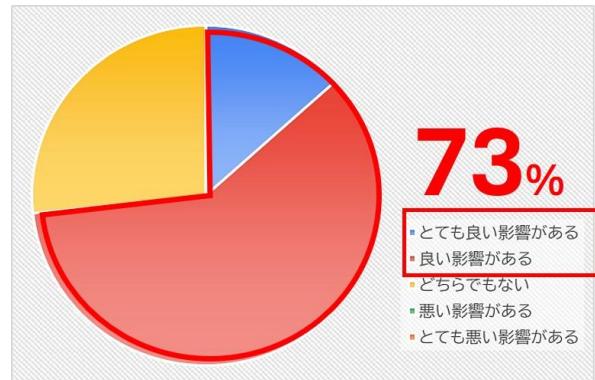


図4：豊岡演劇祭の実施が各店舗に与える影響について



(3) 「演劇のまちづくり」について

最後に、豊岡市の演劇のまちづくりについての質問を行った。豊岡市民の中でも賛否が分かれる「演劇のまちづくり」ではあるが、一方で、5年という短期間で、既に経済的、社会的影響があるとの声も聞かれる。

「豊岡市が進める『演劇のまちづくり』が無くなったら、豊岡のまちの価値は上がるとおもいますか、下がると思いますか。」という質問を行い、回答は、①とても下がる、②下がる、③変わらない、④上がる、⑤とても上がる の5つの選択肢に加え、理由については記述式で回答を募った。

結果、とても下がる(1件)、下がる(10件)、変わらない(4件)、上がる(0件)、とても上がる(0件)と7割以上の事業者が下がる、とても下がると回答した。とても下がると回答した1件はカバン関係の事業者であった。

下がる、とても下がると答えた理由として、「既にまちの魅力の一部となっているから」、「地域の発信のツールであるものが無くなることはマイナスである」、「既に積み上げられた価値があるので、代替案がない以上止めるべきではない」という地域の価値や魅力の一部になっているという声や学生を中心とした関係人口の減少、若者や観光客が減ることでの活力の減少を危惧する声が多く見られた。

また、開業年度別に見ると、1980年代以前に開業した事業者は下がるが5件、変わらないが2

件、2000年から2014年に開業した事業者は下がるが2件、変わらないが2件であったのに対し、2015年以降に開業した事業者は、とても下がる1件、下がるが3件であった。城崎国際アートセンターがオープンしたのが2014年、豊岡演劇祭が始まったのが2020年、芸術文化観光専門職大学の開校が2021年であることを考えると、豊岡市の政策が本格化した2015年以降に開業した事業者の多くは、「演劇のまちづくり」を好意的に捉えていると推察される。

おわりに

本調査では、インタビューとアンケートを通じて、「演劇のまちづくり」が宵田商店街（カバンストリート）へどのような影響を与えていくかを調査した。

インタビューでは、大学関係者や演劇祭関係者の社会的な波及効果を含めた積極的な評価に対して、宵田商店街関係者からは地域に緩やかな変化があることを聞き取ることができた。

アンケートでは、大学の開校が宵田商店街全体に与えた影響について、ほとんどの店舗がポジティブに評価しているのに対して、各店舗への影響については、そこまで高い評価ではなかった。学生を主な顧客層としていない店舗が多いことが原因であろうか。

また、演劇祭の開催については、商店街全体と各店舗の好影響の割合に、大学開校ほどの開きはなかった。演劇祭に訪れた人が店舗への顧客にもなっている実態が推察できる。

調査を通じて、宵田商店街の活性化において若い世代に対する期待が大きいこと、また演劇祭については、域外からの来訪者による経済的な効果についての実感を読み取ることができた。

謝 辞

本調査を進めるにあたり、インタビューにご協力をいただいた皆様ならびにアンケートにご協力いただきました宵田商店街の皆様に心から感謝申し上げます。

文 献

- ・藤野一夫 (2022) 「芸術文化観光学の理念－その理論枠組のために－」、『芸術文化観光学研究』(1)、pp. 8-23
- ・平田オリザ(2023)『但馬日記－演劇は町を変えたか－』、岩波書店
- ・中貝宗治(2023)『なぜ豊岡は世界に注目されるのか』、集英社新書
- ・「地域資源のかばんを活用した商店街のブランドディンガー宵田商店街・兵庫県豊岡市－」、『商店街における取組み事例集2022』、経済産業省中小企業庁編、pp. 55-56
- ・豊岡市ホームページ国勢調査
<https://www.city.toyooka.lg.jp/shisei/toki/kokusei/index.html>
- ・豊岡演劇祭2024ウェブサイト
<https://toyooka-theaterfestival.jp/> (閲覧日：2024/10/28)
- ・CAT劇場自治会ウェブサイト
<https://sites.google.com/stdat.at-hyogo.ac.jp/cat-theatre-association/> (閲覧日：2024/10/28)
- ・カバンストリートウェブサイト
<https://www.cabanst.com/> (閲覧日：2024/10/28)

パネルディスカッション 【課題提供】

パネルディスカッション

豊岡演劇祭

課題と期待

公益財団法人 読売日本交響楽団

事業課長

大久保 広晴

ただ、本当に豊岡の場所をほとんど知らなくて、城崎アートセンターの話は、ちょこちょこ俳優さんのSNSとかからも見えたので、その程度の知識しかありませんでした。

そして知ったのが、中貝前市長の「深さを持った演劇のまちづくり」ということで、私にとっては日本の今まで行っていない文化政策としてどうなるだろうと大変に興味を持つようになりました。

私が、この演劇祭に2020年から4回来ています。しかし、基本仕事休みで来ているので、大体2泊3日とか、1泊2日、そんな形で来ています。演劇を見ているのですけど、大体22本鑑賞しました。2022年は台風がちょっと早く来たために、本当は2泊か3泊する予定だったのが1泊で帰ったっていう思い出もあります。

●豊岡演劇祭の現在

この4回で経験したことで、豊岡演劇祭を評価しようと思います。どのような形で評価するかですが、私がフェスティバルに求める3つのことを照らし合わせようと思います。

□作品の量と質

まず、一度に多くの作品を見られること、よい作品を見られることです。豊岡では1日に3本の演劇を見ることが可能です。そうすると、2日で5本、6本を見られます。しかし、その期間に上演されている作品で見られないものもたくさんあります。非常に広域で、同時多発的に多くの演目が上演される形態を取っています。これは、日本の演劇祭ではとてもまれなスタイルかもしれません。1つは、静岡の「ふじのくに せかい演劇祭」です。こちらも1日3本から5本ですけども、時間をうまくずらしてあって、1泊するとその期間に上演している作品のほぼ全てが見られるようになります。あとは利賀村で行われている「SCOTサマー・シーズン」も、1日3本とかで、2日いれば、その期間中の作品を全部見られる。

皆様、こんにちは。大久保広晴と申します。本日短い時間ですけども、この演劇祭の課題と期待についてお話しさせていただきたいと思います。

まず、簡単ですけど、なぜオーケストラ事業を専門としている僕がいるのかということで、一応自己紹介させていただきます。東京の小金井市で生まれています。大学では、専門は政治経済をやっていました、特に演劇とか、音楽を専門にやったわけではありません。ただ、大学時代に、ドイツなどに自分で旅したときに、劇場の運営とか、社会、芸術の在り方みたいなのにすごく興味を持ちました。就職先として、武蔵野市にある武蔵野市文化事業団というところで自主事業の企画運営を担当し、その後オーケストラ運営の分野で今働いています。学生時代からですけども、世界各地の演劇祭とか、音楽祭などに行くのが自分のライフワークとなっております。

●私と豊岡演劇祭

実は豊岡という場所は、私にとって縁がない場所でして、興味を持ったきっかけっていうのは、まさに平田オリザさんが、2017年に突如、青年団を移転する、移住するという話しがあり、豊岡はどこだということで、初めて知ったわけです。そのうち、ここには大学がまたきて、平田さんがその後、10年後に世界規模のフェスティバルをつくるってことを言っています、「そんなことができるのか」と、私もすごく注目することになります。もちろん城崎温泉は知っていました。

せっかく遠方から來るのだったら全部見てもらおうというスタイルを取っているのです。

一方は、この豊岡は、もう本当に非常に広域で行われます。公式プログラムでも恐らく1人で全部見るのは難しいと思われます。この辺は、私が、平田さんが最初から言っている「アヴィニョン演劇祭」とちょっと似ていると思います。

そしてもう一つ面白いのが、平田さんの作品が多く占めるわけではなく、例えばシリアルな演技から、比較的コメディー色の高いものとか、ダンス、大道芸まで非常にバラエティーに富んでいると思います。この辺がほかの演劇祭とも違うところです。

もう一つ、面白さがあります。本当に地域も違って、広域型なので、私がすごく楽しみにしているのが、スケジュールが出た後に、どうやってこれを組み立てようか、どうやって回ろうかと、悩みます。でも、これはすごく私にとっての有益な時間で、楽しい時間になっています。私が最も見たいもの、次に見てもいいかなっていうものを幾つかスケジュールを立てついて、それを実際に本当にできるかどうかを確かめます。

そのためには電車とバスの時刻表を見なきやいけないですけども、これがなかなか大変で、「あと何分」、「もしこれが短ければ、バス乗れたのに」みたいのが結構出てくるのです。そうすると、

「じゃあ、1個を減らして、その間に違うフリンジを見ようか」とか、そういうことをやっています。これは、人によっては、すごく面倒な作業かもしれないんですけども、私にとってはとても楽しくて、いろいろ視野が広がる機会になります。フリンジでしたら特に若い方が多いので、私も見たことない演者がいっぱいいますので、その方のプロフィールを見たり、過去の作品の批評を見たりします。何かこれ注目してみようみたいなことに、一晩使います。

私にとって良いことも非常に多いのですが、一方で少し残念に思うことも幾つか経験しました。

特に初年度は作品数が少なかったのですけども、年々上演作品が多くなっていくと、比較的芸術的な一つずつの作品のレベルも、もしかしたらちょっと散漫になっているのではないかと思うことも実は正直あります。恐らく予算がそんなにいつも潤沢なわけでも一定なわけでもなく、数をずっと増やし続けてきて、広域にしてきたことで、一つ一つの作品を芸術的に高めることが少しおろそかになっているのかもしれませんと思います。

一つ例を挙げると、広報的なものにも言えまして、2022年に豊岡市民会館では、1,000人ぐらい収容できるホールですけども、そこで海外でも有名な山海塾の作品が上演されました。すごく集客に苦労したようで、実際当日来たのは、300人にも満たなかったのです。そのときに、実は開演前に会館内の会議室で、プレトークがありまして、そこでは、初めて山海塾を見る方のために「楽しみ方講座」っていうのをやっていたのですけども、よくできていたらしくて、もしそのプレトークが開演直前じゃなくて、1週間前にどちらかの会場で行われていたり、皆さんがそれを見るような機会、例えばテキストを起こしたり、動画で配信したら、300人じゃなくてもうちょっとお客様多く集まつたじゃないかと、そんなような経験をしました。

□地域への興味

この演劇祭を通して私は、食文化とか、それ以外のものも、とても好きになった1人です。様々なフェスティバルは、その場所を本当に知ることができます。特に、飲食というのは皆さんにとっても大きな楽しみになると思います。豊岡は本当に海のもの、山のもの、おそばなど食材がとても豊かで、中でも私はお酒が大好きで、日本酒も大好きで、とてもよかったですとか、地ビールが飲めたりとか、とてもいい。特に豊岡演劇祭は9月になるので、日本酒が好きな方には、この「ひやおろし」っていうのがいつも出る時期です。これを飲んだら私はすごくうれしくて、豊岡に来ると、豊

岡のお酒のひやおろしを飲むというのが今、私は毎年楽しみになっています。

食も豊かですけども、非常に歴史を感じることができるまちというのも好きなところです。赤穂浪士の大石内蔵助の妻りくが、豊岡の出身ということで、私は講談が好きなので、「二度目の清書」という作品の中で何度も「但馬の豊岡」という言葉が出てきたので、その講談を聞くたびに、いつもこの町を思い出すようになったりとか、そういうような楽しみもあります。

あと、作品もそのりくに関しては、新作の講談なども作られていますし、今年は出石の政治家の斎藤隆夫さんを題材にした作品も作られています。私が見た中で、鳥丸ストロークロックによる「但東さいさい」というのが、とても興味深い意義深い作品でした。これは農村歌舞伎を舞台で行って、但東の子供たちと地域の方たちと一緒にオリジナルな神楽を作ったものです。

この祭りと演劇というのが、人々の営みに結びついているということを、本当に改めて感じられる作品で、今後、この作品がどういうふうに発展するか、もしくは、参加した子供たちが、この演劇祭とどう関わっていくのか、とても興味を持ちました。

あと、「但東さいさい」のよかったところは、まさにフェスティバルの場所が、お祭りになっていて、露店も出でていて、皆さん、それを食べたり飲んだりしながら見ている雰囲気もとてもよかったです。この作品がもしかしたら、今後一つの目玉になるのかなと思いますし、今後、どうしても中心の東京で最先端のものを見たがるお客様とか海外の方を、こういう「但東さいさい」みたいなものにどうやって招いていくのかなっていうのは楽しみの一つでもあります。

□継続、変化、発展のために

音楽祭、演劇祭、フェスは常に毎年行っていますけど、もうそこにはすごく多くの人が関わりま

すので、必ず変化が伴います。豊岡では4回だけですけども、かなり複雑に変化しているように感じます。これが、今後どう発展するのか、もしくは変わってくるのか、私はこれが楽しみです。

1つ、例を挙げさせていただくと、利賀村のフェスティバルは、長年行われております。鈴木忠志さんがやっていて、すごいリーダーシップによって、揺るぎない継続力みたいな感じのものです。このように比較的、演劇祭、音楽祭は1人の方が強くリーダーシップを取ることが多くて、音楽では、長野県の松本でやっている小澤さんが始めた「サイトウ・キネン・フェスティバル」「セイジ・オザワ松本フェスティバル」がそういう形になっていました。「じゃあ今度、松本では今何をやっているか」っていうと、小澤さんがいなくなった後、どういうふうにこれを継承していくかと、すごく大きな問題になっています。

一方、ちょっと面白い例を挙げますと、「ルール・トリエンナーレ」というドイツのルール地方で行われている総合芸術祭です。これは、オペラプロデューサーのジェラール・モルティエさんという方が創設したのですけども、2002年からトリエンナーレ(3年ごとではなく)で毎年行われています。幅広いジャンルの実験的な上演が特徴となっています。会場がルール地方の機械工場跡なので、正直アクセスはあまりよくないです。バスで行かないに行けなかったりする。豊岡演劇祭と似ている雰囲気があります。

「ルール・トリエンナーレ」の何が特徴かというと、3年ごとに芸術監督が代わるのです。初代芸術監督は、モルティエさん自身が務めました。その後、3年毎に変わっています。そうすると、もうプログラム内容も全部変わりますし、広報物も全部違うものになる。こういう面が面白いです。もう一つ、(初代芸術監督の)モルティエさんは2014年に亡くなっているのですけども、それに影響することなく、芸術祭は現在まで続いているのです。そういう継続できる形ができているのです。

このことは、1人の強いリーダーシップを持って始めたものが、今後どうやって継続していくのかを考える一つの参考になるかもしれません。

●今後の課題と期待

□国際性

最初の年はあまり海外からの招待もできなかったのですけども、2023年はすごく多かったのです。とりあえず国際的な作品は難しいですけども、外国人が関わるものだったり、外国との共同で制作をしているもの、恐らく、私の数えたところによると6本ぐらいあったのですけども、2024年には2本ぐらいになってしまっていると思われます。豊岡演劇祭は国際化を非常に示されていたのに、なぜかというふうになったのかと思うことがあります。

最近は、ずっと豊岡の名前がクレジットされている作品(市原佐都子の作品など)が世界を回っていました。なので、今後も、こういう活動にもやはり、注力していただきたいというのは特に思います。

あとは、海外からのお客さんは、まだまだ見えていません。これはいろいろ原因があると思うのですけども、チケットシステムで言えば「t e k e t」というのを使っているのですけども、それが全く海外対応はしていないものです。日本在住の方に限りますというものなので、この辺も今後は課題となってくると思います。

□深さと広がり

「深さを持った演劇の町」っていうふうに言っているのであれば、まだまだ広さを持って、深さを求めないと深くは行きませんから、まだまだ地域の方の参加などが必要だと思います。なので、演劇のことですけども、他ジャンル、音楽や美術とかに関わるのも私は大事だと思っています。

例えば、今年は幾つかインスタレーションがあったのですけども、インスタレーションであれば、

演劇と演劇の間に時間に、それは見ることができます。もし演劇祭以外の時間のインスタレーションが設置できれば、演劇祭以外の時間に来た方に演劇祭を紹介することになりますので、その辺もうまく組み合わせて、演劇期間に関わるインスタレーションを作っていくといいかなと思います。

音楽プログラムも今まで幾つか行っていますが、決して多くはありません。私がこう思うのは、養父のビバホールが国際チェロコンクールを長年やって、クラシック音楽界では有名なものです。1994年から30年にわたってやっています。2年に1回ずつやって、今15回目をやっているのですけども、ビバホールのチェロコンクールと一緒に何かここでもやると面白いかなと思います。

例えば、そこでのチェロの入賞者の方と、何か他の作品と一緒に作るとかです。そうすると、恐らくあそこのビバホールは、ボランティアの方がすごく熱心ですし、ホームステイもやっているので、非常に皆さん近い関係を持って、もしかしたらビバホールに関わっているボランティアの方たちも演劇祭に興味を持っているだけかもしれない、そんなこと思っています。

それと、現代芸術の中で、演劇は今を表すものだけど、クラシック音楽はあまり現代の社会とリンクしないもの、古いものと思われるがちですが、私の中では違うと感じています。チェロなどの弦楽器は古い木で、いわゆる自然界のものです。それと、動物のチョウを用いた弓、いわゆる生物の死後のものをこすり合わせて、音を鳴らしている。このことからも時代を超えて、常に人間の本当の存在意義を問う芸術ジャンルであると思っています。

他ジャンルと、あとは他の地域や団体との連携、これは既にいろいろ行われているように思いますが、例えば、もう少し活用していただきたいと思うのが、この地域にある博物館や美術館とかでもしやられていれば、私も足を運ぶことができる

のかなというふうに思いました。

あと、もちろん団体との連携は、特定のフェスティバル、日本のフェスティバルだけではなくて、できれば海外とも行ってほしいですし、日本の他のジャンルとつながりがあるあって面白いと思っています。

地域性ボランティアの関わりの辺はちょっと省きます。その中で、今後は多分どういう特徴を、オリジナリティーを持っていくというのかはとても重要だと思います。この深く重みのある劇ということから、どのようなものが見られているようになるか、楽しみになっています。

□インフラ

最後に、移動手段とか、宿泊施設、日常の問題、この辺は皆さんもよく御存じだと思います。効率よくできればもちろんいいですし、宿泊施設もそうです。最近少しずつそういう民泊みたいのができているようですけども、例えば地域のお祭りは、よくお寺を一定期間で、そのときに来る宿泊として、開放して貸し出したりしているケースもありますので、お寺とか、空き家など、うまく使っていただいて、今後その辺を対応していただければと思います。

あとはもう一つ、新しい文化会館、とても楽しみです。今は1,000人以上の客席のため、大きすぎて使いづらいかもしれませんけども、そこに今度800人だったり、もう少し小さいホールができるので、その活用というのも、今後とても重要なと思っています。

御清聴ありがとうございました。



講演者 大久保広晴 氏（写真奥）

パネルディスカッション 【質疑応答】

パネルディスカッション

「演劇祭が地域にもたらす価値を考える」

パネラー 読売日本交響楽団 事業課長
大久保 広晴

同志社大学教授
太下 義之

コーディネーター: 藤野一夫

○藤野：大久保さんから外からの、ある意味で私たちも気づかなかつたお話を聞いていただきました。もうあまり時間がないので、フロアから何か御質問をもらって、それに答えるという形にしましょうか。

その前の第2部の発表も、それぞれ非常に充実したものでした。例えば、カバントリートのインタビュー、アンケートがありましたけど、その住民でもある学生さんが会場に来ているようですね。何か住民の立場から補足とか、コメントとかありますか、よかつたら、どうぞ。

○参加者A・学生： その7人の住人のうち3人、ここに座っている状況ですけど、先ほどのアンケートには、かなり私たちからすると、ちょっとどきどきの部分もありまして、地域の方と関わろうと、かなり意気込んで引っ越しした4月から、本当に地域の方とお会いする機会がなくて、夏祭り、秋祭りと参加したのですけれども、秋祭りに関しては、自分の地区から隣の地区との合同実施で、自分も宵田区から参加したのが、うちのシェアハウスからの人だけで、あとは全員、区長さんがそれでついてきてくれて、わざわざ、隣の地区と合同という感じだったので、本当に私たちは住んでいるけれど、どう関わればいいのか分からぬといいうのが本当のところです。さっきのアンケートを聞いて、「あっ、私たちの存在をどこかで認知して、いつも挨拶してくれる方いらっしゃるのですけど、あそこにいるということに不満とかなく

受け入れてくださっているのだな」っていうことが知れて、まずとても安心しました。

かつ、先ほどのアンケートに関して、ちょっとこちらとしゃべっていたのが、あそこはカバントリートという名前ではあるものの、かばんを生産されている方のお店がたくさんある商店街であって、かばん屋さんが住居にされているということではないですね。だから、地域の方との交流といつても、ふだんはほかの生活雑貨とか、服屋さんとか、そういうことをされている方と擦れ違う機会しかなくて、そうなってくると、演劇祭とカバントリートという関わり方の前にカバントリートの中の、住民とかばん産業っていう部分の関わりみたいなところも一步前にあるような気がしています。

私たちは今日すごくいいアンケート結果のことを一生懸命聞いていたんですけど、何だかそこに入るには、学生としてはまだ一歩、ちょっと入りづらい部分もあったりだと、あと、ある種役に立てているのか分からない部分があつたりだと、何かそういうところを感じことがあるので、むしろ、そのアンケートを作られるときに、一緒にアンケートを探りたいですねとか、話せたらよかったですとか、何かそういうようなことをいろいろ考えたりしたので、もうちょっとカバントリートを含め、豊岡演劇祭を含め、先生方の研究としての立場から調べられるときに学生が一歩入れる隙間があったら、すごくよかったですなど今日一日聞いていて思いました。ありがとうございました。

○藤野：すごく説得力のあるコメント、ありがとうございました。

ほか、どうでしょうかね。さつき、確かに量的には当初の目標をクリアしていると思います。だけども、どんどん広域が広がっていく中で、また予算との関係で量を増やすと、何か質が低下しているじゃないか、そのことによって、例えば「東

京から来るお客さんの数が減っているではないか」みたいな指摘があったと思うんですけど、皆さん、特にフェスティバル関係の方もいらっしゃるので言いにくいかもしませんけど、この辺何かジレンマがありますか。やっぱり数を確保しなくちゃいけないというのは、かなり優先されているのですか。どうでしょう。

○参加者B・市民：関係者ではありませんけど、ファンです。低下したものかということに関して、私はむしろ低下というより、こんなものが豊岡で見られるのだと、非常にいい作品が見ることができていると思います。逆に言えば、もっともっと豊岡市民や近隣の方にも見てもらいたいなっていうのは、私の今年の演劇祭の実感です。「マムとジプシー」とか、いろんなものが豊岡でこうして見られるのだなという、むしろそういうふうな思いを持っております。

今後伸ばすには、やはり「芸術的価値どうこう」ということも大切ですけども、もう少し市民に喜ばれるような幅広のプログラムがあってもいいかなというふうに思います。

○大久保：ありがとうございます。ここでも、「演劇祭と市民文化活動の対抗関係」っていうのがあります、私は何か「対抗」じゃないと思います。私も公共ホールに勤めていたことがあるので、市民にちょっと動かされてやるのもオーケーですし、市民の文化活動っていうはとても重要ですので、自由にできれば良いと思っています。それと演劇祭が対抗関係にならないようにするには、何ができるのかなと思います。例えば、今後新しいホールでも市民の方にもたくさん活動していくで、多く創作してもらい、例えばその中から優れたものは演劇祭にも組み込むとか、そうやって一緒にやっていく方法がある気はします。

○藤野：割合として何割か分からないですけど、

「但東さいさい」は、一番いい発展の仕方をしていると思うし、市民プラザでやっている、今回は「空き家」というやつですね、そういうのは、やっぱり市民参加型ですごくうまくいっています。ただ、どのぐらいの割合でそういうのを設定したらいいのかなというのは、何だか外に持ち出してできるものではない、サイト・スペシフィックな「ご当地物」ものなので、そういうものを見るために東京や海外から来るのかな、関心がある人は来ると思うんですけど、それで何か魅力を発信できるかどうかというのは、どう思いますか。

○大久保：そうですね、恐らくバランスになると思うのですけども、特に市民文化活動の話、少ないアンケートでしたけども、そこをもし指摘されるのであれば、もう少しパーセンテージを上げて、演劇祭の中でも例えば60%まで上げることですね、そういうのはそういうプログラムにするとかです。正直、演劇において素人とプロの境目は分かりにくいものですね。正直私にも判断できないぐらいのものあると思います。実際、市民が関わるものを作っていく作品は、特に最近演劇ではドキュメンタリー演劇みたいのが特に増えています、わざと素人の役者さんがそこにいる人たちを舞台に上げるっていうのはあることなので、そうやって一緒に作るみたいな方法もあると思います。また、今の作家や演出家はそういうことができると思います。

○藤野：ありがとうございます。さあ、あと1人か2人ぐらい、御質問とか御意見ございますか。どうですか。じゃあ、小畠さん。

○小畠：教員の小畠です。

太下先生にお伺いしたいことがあります、冒頭お話しされたクリエイティブツーリズムというものを考えたときに、今、お話を聞かれた中で、どういう契機が今後豊岡演劇祭に、これまでなか

つたけれどもこういうことできるじゃないかっていうことをお考えになったものがありましたら、お聞かせいただけだとありがたいですが。

○太下：すごく難しい質問をいただいたような気がしますけど、実はさっきから私、ここに非常に居心地悪く座っている感触をずっと持っています、それはなぜかというと、まだ豊岡演劇祭を1回も見ていないです。

何で見てないのかなと改めて考えてみたのですけれども、これ大分言い訳ですけど、スタートは、2020年ですよね。コロナの中で始まったので、私が東京にいて、京都の大学に勤務していたのですけど、大変な時期に始められたなと思いますので、まず、2020年には行けないというので見られなかったです。そして、開催時期が秋じゃないですか。秋というのは、非常に文化的な催しの集中する時期ですよ。東京からやっぱりここまで来るとなると、1泊ではちょっともったいないなと思います。2泊3日で見ようと思うと、その3日分をこの集中する時期に確保するというのはかなり難しいです。もちろん、それは単なる日程の問題なので、来ればいいじゃないかと思うかもしれませんけど、どうでしょう、実はプログラムは毎年見ているんですよ、どんなものをやっているのかなというのを見ています。

そういうよそ者目線で今、豊岡演劇祭のラインナップを見ると、ほかの国内の国際演劇祭、幾つかありますけど、比較した場合で、多分これあえてそういうふうにしていると思うんですけど、豊岡演劇祭は「目玉」がないですね。

例えばさっき、大久保さんも紹介された「利賀フェスティバル」、僕も第1回を見ているんですけど、あそこは非常に分かりやすいと思います。もちろん鈴木（忠志）さんのネットワークは海外にも及んでいます。それもそれで目玉ですけど、やっぱり目玉は、「世界の果てからこんにちは」です。最後に花火がドンと上がる、ないしは往年

の名作の「トロイアの女」の再演だとか、非常に分かりやすく「目玉」が設定されています。

「ふじのくに国際演劇祭」もそうです。S P A Cという静岡県立の劇団の宮城聰さん演出の大作をその場でドンとやる。非常にシンプルで分かりやすい目玉があるので、その前後にどういうプログラムを見るのかという形で一定の計画も立てやすいです。

さっきも言ったとおり、豊岡演劇祭の場合は多分わざわざそうしているだろうと思って、ずっとプログラムを見ていたのですが、平田オリザさん自身も全然平田さんの作品を活用していないですね。また、あえて、強烈なネームバリュ－の劇団は呼んでいません。となると、大久保さんのような通はそれを楽しんでいるということはあるかもしれませんけど、多分多くの人は一体どこ行ったらしいんだと迷うだろうなと思います。

ちなみに私、結構演劇好きです。年間80本ぐらい見るのですよ。で、そういう人間がちょっと行けていないというのも、何か大きな問題があるような気はするのですよね。ちなみに前回でしたか、「マームとジプシー」が出演していましたよね。ある意味、これは目玉といえば目玉かもしれないです。ただ、せっかくマームやるのだったら、代表作の「cocoon」も再演してもらうとかできなかつたでしょうか。実は僕は「cocoon」は沖縄まで追っかけて見に行きました。

わざとやっていらっしゃるでしょうけど、あえて目玉を作らない戦略が、イベントの集客という観点からすると、多分ネガティブに作用しているような気がします。今言ったのは、イベントの集客についての話です。今日のシンポジウムは文化観光がテーマなので、観光的な要素とかを前提にされているのでしょうかけど、果たして、そもそも豊岡演劇祭がその方向を向いているのかどうかというのも要議論かもしれないです。

というのは、日本国内で国際的な演劇祭って、

そんな多くないですよ。さつきあげた、利賀の演劇祭とふじのくに演劇祭と、今ちょっと落ち込んでいますけど、東京演劇祭、昔のフェスティバル／トーキョーですね。あと、沖縄のりっかりっかという国際児童演劇祭（旧キジムナー演劇祭）で開催されます。恐らく国際演劇祭と本当に言えるものというのはこのぐらいです。

それらのどれを取っても、実は、現状はそんなに文化観光につながっていないのです。さすがに利賀には観光客が来ますけど、数でいいたら、たかが知れています。多分経済的効果としても、演劇祭自体ではそんな大した金額にならないはずです。

ということは、取りあえず文化観光拠点になっているので、そういうエクスキューズとしてのエビデンスづくりはもちろん肅々とやる必要があると思いますけども、何か本来、豊岡国際演劇が本当に目指すのが何か、それが観光なのかなというのは、ちょっとよく分からぬところがあります。

○藤野：平田オリザさんが、ずっとアヴィニョンモデルを言っていたわけですね。アヴィニョンは公式プログラムが少ないけども、フリンジがすごく多い。それをやっぱり目指てきて、公式プログラムもすばらしいけど、フリンジの力は随分ついてきたなっていう評価はいろんなところから聞きます。

何で、先ほど御紹介した石川さんの批評の中でもフリンジがかなり扱われているのですよ。それはやはり日本の演劇祭では今までなかつたことなので、中心のエンジンは必要です。だけど、それによってフリンジ、そのさらに外側のオフオフみたいなのも出てくるっていう広がり方は、ポテンシャルとしてはあるんじゃないかと思います。

○太下：発想としてはいいと思います。ただ、結局、アヴィニョンでフリンジがあれだけ盛んにな

って、効果があるのは何故かというと、結局、ショーケースの効果ですよ。あそこに、世界中の劇場のダイレクターとかプロデューサーとかが来て、メインのプログラムもそうですし、フリンジも見て、「あっ、これ面白い」といってそこでその劇団と話をして、「今度、こっちでやらないか」と招へいする、それがショーケースの意義ですね。

という意味でいうと、豊岡がそのフリンジをやるというのは、単なるにぎわいづくりではなくて、そういうショーケースを目指すのかどうかという戦略設定が必要です。もしショーケースを目指すのであれば、結構これ大変だと思います。現状のプログラム作成とはまた別に、本当に日本中の劇団のリサーチをちゃんとして、戦略的に劇団に声をかけるというアプローチは絶対したほうがいいと思います。さらに国際的な演劇関係者、いわゆるプロデューサー、ダイレクターたちをどう呼ぶかは必須となります。

ちょっとジャンルは違いますが、国際映画祭を世界中でやっているじゃないですか。日本にもいろんな映画祭があります。例えば、日本で一番大きい映画祭は、東京国際映画祭です。大きいというのは、上映の本数とか予算の面です。ただし、これよりはるかに予算の小さい釜山の国際映画祭のほうが、世界におけるインパクトは、はるかに大きいと思っています。それは世界中のディレクターを呼んでいるからです。ディレクターたちが集まっているので、当然そこで商売が始まります。だから、釜山は、若手の公募企画をあらかじめやっているのです。それを世界のダイレクターが見て、先物買いをするみたいなことになります。東京国際映画祭は上下分離でいくと、上部構造のにぎわいはあるのですが、下部のビジネスの部分が弱いのです。だから、世界から大物映画人が来ないです。

フリンジがうまくということ自体はいいことですけれども、フリンジを成功させるためには、

その戦略設定と実行プランが必要になってくると思います。アヴィニヨンは、大陸ですから、ヨーロッパ中から来やすくて、各国の劇団は車とかバンで来たら、フリンジ公演もできますから、場所さえ確保すればいいのです。もし、豊岡が何らかの国際的な影響力を持つようなフリンジを持つとしたら、その対象はヨーロッパではあり得ないですよね。だって、アヴィニヨンもあるし、エジンバラもあるし、日本までは距離もありますから。可能性があるとしたら東アジアの国、中国、韓国、台湾、ここと強力なネットワークを結んで、豊岡にそれらの国のカンパニーの劇団を集めてきて、要はアジアの窓として世界に売って出られるかどうかという構図をつくるということじゃないかと思います。

○藤野：ありがとうございました。

最後に、御講評をいただこうと思っていたのですが、今たくさんアイデアをいただきましたので、もう十分かなと思いつつ、もし何か今日の講評がありましたら、お願ひできますか。

○太下：私、豊岡来るのは、今日で4、5回目ですけど、演劇祭の時にまだ来てないですが、学会でも来ましたし、自分の研究のために来ましたし、やっぱり前市長の政策がすごく興味深いものがあつたので来させていただき、あとは、文化庁長官表彰の贈呈式のときに、私もあれの委員でしたので、それから今って、文化観光の拠点の委員であります。なので、そういう視察とかで来ているんですよ。

豊岡には非常にポテンシャルを感じます。というか、こういう豊岡のような都市がまさに文化で輝かないと、日本全体の可能性がないじゃないかぐらいのことを思います。東京は東京で、勝手にグローバルな展開をしていればよくて、そうではなくて、地方都市が課題なのだと思います。そこに住み続けるという住民が、よりよい街を自ら主

体的につくっていくことが大事です。

ちなみに私の専門分野について、文化政策とお話ししましたけど、その中の一つの領域で、食文化というのも研究していまして、このエリアの食文化も非常に興味深いものがあるのです。食は、観光においてキラーコンテンツですので、これを押さない手はないと思っています。ですので、いかに文化政策の中にも食文化を入れていくのかということも、これから論点になるかと思っています。

以上です。



パネルディスカッションの様子

(左から藤野副学長、大久保氏、太下氏)

5. 政策評価と芸術的評価へのこころみ

豊岡市の文化政策と演劇祭の（政策）評価について

藤野 一夫

(芸術文化観光専門職大学 副学長／芸術文化・観光学部 教授)

本学では 2024 年 4 月に芸術文化観光研究センターを創設した。芸術文化観光学の構築を通して、喜びに満ちた共同体をインターローカルに、つまり国境を越えて紡ぎ出す知の拠点となることを目指している。芸術文化観光研究センターの柱となるリーディングプロジェクトの一つとして、大社教授がリーダーとなって豊岡演劇祭の総合的な評価を行うことになり、この 1 年間取り組んできた。

2024 年 9 月に開催された豊岡演劇祭は 5 回目を数え、すでに過不足のない実績を積み上げている。そこで、様々な視点からの演劇祭の評価とその分析を通じて、芸術文化観光の力を検証したいと考え、まずは大社教授とともに調査設計のための研究会を重ねてきた。観光面、経済面での定量評価だけではなく、社会的なインパクト評価、つまり地域の住民にどのような影響を与えたかについて、多角的な調査を行う必要性を感じた。また、社会的インパクト評価と同じく、芸術的評価をも重視した。

豊岡市の文化政策と演劇祭の（政策）評価

それでは、豊岡市の文化政策と演劇祭の政策評価を、どのように関連づけることができるだろうか。まずは、豊岡市の文化政策の関連年表を御覧いただきたい。

年度	で き ご と
2008	現存する近畿最古の芝居小屋「出石永楽館」復原
2012	「豊岡市いのちへの共感に満ちたまちづくり条例」制定
2014	アーティスト・イン・レジデンス施設「城崎国際アートセンター」オープン
2015	第 1 期地方創生総合戦略策定（人口減少の緩和と緩和策を通じた地域活力の維持）
2016	「豊岡アートシーズン」スタート、文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）
2017	「豊岡市文化芸術振興計画（第 1 期計画）」策定
2018	新文化会館建設決定（豊岡市民会館および出石文化会館のホール機能統合）
2020	第 1 回となる豊岡演劇祭（『豊岡演劇祭2020』）開催／第 2 期地方創生総合戦略策定／旧豊岡市商工会館を改修した民間立の劇場「江原河畔劇場」オープン
2021	芸術文化観光専門職大学開学
2022	第 2 期「豊岡市文化芸術振興計画（本計画）」策定
2026	新文化会館オープン（予定）

図 1 豊岡市文化政策関連年表 第 2 期「豊岡市文化芸術振興計画」より

2008 年の出石永楽館の復元に始まり、2014 年にはアーティスト・イン・レジデンスを目的とした城崎国際アートセンター「K I A C」がオープンした。2016 年に「豊岡アートシーズン」がスタートし、これらの文化政策が評価されて豊岡市は文化庁長官表彰を受けている。2017 年には第 1 期の豊岡市文化芸術振興計画を策定。その準備には 2 年ほどを費やし、市民アンケートやヒアリング、ワークショップやシンポジウムを複数開催した。それに続いて 2018 年には、新文化会館の建設を決定。当初、2025 年度のオープンを予定していたが、市長の交代による中断を挟み進捗が遅れ、2023 年度には建設業者の入札が 3 回にわたり不調に終わった。2024 年度に入り、サウンディング調査を実施したところ、建設費が当初の倍近くになることがわかり、2024 年 12 月、新文化会館の建設を断念。現在の市民会館の改修による長寿命化を図るという大きな方針変更が発表された。しかし 12 月議会では市長側と市議会側で調整に至らなかった。決着は 2025 年春の市長選以後に持ち越される見通しだ。

この間、2020 年には平田オリザ氏が代表を務める青年団の新たな拠点となる「江原河畔劇場」がオープン。本学が開学したのは 2021 年のコロナ禍だった。2022 年に第 2 期の地方創生総合戦略が策定され、同じく第 2 期の文化芸術振興計画も策定されている。

図 2 は文化芸術振興計画の体系図である。大きな目標は「文化芸術による小さな世界都市の実現」で、そのための主要手段として 4 点が掲げられている。豊岡市の文化政策に特徴的なのは 2 点目と 3 点目だ。「優れた文化芸術が創造され、発信されている」というのが 2 点目。3 点目は「文化芸術による交流が盛んになり、豊岡の魅力が高まっている」というものである。それらをブレークダウンした具体的な手段が右側の表に挙げられている。

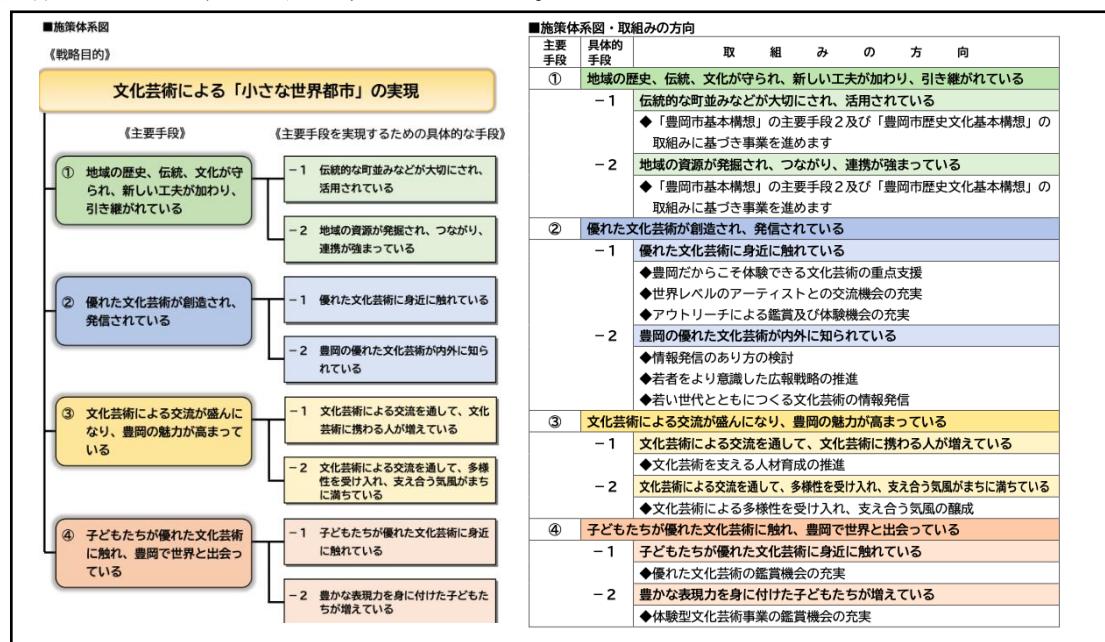


図 2 施策体制図（目的・取組）

第 2 期の文化芸術振興計画は、第 1 期のマイナーチェンジにとどまった。両者を比較すると、ほとんど中身が変わっていないことがわかる。違っているところは、「アーティスト・クリエーターの移住の促進」、および「文化芸術の鑑賞レベルの向上」という項目が消えていること。さらに「コミュニケーション能力の育成」から「体験型文化芸術事業の鑑賞機会の充実」へと文言が変わっていることだ。マイナーチェンジとはいえ、後述するように、ここで重大な変化が生じていた可能性もある。

さて、豊岡演劇祭を始めるに当たって、市の側ではかなり大胆な図を作成していた。つまり、豊岡

演劇祭を中心として、交通、観光、産業、生活支援サービス、市民参加、次世代育成、環境などの地域課題を包括的、総合的に解決するという壮大な構想を描いていた。この図3に基づいて、2020年から地方創生推進交付金を獲得している。「深さをもった演劇のまちづくり」という当時の中貝市長の肝入りの政策が、交付金の中心に据えられていたのである。

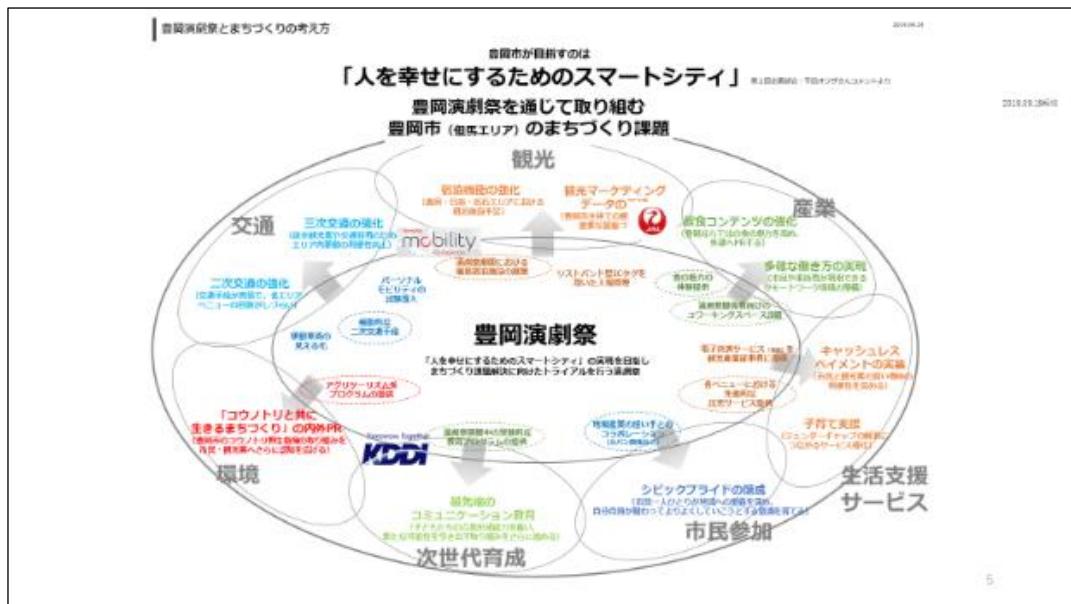


図3 豊岡演劇祭とまちづくりの考え方

演劇祭の財源構造については（実行委員会形式のためであろうか）公表されておらず、予測で語るしかないが、文化庁の調査によると以下のような記述がある。「2023(令和5)年の開催には合計1億2,000万円を要したが、文化庁や県からの補助金、周辺自治体の委託金などもあり市の負担は5,900万円であった。このうち一般財源での負担は50万円に過ぎず、地方創生推進交付金や企業版ふるさと納税等が活用できたことが大きい。(5,900万円の内訳:地方創生推進交付金(50%)、企業版ふるさと納税(34%)、個人版ふるさと納税(15%)。) ただし、地方創生推進交付金は2024年度までの期限で、継続のために今後どう財源を確保するかが課題になる」¹。

地方創生推進交付金2020年度～2024年度「深さをもった演劇のまちづくり事業」は2分の1助成なので、市の側では「ふるさと納税」で残りの半分を補っている。実際に市の一般会計、少なくとも市民税をほとんど使っていないという構造は事実である。けれども、ふるさと納税の使い方については意見が分かれるところだろう。

その他の5,000万円であるが、一番大きいのは文化観光推進の地域計画である。2021年に策定され、5年間助成される。1件当たり年間5,000万円が目安だが、中間評価で減額されることもある。豊岡市の地域計画による補助金は現在、3,000万円台になっている可能性もある。また、2024年度までとされていた地方創生推進交付金が2025年度まで1年延長されるようだ。このように財源構造に

¹ 令和5年度「文化行政調査研究 地方文化行政の機能強化に向けた調査研究報告書」文化庁、委託先 株式会社シー・ディー・アイ 令和6年3月、32頁。

については、この5年間は概ねうまくいってきたが、今後については未確定の要素も少なくない。

ここで、豊岡市の文化政策と演劇祭の政策評価との関係について、重大な問題を指摘しなければならない。先に述べたように、第2期の豊岡市文化芸術振興計画は、2022年に第1期の計画をマイナーチェンジしたものである。行政の内部で改定作業を行い、筆者だけがアドバイザーとして関わった。第1期のような審議会はつくられず、また市民アンケート等も行われなかつた。

けれども、豊岡市文化芸術振興計画の第1期と第2期の間で決定的に重要な出来事があった。豊岡演劇祭が始まったことと、芸術文化観光専門職大学が開学したことだ。ところが、演劇祭の創設以後に改定が行われたにも関わらず、演劇祭の実施等の施策が明示されていない。2022年度から5年間の公式な市の文化政策に演劇祭は含まれていないのである。

他方、第2期地方創生総合戦略では、「深さをもった演劇のまちづくり」がうたわれ、交付金を獲得。2021年には文化観光振興地域計画補助金も獲得して、豊岡演劇祭が本格開始された。ところが2021年の市長の交代で、国からの補助金を獲得する戦略と、市の文化政策の具体的施策が不整合のまま、現在にまで至っている。豊岡市の文化政策を、演劇祭を中心に考察した場合、決定的な自己矛盾が生じてきている。この市長交代劇による補助金政策と文化政策のネジレの背景については、簡単に説明しておく必要があるだろう。

繰り返しになるが、2021年4月、本学が開学した。その矢先、想定外の市長交代劇が起き、全国の芸術文化関係者に衝撃が走った。新市長となった関貫久仁郎は、選挙戦において現職の市政を次のように攻撃した。「主人公は市民。だが、いま市のやっていることは市民の気持ちとリンクしていない」。市の進める「演劇のまちづくり」が標的となつた。「豊岡演劇祭に数千人が訪れたというが、市民の文化芸術やスポーツ振興が置き去りにされている。地域で頑張っている人たちのために財源を使うべきだ」²と中貝市長の文化政策を批判したのである。

これに対し中貝宗治は、市民に以下のような理解を求めた。「『小さな世界都市』の実現に邁進してきた。だが、それは一里塚。最終目的地は『いのちへの共感に満ちたまち』だ」³。2005年に、コウノトリの野生復帰事業に成功したあと、中貝市長は城崎温泉にある県営の会議施設を引き取り、城崎国際アートセンター(KIAC)へリノベーションした。そのアーティスト・イン・レジデンス事業は大成功を収め、KIACの名は海外にまで知れ渡つた。

ときを同じくして、情緒と景観に恵まれた城崎温泉がインバウンド観光のメッカとなった。芸術文化と観光を架橋して地域社会に新たな価値を生み出す。その先進的なコンセプトが、芸術文化観光専門職大学の誘致に結実。さらに豊岡市が推進するジェンダーギャップ解消の取り組みも全国から注目を集めていた。

「演劇のまちづくりの目的は観光振興。観劇を軸にした滞在型ツーリズムを確立し、宿泊業や飲食店に経済効果をもたらす」。「国の交付金や、演劇のまちづくり向けのふるさと納税を活用しており、豊岡演劇祭の市民負担はゼロだ」⁴。中貝の反論にもかかわらず、豊岡市民は現市長の続投を拒んだ。関貫は「子どもの医療費無料化」をワンイシューに勝利したといってよい。現在にまで至る豊岡市の

² 朝日新聞「豊岡市長選 候補者の横顔」、2021年4月20日。

³ 同上

⁴ 朝日新聞「中貝・豊岡市長 市政20年を振り返る」、2021年4月29日。

補助金政策と文化政策のネジレの背景には、上記のような歴史的な出来事があったのである。第2期の豊岡市文化芸術振興計画の主要施策に演劇祭を加えなかつた理由も明らかである。

ただし、「豊岡演劇祭に数千人が訪れたというが、市民の文化芸術やスポーツ振興が置き去りにされている。地域で頑張っている人たちのために財源を使うべきだ」という関貫の主張については、虚心坦懐に耳を傾けるべきであろう。以下の市民アンケートから、そのためのエビデンスが見出されるかもしれない。

市民アンケートからみる演劇祭評価

実は2017年、文化芸術振興基本計画をつくる前に、かなり綿密に多面的なアンケート調査を実施した。その後、プレの演劇祭が2019年に開催され、2020年から本格実施される。ところが、演劇祭の開催によって、地域住民の芸術文化に対する意識がどのように変わったのかという、いわば社会的インパクト評価に関する調査が、市の側ではまったく行なわれてこなかったのである。

第2期の豊岡市文化芸術振興計画を策定する際にも、本来であれば、改めて住民アンケートを行い、過去5年間の文化政策についてレビューした上で改善を図るべきであったが、すでに述べたように最低限の改定に終わった。

もとより、豊岡市の公式の文化政策には演劇祭の開催は含まれていない。文化芸術振興計画に明記されていない施策を政策評価の対象にすることはできない。けれども、市長選の争点となった文化政策の相違、すなわち「深さをもった演劇のまち」を目指すのか、それとも「市民文化を支援」するのかについて広く市民の声を聞くことは、広義における文化政策評価に相当する。

このような複雑な事情を踏まえた上で、なおも文化政策評価を行うのであれば、2016年度に行った市民アンケートと比較可能な項目を含む調査を行う必要がある。そこで今回、市の協力を得て、本学の研究チームが市民アンケートを実施することとした。

2016年には「豊岡市の文化芸術に関するアンケート調査」として18歳以上の市民1,200人を対象に、9月2日から10月11日まで市民アンケートを実施した。1,200人を無作為抽出し、444件の郵送による回答があった。回収率は37%である。そのほかにも若年層にターゲットを絞り、新成人750人(有効回答数60.5%)、高校生2,531人(同96%)へのアンケートを行った。

また、市内の施設利用者に対しても各施設で直接アンケートを実施し、459の有効回答件数があった。施設運営者23施設に対するアンケートでは19の有効回答数があった。さらに本市で文化芸術活動等に取り組む関係団体(NPO等)37団体(有効回答数30)に事前アンケートを行い、そのうちとくに興味深い回答のあった4団体に対してヒアリング調査を行った。

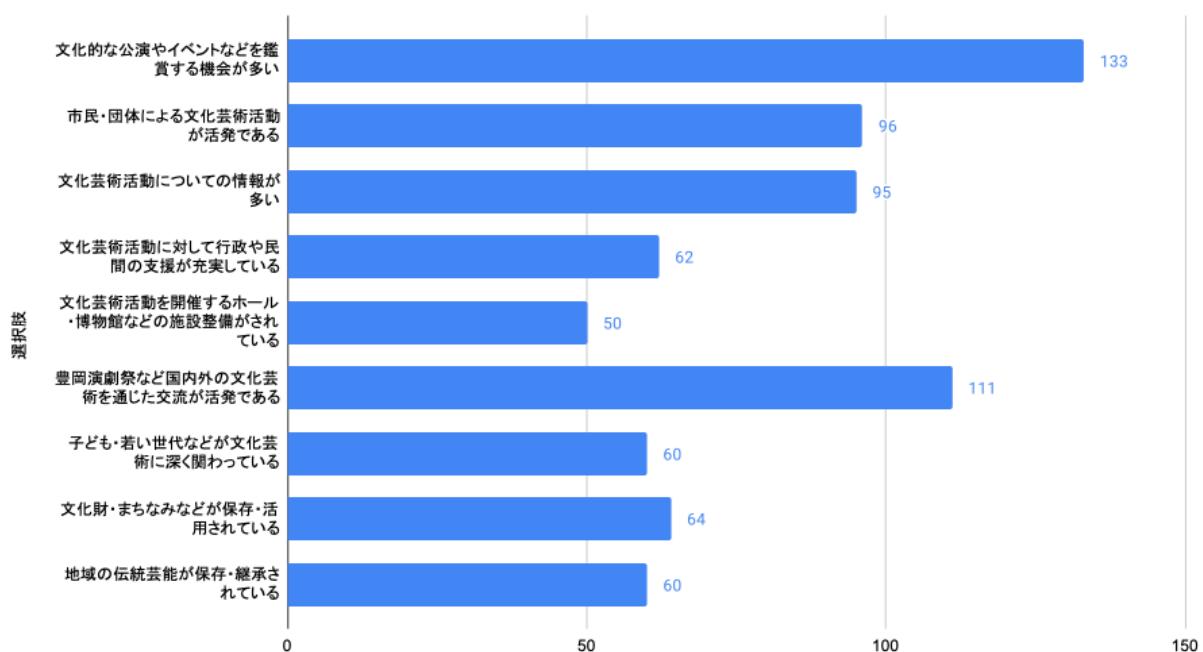
今回、これらと同規模のアンケートやヒアリングを行うだけのリソースが無かつたため、1,200人を対象とした市民アンケートのみを実施し、2016年との比較を行うこととした。2024年11月6日からの2週間と期間が短かったにも関わらず、郵送405、オンライン88、合計で493件の回答を得た。回収率は41%である。

性別では女性56.9%、男性43.1%。年齢は20代7.1%、30代9.9%、40代13.2%、50代21.3%、60代22.5%、70代14.2%、80代6.7%で、10代は数%にとどまった。居住地域は人口比とは異なり、バランスよく集まつた。竹野17.4%、日高17.4%、豊岡17%、城崎14.4%、但東14%、出石19.8%である。

以下、演劇祭関連に要点を絞って回答を分析する。

問5で「あなたは、豊岡市を文化芸術の盛んなまちだと思いますか」と聞いたところ、「思う」が8.8%、「思わない」が9.7%、「どちらともいえない」が34.6%、「どちらかと言えば思わない」が15.6%、「どちらかといえど思っている」が31.8%となった。「思う」と「どちらかといえど思っている」を合わせて40.1%。2016年の調査では、「思う」が8.1%、「どちらかといえど思っている」が23.9%で合計32%。「文化芸術の盛んなまちだと思います」市民の割合が8ポイント増えている。これに対して「思わない」と「どちらかといえど思わない」を合わせて25.3%。前回は「思わない」が14.4%、「どちらかといえど思わない」が19.6%で合計34%。9ポイントのマイナスとなっている。いずれも1割近い有意な変化が認められるが、その理由が演劇祭の開催によるものかどうかが注目される。

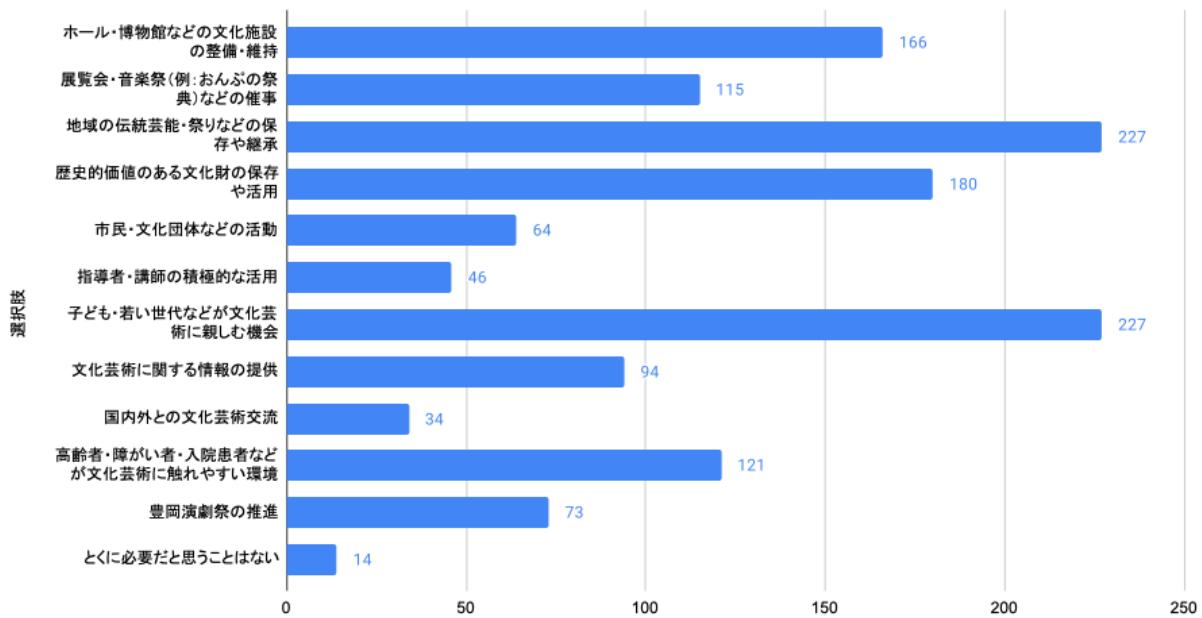
問6-1「文化芸術が盛んだと思う理由は何ですか」



上記の問6-1は、文化芸術が盛んだと思う人に、その理由を聞いた結果である。理論上40%、つまり200人弱が回答していると想定される。複数回答可のため、パーセンテージでの比較は曖昧となるが、「豊岡演劇祭など国内外の文化継承を通じた交流が活発である」を56% (111/200) が選択している。前回の調査では「国内外の文化芸術を通じた交流が活発である」という選択肢についていたが、複数回答可でも142名中9.2%であったことから、豊岡演劇祭の開催が一定の増加要因になったものと解釈できる。

他方「文化財、町並みなどが保存・活用されている」に対しては、前回は38.7%が選択していたが、今回は32% (64/200) に減少。同様に「地域の伝統芸能が保存・継承されている」は30% (60/200)。前回は32.4%だったので、大差はない。これらの点からも、文化芸術が盛んであると思う市民が1割近く増えた理由として、豊岡演劇祭の開催を挙げることは妥当であろう。

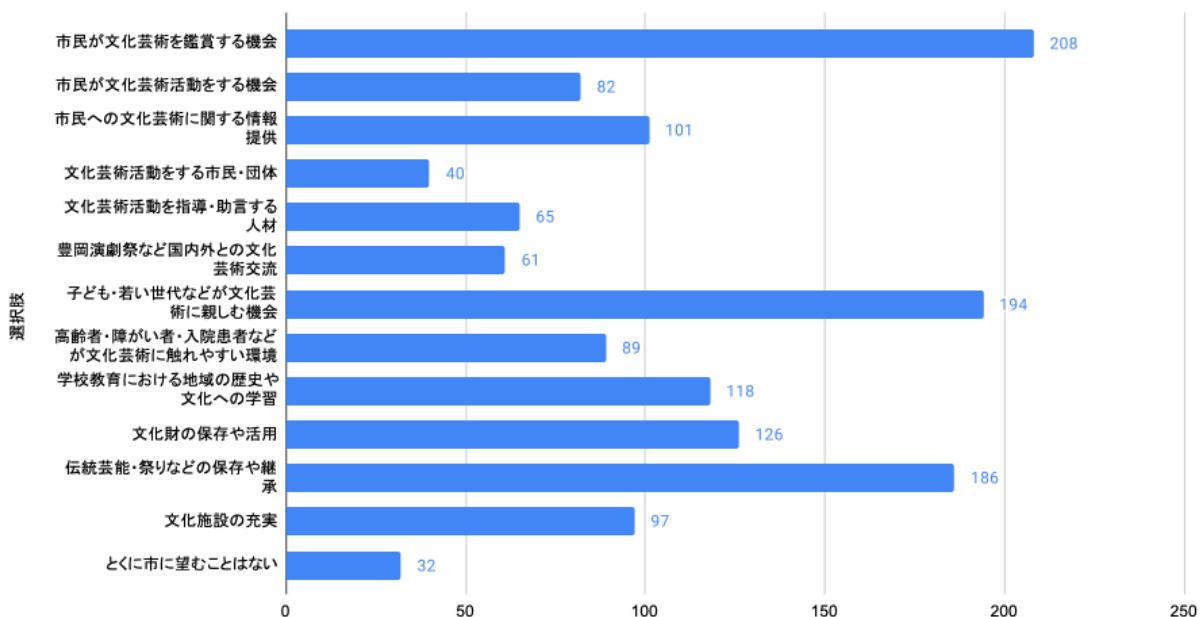
問11「あなたは、今後、「お住まいの地域」の文化的環境を充実させる、まちづくりを推進するために、何が必要だと思いますか？」



問11では、居住地域の文化的環境を充実させるために何が必要かを聞いた。5つまで選択できる。「地域の伝統芸能・祭りなどの保存や活用」及び「子ども・若い世代などが文化芸術に親しむ機会」の2項目が227で同数トップ。これらは前回の調査と同じ傾向で、約半数の市民がこの2つの選択肢を選んでいる。「展覧会・音楽会などの催事」は115で、これも前回とほぼ同じ割合である。

今回、「豊岡演劇祭の推進」を選択肢に追加したが、73にとどまった。約15%である。1つだけ選択するとしたならば、その割合はどうであったろうか。文化芸術が盛んであると思う市民の割合が1割近く増えた押し上げ要因として豊岡演劇祭を挙げたが、「演劇祭の推進」を望む市民の声は10%台にとどまっている。

問13「あなたは、今後、豊岡市の文化芸術を振興するために、市が支援するべきだと思うことは何ですか？」

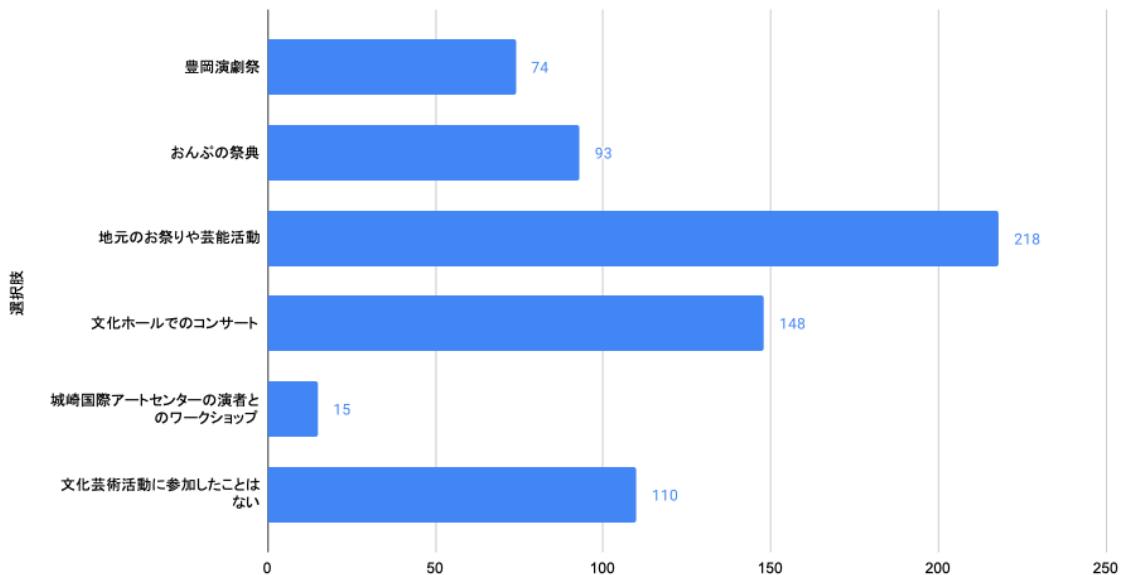


問13では、今後、豊岡市の文化芸術を振興するために市が支援すべき分野について聞いた。これも5つまで選択できる。前回は「子ども・若い世代などが文化芸術に親しむ機会」(49.8%、今回39.4%)が一位で「市民が文化芸術を鑑賞する機会」(42.3%、今回42.2%)が二位であったが、今回は逆転した。

「伝統芸能・祭りなどの保存や継承」を選択した人は前回34.2%、今回は37.7%に増えている。文化政策の重点分野として市民の声が「子ども・若い世代」「文化財」「伝統芸能・祭り」の3分野に集中していることは地方都市の一般的な傾向である。

以下は、2016年には無かった新規の設問である。

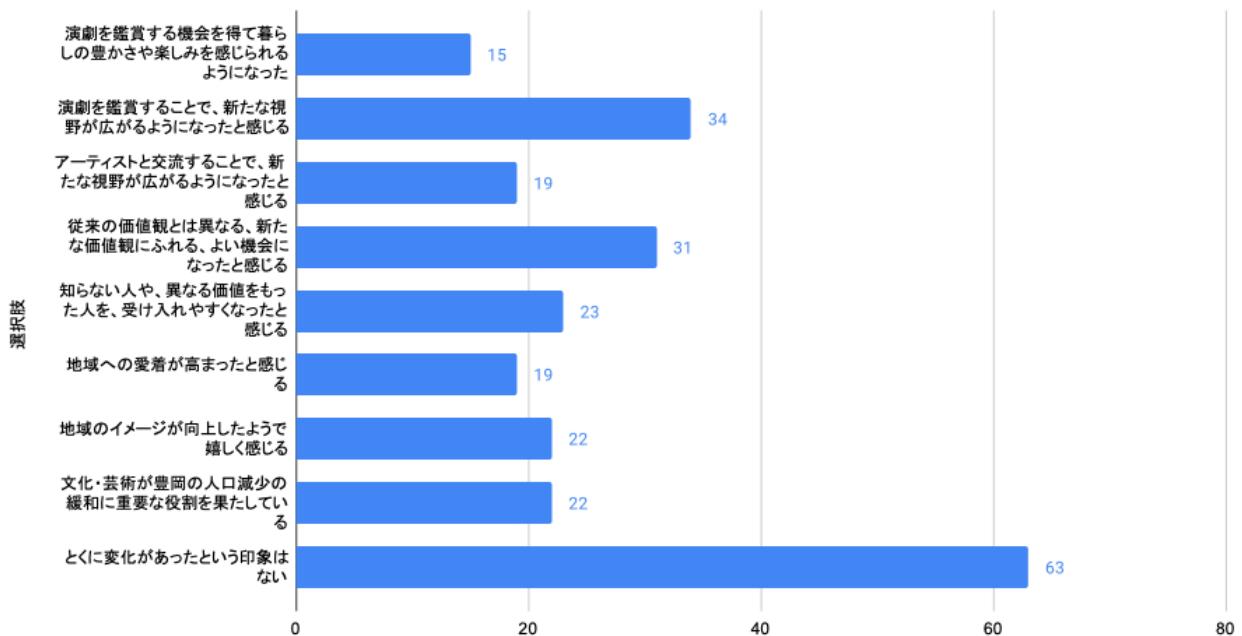
問15「あなたは、どの文化芸術活動に鑑賞・参加した経験がありますか。鑑賞・参加経験のあるものをすべて選択してください」



問15では、鑑賞・参加したことのある文化芸術活動を聞いた。あえて活動や事業の種類を限定し、豊岡市の特徴を浮き彫りにしようと意図した。回答数は658なので複数回答者も少なくないが、「文化芸術活動に参加したことない」との答えが110あった。493名全員が回答したとして22.3%に相当する。「地元のお祭りや芸能活動」が218と44.2%を占め、「文化ホールでのコンサート」が148で30%である。これに対し「おんぶの祭典」は93で17%、豊岡演劇祭は74と13.5%、いずれも10%台だ。「城崎国際アートセンターの演者とのワークショップ」は隣保の回覧板で全世帯に周知されているが、実際に参加した数は15名、3%である。

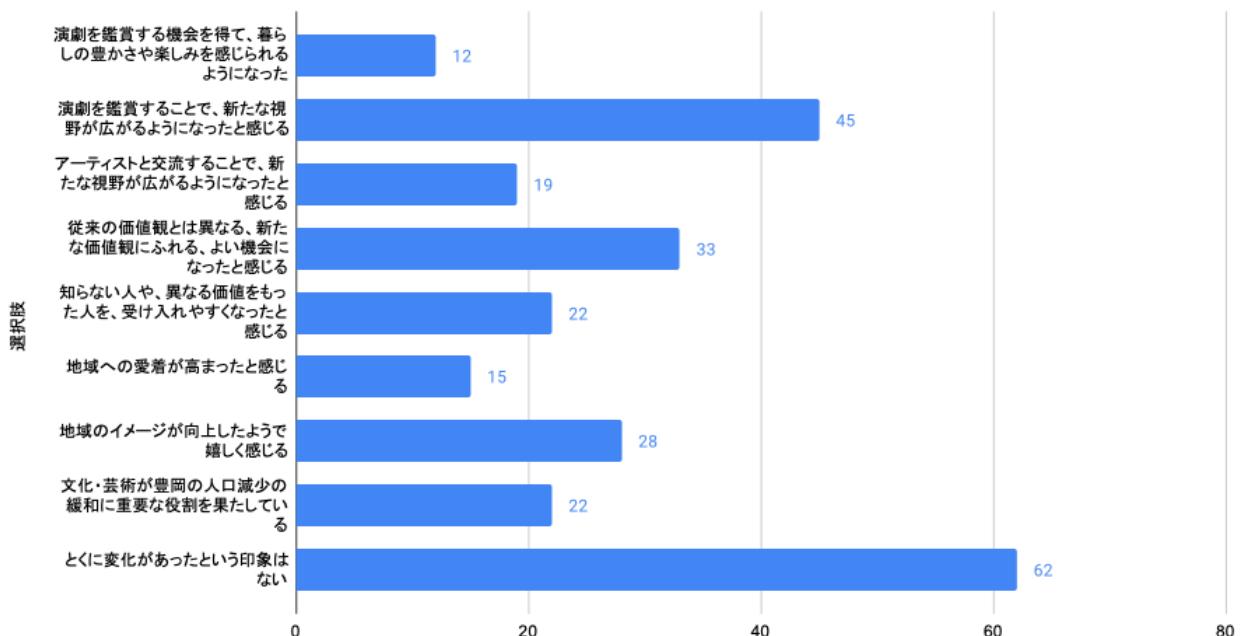
さて、子どものための豊岡オリジナルの音楽祭である「おんぶの祭典」が10年間継続している一方、豊岡演劇祭はその半分の5回まで開催してきた。公演数、期間、予算ともに豊岡演劇祭と「おんぶの祭典」では、その規模は桁違いであるが、市民への浸透度だけを見ると「おんぶの祭典」が一つの指標になるかもしれない。すでに市民の7~8人に一人が演劇祭を経験しているというのは、着実に実績を積み上げつつあることの証左ともいえる。かりに10回目までに2割の市民が演劇祭を経験することになれば、それは「深さをもった演劇のまちづくり」という政策が、いわば伏流となって市民文化と合流することになるかもしれない。

問16「あなたの暮らす地域で「豊岡演劇祭」が行われることで、「地域の人や暮らし」にどのような変化があったという印象をお持ちですか」



最後の2つの設問は、もとより重なるところがあり、その結果も同様の傾向を示すものとなった。豊岡演劇祭の社会的インパクトを、問16では「地域の人や暮らし」の変化の側面から聞き、問17では「あなたおよびご家族」にとっての変化の側面から聞いてみた。9つの選択肢は、2016年の調査の際、「文化的環境の充実によって期待する効果」で聞いたもの及び「子どもの文化芸術体験によって期待する効果」で聞いたものと、豊岡演劇祭のミッションとされるフレーズとをアレンジして作成した。「視野の広がり」「多様な価値観にふれる」「異なる価値観を持った人を受け容れる気風」といったミッションである。それらが社会的インパクトをどの程度生み出しているかの評価を試みた。

問17「あなたおよびご家族にとって「豊岡演劇祭」が行われることで「あなたおよびご家族」にとってどのような変化があったという印象をお持ちですか」



問16の「地域の人や暮らし」に対する変化と、問17の「あなたおよびご家族」に対する変化を比較しながら考察してみよう。まず回答数は問16が246、問17が258だ。アンケートのナビゲートでは、問15で「豊岡演劇祭」を経験したことのある74名だけに、問16及び問17の回答をお願いした。それぞれ5つまで選択できるので、理論上の回答数は370まで可能である。平均化すると問16では一人あたり3.2、問17では3.5の選択肢を選んでいる計算となる。

両問とも「とくに変化があったという印象はない」が突出して多く、63と62になっている。回答数全体から見れば25%であるが、回答者が74名であることに注目するならば、86%の市民が「とくに変化がなかった」という印象を持ったことになる。極言すれば、豊岡演劇祭の社会的インパクトは、市民にとっては十分に自覚化されるまでに至っていないのである。

2番目に多い「演劇を鑑賞することで、新たな視野が広がるようになったと感じる」は、主に個人的な変化なので、問17のほうで45(17.4%)を集めているのは理解できる。その他、目立った特徴はない。けれども、一点気になるのは「地域への愛着が高まったと感じる」を選択した市民が、両問とも一番少ないことである。

筆者は先に、豊岡市を文化芸術が盛んであると思う市民の割合が1割近く増えた押し上げ要因として、豊岡演劇祭を挙げた。「豊岡演劇祭など国内外の文化継承を通じた交流が活発である」を56%の市民が選択している。前回の調査では9.2%であったことから、豊岡演劇祭の開催が一定の増加要因になったものと解釈した。しかしながら、豊岡演劇祭の開催が、いわゆる「シビックプライド」の形成にほとんど寄与していない事実も明らかとなった。

それでは、豊岡演劇祭を通じて「地域への愛着が高まる」ためには、どのような企画運営方針を立て、いかなる仕掛けをつくったらよいのだろうか。「ローカルを掘り下げることがグローバルにつながる」というのが中貝前市長の哲学であったが、その理念を試金石に、現在の豊岡演劇祭を評価するとどのようになるだろうか。まだ結論を出せる時期でないことは確かだが、残り続ける問いは重い。

「批評」にもとづく豊岡演劇祭の芸術的評価の試み

藤野 一夫

(芸術文化観光専門職大学 副学長／芸術文化・観光学部 教授)

はじめに

豊岡演劇祭は多くのメディアに取り上げられているが、観光との結びつきや経済効果に注目した記事が多く、本格的な劇評を目にするることは少ない。オールドメディアに限定すると、各新聞社の但馬版では、ご当地ものの作品を中心に、現地の記者が多数の記事を掲載してくれている。一方、全国紙では演劇を専門とする記者や論説委員がいるにもかかわらず、豊岡芸術祭の批評とみなしうる記事はほとんど掲載されていない。

そこで、演劇祭の総合評価に欠けていてはならない芸術的観点からの評価を、自前で試みることとした。批評家として優れた資質をもつ京都大学大学院に在籍する石川祥伍さんと、本学の3年生で批評に関心をもつ万代陽子さんに、複数の劇評をお願いした。石川さんによる批評の全文と、万代さんによる批評からの抜粋を以下に掲載することで、豊岡演劇祭の芸術的評価を、定性的側面から試みたのである。

意義と課題

石川さんは、9月14日と15日の二日間で合計6作品を鑑賞。これらの作品を手がかりに、豊岡演劇祭が試みていることを浮かびあがらせようとしている。それは、演劇を取り巻く昨今の環境とともに考えなければならない。演劇という構造そのものが揺らいでいるなかで、豊岡で演劇祭を開催することの意味を根本から問いかけ、自分なりの答えを見出そうとしている。その問い合わせの間にある思索が、石川さんの批評となっている。

私は当初、石川さんから6つの劇評を個々に書くのではなく、連続させて1つの批評文にしてもよいか?という質問を受けた。出来上がった劇評を読んではじめて、その意図を理解できた。現在、演劇という構造そのものが揺らいでいるなかで、豊岡演劇祭を開催することの意味は何かと自問したとき、演劇という構造を揺るがしている出来事をキーワードで概念把握する作業が始まる。「演劇を傍観し、演劇を救済する」が石川さんのタイトルだ。

作品ごとのテーマをキーワードで把握し、相互の批評を「連歌」ようにつないでゆく。すると、個々の公演相互の関係が、連続批評を通して一つの布置関係(Konstellation)、すなわち「星座」となって浮かび上がってくる。石川さんが取り上げた6つの作品が、相互にどのように関連し、どのような星座に見えるか。私たちは、石川さんの解釈や意味付けに従う必要はない。それは演出家やディレクターが意図したものとも異なるだろう。

豊岡演劇祭を開催する意味への問い合わせには、もちろん正解があるわけではない。「観光のため」と明言した人がいるが、それは陳腐だ。答えはすべての観客に開かれている。だから、観客たちは自分の答えを探そうとして、同じ観劇体験をした別の観客と議論を始める必要がある。その議論する観客たちが豊岡演劇祭を開催することの意味について、本来であればさまざまな応答をしてくれるはずだ。残念ながら豊岡演劇祭には、そのような議論の場が少ない。私の個人的な感想であるが、このような状況で演劇祭を評価することは難しい。今後の課題の一つであろう。

演劇を傍観し、演劇を救助する：豊岡演劇祭 2024 作品評

石川 祥伍

(京都大学大学院 文学研究科 博士前期課程)

今春から京都に住み始めたこともあり、豊岡演劇祭に行くことにした。9月14日と15日の2日間で合計6作品を鑑賞した。鑑賞する作品は、私の好みとスケジュールの都合で選んだ。6作品だけで豊岡演劇祭のすべてを語ることは到底できない—かりにすべての作品を鑑賞できたとしても、すべてを語ることはできない。けれども、これらの作品を手がかりに、豊岡演劇祭が試みようとしていることを浮かび上がらせられるかもしれない。

もちろん、豊岡演劇祭の試みは演劇を取り巻く昨今の環境とともに考えなければならない。若い作り手が経済的支援を受けられない結果、公演が実施できなくなったり、クリエイションにおける加害が明るみに出たり、小劇場演劇、もっと言えば演劇という構造そのものが揺らいでいるなか、豊岡で演劇祭を開催することにどのような意味があるのだろうか。

そして、今年5月にこまばアゴラ劇場を閉めた平田オリザは豊岡に何を求めているのだろうか。これらの問い合わせに網羅的に答えることはできないかもしないが、すくなくともそれを試みることには意味はあるのではないか。早速やってみることにしよう。

松原俊太郎 / 小野彩加 中澤陽 スペースノットプランク『ダンスダンスレボリューションズ』は、昨年（2023年）京都芸術センター フリースペースで初演された作品だ。今年の豊岡演劇祭ではフリンジセレクションとして、TOYOOKA1925と豊岡稽古場 市民ギャラリーで再演された。私がこの作品を観劇した豊岡稽古場 市民ギャラリーは横に長い空間だ。空間の中央には長机が用意され、そこに左から松原、小野、中澤が座っている。舞台の両端には人が一人入れるくらいの縦長のテントがそれぞれ一つずつ設置され、そこに児玉北斗演じるスワンと斎藤綾子演じるディディが入っている。

開演前、中澤は来場する観客に会場のトイレの位置を念入りに説明する。「男性用トイレは向かって右側、女性用トイレは向かって左側にあります」という文句は、観客が来場するたびにスピーカーか

ら発される。戯曲には記載されていないこの文言は、一見すると会場にかんする事務的な説明であり、作品の内容と強く結びついていない。しかし、繰り返される中澤の台詞は、メロドラマとしてこの作品がもつ異性愛規範を誇張する。

実際、スワンがディディを追いかける場面で、スワンは最終的にディディに追いつけず、そのまま男性用トイレがある上手の舞台袖へと駆け込む。恐怖を覚えるディディに対し、スワンは「その恐怖感は否応なくぼくも強制収容されている男たちの歴史が生んできたものです」と、構造的性差別の加害者の中に自らを位置づける。空間に内在する男女というジェンダーバイナリーを、開演前の中澤の文句と松原の戯曲がえぐりだす。

このジェンダーバイナリーは『ダンスダンスレボリューションズ』というメロドラマを持続させるために必要なものだ。それはスワンがディディとの関係を「異性愛カップルの代理表象かかし」と称するときに、スワンが言わんとする二人の関係にかかっている制限、いわゆる「ループ」からの出られなさを象徴する。このループから脱するための一つのきっかけとして、ディディと友人のミチコは、観客から向かって中央奥にあるガラス扉から外に駆けていく。そのとき、はじめて左右の矢印しかなかった空間に上の矢印が出現する。

この作品の名前の由来となっているゲーム「ダンスダンスレボリューション」で、プレイヤーは画面に流れる上下左右の矢印にあわせて、足元にある上下左右の矢印をタイミングよく踏む。このゲームはダンスゲームというよりも、身体全体を使ったリズムゲームといったほうが理解しやすい。このゲームのシステムに倣い、『ダンスダンスレボリューションズ』でも上演される空間は上下左右の四方向に分けられる。

この作品で何度も繰り返される、テントを起点としたスワンとディディの歩行も、直角で曲がる動きだ。児玉と斎藤というプロのダンサーによって演じられるスワンとディディの動きは上下左右に制限されてしまう。動きが制限されるといつても、作品のクライマックスで、「いつもの場所」で再会するスワンとディディが披露するバレエダンスは圧巻だ。

戯曲ではポストモダンダンスの創始者と評される振付家トリシャ・ブラウンと、ドライグクイーンがボールルームで多用したヴォーギングを組み合わせた「トリシャ・ヴォーギング」と呼ばれるこのダンスは、しかしその名前とは裏腹に空間的に制限される。二人は長机を挟んで横一直線に踊ることしかできないのだ。

私はまだこの作品における下の矢印について述べていない。下の矢印が現れるのは、まさに上演後、観客が会場を後にしていくときだ。建物を出る際、観客は会場の真向かいにあるもう一つの会場にする。この作品は TOYOOKA1925 と豊岡稽古場 市民ギャラリーという、道を挟んで真向かいにある二つの会場で上演された（9月12日、13日は TOYOOKA1925、14日は豊岡稽古場 市民ギャラリー）。

この事実はたんに同じ会場を全日予約することができなかつた事務的なミスに起因するものではないだろう。

二会場での上演は、観客が、この作品が別の空間でも上演される可能性に出会うことを狙つてなされたものだろう。そして観客が出会うのは、スワンとディディが出会う「いつもの場所」が偏在する可能性であり、小さな、クィアな革命が複数性を帯びる可能性もある。

だが、そのような可能性もある具体的な場所から考えなくてはならない。豊岡という場所で演劇を上演するとは、どのようなことなのだろうか。この問い合わせに対して一つの応答を試みるのが、**安住の地『かいころく－工女編－』**だ。昨年の豊岡演劇祭で上演された『かいころく』の新しいバージョンとして、この作品は戦前から戦後にかけて、養蚕業に従事する女性たちに焦点を当てている。

この一人芝居で、俳優の山下裕英は4人の登場人物を演じる。主人公のみと、みとの母のきぬ、みとの祖母のきぬ、そしてみとの娘のまゆである。山下は軽やかに4人の女性たちに変化しながら、養蚕業を営む女性たちの物語を脈々と語っていく。

この作品でとくに印象的だったのは、蚕の糸を紡ぐ山下の細やかな手つきだ。会場となった日本基督教団・但馬日高伝導所は小さな教会で、15人ほどの観客しか収容できないこともあり、観客は山下の微細な指の動きから、額から滴り落ちる汗まで目にすることができた。

俳優と観客との距離の近さと対比されるかたちで、山下は蚕を栽培するときに必要な桑の木を切ったり畑を耕すときには大きく腕を振りかぶる動きをする。

糸を紡ぐことと畑を耕すことという養蚕における重要な仕事は、それぞれ女性と男性にそれらの役割があてがわされていた。だが、物語が進むにつれ男性たちが病や死に倒れていくなか、女性たちがどちらの仕事を担う必要が出てくる。

細やかな動きと大きな動きが反復する過程で、私たちは戦争や生死のさなかで女性が何世代にもわたり養蚕産業に従事する壮大な歴史のナラティブを経験する。歴史的にみれば一世紀という長い時間が、ある小さな空間で、ある数人の女性を通じて語られる。

上演前、脚本の私道かぴが、但馬（豊岡市を含む兵庫県北部）での養蚕業の歴史についてのレクチャーを行った。到着が開演直前になった私はそのレクチャーのすべてを聞くことはできなかつたものの、そのなかで印象深かったのは、私道が1853年のペリーの黒船来航を日本の養蚕業のターニングポイントだと言っていた点だ。

開国直後から日本の生糸はヨーロッパやアメリカへの重要な輸出品だったこともあり、養蚕業は戦前まで日本経済を支えていた。この点は、それまでアメリカのためにつくっていた生糸を、戦争をきっ

かけにアメリカを倒すためにつくる、という皮肉の効いた台詞によって強調される。開国から太平洋戦争勃発までアメリカやヨーロッパへの輸出品として日本の経済を支えていた生糸は、戦争によって輸出が停止し、日本の戦時経済を支えるために生産されたのだ。

この転回は、『かいころくー工女編ー』が上演された日本基督教団・但馬日高伝道所という教会の空間にも通奏低音として響いている。キリスト教は、明治維新以後も継続して禁教政策が採られていたものの、1873年に西洋諸国からの抗議の結果、事実上キリスト教への弾圧は禁止された。

だが、明治後期から大正時代にかけて国家神道が台頭し、キリスト教信者への弾圧が強まる中、多くのキリスト教指導者も戦争への協力を示した。その最中、日本基督教団は政府の教会合同の要請により、それまで分裂していたプロテスタント教会が統合して太平洋戦争勃発の直前に結成された。

養蚕業が「アメリカのために」から「アメリカを倒すために」行われたことは、戦前から戦後にかけての日本基督教団および日本におけるキリスト教を取り巻く環境に呼応する。明治政府が西洋の列強からの抗議を避けるためにキリスト教への弾圧を取り下げたことと、プロテスタントの指導者が「アメリカを倒すために」政府の要請にしたがって日本基督教団を結成したことの構図は合致する。

そのとき、近代日本史において特異な位置を占める「ペリーの黒船来航」という出来事は、日本の養蚕産業のみならず、この作品が上演される空間の歴史性を理解するためにも重要になる。西洋の列強、とくにアメリカからの圧力によって、養蚕業の歴史が大きく変化したという物語が、教会という空間で上演されているとき、空間の遠近が強調される身体表現が歴史という時間に接続される。

『かいころくー工女編ー』で体現されていた空間の遠近は、劇団不勞社『悪態Q』ではさらに強調される形で上演された。舞台となった友田酒造という江原の酒蔵には、俳優を具現化しているかのような3つの巨大な貯蔵タンクがあり、その酒蔵のすぐそばには大きな赤い球体が天井から吊られている。

観客に近い舞台の両端にはブラウン管テレビとラジカセ、そして人形や玩具など雑多なものが置いてある。舞台におけるこの遠近の対比によって、もともと広い舞台空間はさらに遠く感じる。私は異空間にいるかのような感覚に苛まれた。

この空間の異物性は、作中に散りばめられているサブカルチャーの断片によって誇張される。上演前、15年前に放映されていたであろうテレビCMの音声の数々がラジカセから流される。冒頭の場面で幼稚園の先生たちが卒園式の見せ物のために練習する「ピンポンパン体操」は、もともと1971年にリリースされた、子供向けのテレビ番組のために制作された楽曲だ。

「こっちはジーコ、こっちはフィーゴ、じゃあここはベッケンバウアー、ベッケンバウアー」というタレントの大沢あかねのネタも20年ほど前のものだ。観客の世代や育ってきた環境によっては、か

ならずしも強いノスタルジアを喚起させないこれらのコンテンツは、その時代背景から切り離されることによって、一気に不気味さを帯びる。

懐かしいとは言い切れないコンテンツから醸し出される不気味さは、この作品の空間にも強く結びついている。劇団の代表で、本作の脚本・演出を務める西田悠哉は『悪態 Q』における空間を、アメリカのネットミームを借りて「リミナルスペース」と呼ぶ。「境界的空間」と直訳されるリミナルスペースは、「何かと何かの『中間領域』に現れた瞬間を捉えた画像群」(注1)を指し示す。

西田が「空間への当て書き」と呼ぶ手法で試みるのは、会場の友田酒造をリミナルスペースと捉えることである。言い換えれば、西田はこの作品が上演される空間そのものを一つのミーム、あるいはネタとして捉えようとしているのだ。

リミナルスペースというミームは明確な意味をもっていない。『悪態 Q』の作品説明で「例えば『明け方のショッピングモール』や『夏休みの学校の廊下』等」(注2)という画像例が挙げられるように、その具体例でしか定義することができない。したがってリミナルスペースの不気味さは、リミナルスペースの本質であるのではなく、明け方のショッピングモールや夏休みの学校の廊下といったさまざまな画像が集まることでなんとなく浮かび上がってくる。

「空間への当て書き」という手法は、役を演じる俳優を決めてから脚本を書く「当て書き」のように、あらかじめ上演される空間を念頭に置いたうえで脚本を書くことを指す。『悪態 Q』の場合、友田酒造という特殊な空間に、リミナルスペースという普遍的なミームを当て書きすることになる。この手法は、『悪態 Q』が豊岡に先立って上演された北千住 BUoY や京都芸術センター フリースペースでは機能するように思える。

これらの会場はこれまで多くの公演がおこなわれ、多くの演劇作品にフィットするようにつくられた普遍的な空間だ。ミームという抽象的なものを普遍的な空間に当て書きすることは、会場ごとの些細な差異を除けば、容易であるはずだ。だが、友田酒造という土地に結びついた特殊な空間において、リミナルスペースというミームを当て書きすることは困難なように思える。

しかし、『悪態 Q』はそれでもリミナルスペースというミームを「クエスチョン」として空間に投げかけ、「アンサー」が返ってくることを期待する。それは翻訳の可能性に賭けると言い換えてもよい。翻訳とはある言葉に文脈を与えることによって、別の言葉に言い換えることである。それは作中でも実践されている。第二部のロッカールームのシーンでは、サッカーの試合相手に言われた「サッカーフリークス」という言葉が話題にあがる。

この言葉は「サッカーに熱狂する人 soccer freaks」とも翻訳でき、「変わり者 sucker freaks」という罵倒語と理解することもできる同音異義語だ。結局、ヨーロッパ出身の選手によって発話された

のであれば、サッカーというスポーツは「フットボール」と発話されるだろう、という文脈の理解のうえで、「サッカー」は「sucker」、つまり悪態として翻訳される。

では、リミナルスペースというミームを、友田酒造という文脈において翻訳した場合、どんなアンサーが返ってくるのだろうか。あらためてリミナルスペースについて説明すると、それは「何かと何かの「中間領域」に現れた瞬間を捉えた画像群」であり、それらに共通するのは「そこに人の痕跡がほとんど見当たらないことくらいだろう」(注3)。

たしかに、『悪態 Q』に人の痕跡は見当たらない。というのも、戯曲において登場人物は「存在」として呼ばれ、それらは「比較的男／女性のように見える」ものの、人間ではない。そんな中間領域のあいだにある「何か」とは、一言で言えば人間同士の交流である。上演前から、会場の入り口には友田酒造の製品やグッズが販売されており、上演後も観客と俳優が会話を楽しみながら、友田酒造の日本酒が振る舞われていた。つまり、『悪態 Q』は友田酒造という文脈を通じて、人の存在の中間領域に、人が不在のリミナルスペースを形成する。

星野太はリミナルスペースが醸成する不気味な情動が「修辞的崇高」を体現していると主張する。私たちが考える、超越的な存在に対して抱く崇高とは異なる修辞的崇高は「いかにも莊厳・壯麗な言葉に付与されるものではなく、ごくありふれた日常のやりとりのなかにふと現出する」(注4) ものである。それは具体的に言えば、「日常的な言葉のやりとりの背後には、いついかなる瞬間においても生じてしまう言語と人間の裂け目が控えている」という「言語に内在する崇高」(注5)のことだ。

『悪態 Q』では、この修辞的崇高という概念が、悪態という言語をめぐり思考される。最後の場面で存在2が叫ぶ悪態の数々（「ばか！あほ！ちび！でぶ！はげ！くそ！…」）は、それらが連呼されるたびに意味性を徐々に失い、しだいに空虚な記号になる。相手を罵倒したりけなしたりするために用いられるはずの言葉たちがその効果を失って、ただそこに浮遊している。

だが、SNS や匿名掲示板、動画のコメント欄で溢れる悪態の数々は、人々を傷つけ、場合によっては死に追い込む。だからこそ、上演後の観客や俳優、地元の人々どうしの、言葉を通じた交流は、劇団不労社が通訳の不可能性を知りながらも、それでも通訳が偶然うまく行われることを祈っていることを示している。

演劇における翻訳・通訳の問題をいち早く議論の俎上に載せようとしたのは、ほかでもない平田オリザである。青年団の主宰で、豊岡演劇祭のフェスティバルディレクターでもある平田は、2000年代以降、多くの多言語演劇を制作してきた。平田による作・演出で上演された青年団『銀河鉄道の夜』も、一つの多言語演劇として理解することができる。

俳優による日本語での発話、舞台上の手話通訳者による日本手話、そして日本語・英語字幕による上演により、日本語話者の聴者、ろう者、英語話者が戯曲の内容を理解できるようになっていた。

私は舞台手話通訳つきの公演を見るのがはじめてだった。手話通訳者が俳優とともに動きながら通訳していたことには驚いた。しかも通訳者はただ動いているだけでなく、発話している俳優の横につきながら同時に通訳していた。通訳者は二人いるので、それぞれの通訳者がどの俳優の発話を通訳しているのかが識別できるように、通訳者はそれぞれ通訳する俳優の動きに対応する。通訳者は演者と同じように舞台上の箱の上に乗ったりしながら、大きな動きや表情を出す。徐々に俳優と通訳者の見分けがつかなくなっていく。もちろん通訳者は黒い服を着ていて、カラフルな衣装を着た俳優とは差別化されている。しかし、外見の差異はここでは意味をもたない。

ある言語を別の言語に変換する通訳という行為において、どの言語からどの言語に通訳されているかは、原理的にはその二つの言語が時間的にどう配置されているかでしかわからない。翻訳アプリでは入力する言語があり、翻訳をすると別の言語が出力される。『銀河鉄道の夜』においては、日本語の発話は日本手話へと同時に通訳されるので、とくに耳の聞こえる観客にとって、どちらがどちらに通訳されているかを判断する材料は、俳優と通訳者の外見の差異しか存在しない。

もちろん観客は「舞台手話通訳つき」という情報が事前に伝えられているので、日本語が日本手話に通訳されていることは知っているのだが、そういった前提をいっさい消去したとき、私たちには俳優と通訳者の見分けがつかなくなる。

私たちが俳優と通訳者とのあいだに指定している境界は、衣装やメイクといった外見の差異ではなく、私たちが前提としている、通訳者は俳優の発話を字義通りそのまま手話に通訳しているという間違った考えのうえに成り立っているのではないだろうか。この間違った考えには二つの要素が含まれている。一つは、私たちが通訳者は被通訳者（この場合は、俳優）のバイスタンダーであるという価値を内面化していることだ。

バイスタンダー（bystander）とは英語で「傍観者」を意味する言葉で、「～のそばで」を示す接頭辞の「by」と立っている人を意味する「standler」が組み合わさってできた単語だ。もちろん通訳者はただ舞台を傍観しているのではなく、通訳を行っている。しかし、手話通訳とは舞台袖、テレビでいうところのワイプについて、その場から動かない存在だと認識していた私にとって、上演中に通訳者が舞台上を動くことには強い違和感があった。手話通訳者は俳優のそばに立っているだけのバイスタンダーだった。

もう一つの要素は、聴者による日本手話という言語の間違った理解である。上演前の情報や外見の差異のみならず、俳優と通訳者を二分することができるのは、日本語が手話に通訳されていることは自然なことだ、という思い込みがあるからだろう。それは端的に間違っている。なぜかというと、日本手話は「各国にある自然言語の一つで、単に日本語をジェスチャーに置き換えたものではない」（注6）からだ。日本語が日本手話に通訳されることは、演劇の観客のマジョリティである聴者からみれば当然のことだが、日本手話が日本語に通訳される状況も同等に想定することができるはずだ。

それでも通訳者はバイスタンダーである、と言ってみることにする。救命現場において、その場にいる人命を救助しようとする人のことを「バイスタンダー」と呼ぶ。『銀河鉄道の夜』で手話通訳者が俳優と同一化するように通訳するのは、実際の人命救助が、人工呼吸や心肺蘇生というかたちで助けを必要としている人の身体に接触したり、私的な範囲に介入したりするように、通訳も俳優の発話を入り込まなければならないからだろう。

通訳者は物語の文脈や作品の意図といったさまざまな状況を汲み取りながら、ふたつの言語のずれを解消しようとする。だから、通訳の仕方からその通訳の出力まで、通訳者によって異なる。それはまさに俳優の発話を手話という別の言語において救助するかのようだ。

平田オリザが「豊岡演劇祭 2024 閉幕のご挨拶」で、「様々な障害を持った方など、今まで劇場へのアクセスが難しかった方たちへのアプローチも始まりました」（注7）と宣言するように、『銀河鉄道の夜』は豊岡演劇祭で上演された作品で唯一舞台手話通訳がつけられたものだ。

しかし、なぜ『銀河鉄道の夜』だったのか。というのも、この作品は、平田が提唱した現代口語演劇という理論から大きく外れた作品のように思える。平田は現代口語演劇という理論を通じて、戯曲に口語体を取り入れることによる日常の再現を試みた（注8）。

しかし、『銀河鉄道の夜』は日常とはかけ離れた状況を舞台にしている。加えて、この作品が手話通訳を導入したことにより、現代口語演劇が特権視していた話し言葉を脱中心化しようとしたことは、現代口語演劇の理論と逆行している。現代口語演劇の「口語」という部分を、私たちは文語という文体と対置された文体として捉えることもできれば、たんに話し言葉、パロールとして理解することもできる。後者の理解を踏まえると、俳優による口語と手話通訳が並列的に扱われている『銀河鉄道の夜』を現代口語演劇と言い切ることはできない。

現代口語演劇を下敷きにつくられた平田の演劇作品が、耳の聞こえない人を観客から排除しているという事実を乗り越えるために、平田は『銀河鉄道の夜』という作品を多言語演劇としてつくりなおしたといえるのかもしれない。

『銀河鉄道の夜』はその内容からしても、現代口語演劇をつくりなおすための作品として適切であったといえる。登場人物の一人であるカムパネルラは、ジョバンニの親友で、ジョバンニの貧しい境遇を知っているジョバンニの理解者でもある。しかし、ジョバンニがザネリにいじめられているとき、カムパネルラはいじめに介入することはしない。他方、カムパネルラはお祭りの夜、川に溺れたザネリを救助するが、カムパネルラは溺死してしまう。

カムパネルラはいじめの傍観者でもあり、いじめっ子のザネリの救助者でもある。登場人物だ。一方では、ある状況にかかわりたくないが傍観している人を指し、他方では、ある状況にかかわらなくてはならず、そこに介入する人のことを指すバイスタンダーは、カムパネルラの両義性をもっともよく表す言葉だ。

だからこそ、私たち観客がカムパネルラの慈悲と冷たさを同時に感じ、手話通訳者を追いやろうとし

ても追いやれないことを経験するとき、観客はみずからが傍観者になることもできれば、作品に介入しないといけないことがあることを二重に経験する。

コーンカーン・ルーンサワーンの『Mail Bucha: Dance Offering』は、バイスタンダーとしての観客の存在を端的に示してくれる。タイの民俗舞踊から着想を得たこのパフォーマンス作品では、ルーンサワーンが観客とともに仮想世界につくられた「デジタル神社」にお願い事をする。開演前から観客はインスタグラムの機能を通じて、二次元バーコードをかざすと出現する拡張現実のお花（デジタル・フラー）をデジタル神社に奉納できる。加えて、観客は舞台上でVRヘッドセットを装着し、自らの指で描いた願い事をデジタル神社に奉納することもできる。

パフォーマンスと観客とのインタラクティブな体験はこれに留まらない。ルーンサワーン自身が、上演前から観客席をまわってはリボンのついた鈴を観客に一つずつ手渡しする。上演中も、ルーンサワーンは観客一人一人とハイタッチを交わしながら踊る。デジタル神社にシマウマやニワトリといったさまざまな動物がお供えされるなか、希望した観客は舞台上で動物のポーズをとり、その様子は写真に収められる。

観客がこの作品のバイスタンダーであると痛感するのは、パフォーマンス終盤、ルーンサワーンがVRヘッドセットを装着しながら、デジタル神社で願いが叶ったお礼としてダンスを披露するときだろう。上演前に渡された鈴に印が書かれている観客の一人は舞台に上がり、ルーンサワーンとおなじようにVRヘッドセットを装着し、デジタル神社の中で踊ることをなれば強いられる。

私含めほとんどの観客は、自分が選ばれなくて安堵していただろう。ある一人の観客がルーンサワーンとともにダンスをするとき、私たちは微笑ましくその様子を見ると同時に、「選ばれいたら」という不安を覚える。私たちはこの選ばれた観客を「救助」することはできない。ただ見ていることしかできない。もし、その観客を舞台上から救助したいのであれば、私たちはただ祈るしかない。

といっても、このパフォーマンスで提示される祈りのイメージは無力感に包まれている。この作品において、観客に与えられている祈りの手段はかなり限られている。パフォーマンスの中で、ルーンサワーンはタイの寺院で用いられるお供え用の動物の置物のそれぞれの効用について説明する。ニワトリやシマウマといった動物が紹介される際、スクリーンには大量の動物が回転したり変な動きをしたりするMADのような映像が流れる。

また実際のタイの寺院では、参拝客は動物の置物を購入しお供えをするが、この作品では観客はスクリーンに映ったQRコードをかざすことで「無料で」お供えをすることができる。そのとき、「通常は2000円のところ、豊岡演劇祭限定特価の無料でお捧げいただけます」というナレーションは、祈りがワンクリックで完結することを際立たせる。

デジタル神社への祈りは便利で簡単だ。しかし、「デジタル神社」という得体の知れない存在は観客が上演前に行ったVRヘッドセットでのデジタル神社への祈りも、インスタグラムを通じた奉納も、ビッグデータのほんの一断片として処理する。祈りという行為におけるプロセスをすべて消し去ったとき、デジタル社会における祈りは陳腐で笑えてしまうものになってしまう。だが、その陳腐なユーモアはルーンサワーンの温和な人柄と細やかな舞踊によって隠匿されてしまう。

私たちは傍観者になることがどれだけ簡単なことなのか、突きつけられることになる。自分が選ばれし観客でなければ、捧げられた観客をみながら安堵することができる。席にそのまま座っていることができる。マームとジプシー『Chair／IL POSTO』は、まさにそのような座っている観客、そしてそれを可能にしている演劇の構造に訴えかける作品だ。日本の俳優1人とイタリアの俳優4人によるこの上演では、タイトル通り、Chair＝椅子が重要なモチーフとなる。

上演は非常に静かに始まり、ビートルズの『Here Comes the Sun』で終わる。上演前は整然としていた舞台も、上演後はさまざまな小道具で散らかっている。音響的にも物理的にもクレッシェンドを感じられたこの上演で印象深いのは、途中で登場する現実に起こった殺人事件のエピソードである。11月の寒い夜明け前、ホームレスの女性がある男性にバス停で殺害されたという事件だ。このエピソードが語られるときに強調されるのは、その女性が俳優であったこと、そしてそのバス停のベンチの真ん中に肘掛けがあり、寝そべることができないということだ。

タイトルの一部である「IL POSTO」はイタリア語で「あの場所」という意味だ。「IL」という定冠詞は、「場所」を意味する「POSTO」という単数形の男性名詞に用いられ、英語でいうところの「the」を意味する。「Chair／IL POSTO」という題名はそのあいだにある斜線によって、椅子が場所であり、場所が椅子であることを指し示す。ホームレスの女性にとって、椅子は単なる一つの場所なのではなく、不可欠なあの場所なのである。

作品の終盤、ある俳優がこんな台詞を語る。衣服は身体の内と外のあいだであり、登場人物の一人のかばんをひったくったスリだってホームレスだって、だれでも朝起きたらどの服を着たいかを考えると。そう、あれは11月の寒い夜明け前だった。そのホームレスの女性が着重ねられる服がもう一枚あれば、彼女は朝起きてどんな服を着たいかを想像することができたかもしれない。「IL」という冠詞は、「所有を示して、身体の部位や持ち物に」用いられる場合がある（注9）。衣服はただの布であり、その人を保護する皮膚にもなりうる。そして、バス停のベンチはその人の身体の一部にもなりうる。

殺害されたホームレスの女性は俳優だった。あの夜、女性はバス停のベンチで寝ることができなかつた。けれども私たちはそんなことを知らずに、肘掛けのついたバス停のベンチに座りながらバスを待つ。私たちは椅子に座って観劇する。何かが起こるのを待つ。私たちはそこに何の疑問もなく座る。

私たちにとっても、椅子は場所である。しかし、かならずしも「あの場所」であるわけではない。

観客がより快適に観劇できるように、アクセシブルな演劇祭が求められている。その要請への一つの応答として、『銀河鉄道の夜』の舞台手話通訳は画期的な試みだったといえる。しかし、『Chair／IL POSTO』が問いかけるように、「観客は座る」という当たり前はどの観客にとっての当たり前なのだろうか。私にとって、観客席の椅子は場所ではあるものの、その席である必要はない。だが、車椅子を使う人はある特定の場所でしか観劇できない。

チェックリストのように障害を一つずつ事務的に解消していくことが、アクセシブルな演劇祭をつくるのだろうか。いや、そうではない。アクセシビリティとは、「障害のある人がない人と同じように体験するということを超えて、さまざまな違いを持った人が自分の身体で主体的に物事を体験するとは一体どのようなことなのかを考えることだ」（注 10）。障害のある人の鑑賞体験を障害のない人の鑑賞体験に合わせるのではなく、それぞれの観客がそれぞれの方法で鑑賞できるようにその基盤を保障する。

その際、演劇という構造そのものにクエスチョンを投げかけないといけない。豊岡演劇祭はその空間がまだ完全に立ち上がっていなければこそ、さまざまなアンサーを返す自由があるのではないか。そのアンサーは事務からではなく、演劇作品とその空間から立ち上ってくるのである。だから、私たち観客はただ演劇のそばで座ったり立ったりするだけでなく、通訳という作業を通じて演劇作品をある文脈において救助する必要があるのである。

注

注 1: 豊岡演劇祭 2024 「『悪態 Q』（豊岡公演） 劇団不勞社」、<https://toyooka-theaterfestival.jp/program/9310/>（閲覧日：2024年10月16日）

注 2: 同上

注 3: 星野太『崇高のリミナリティ』、フィルムアート社、2022年、48頁

注 4: 同上

注 5: 同上、77頁

注 6: 田中みゆき『誰のためのアクセシビリティ？ 障害のある人の経験と文化から考える』、リトルモア、2024年、161頁

注 7: 豊岡演劇祭 2024 「豊岡演劇祭 2024 閉幕のご挨拶」、2024年9月30日、<https://toyooka-theaterfestival.jp/news/13046/>（閲覧日：2024年10月16日）

注 8: 松本和也『平田オリザ 〈静かな演劇〉という方法』、彩流社、2015年、19頁

注 9: 伊和中辞典 2版（コトバンクより）「i1」、<https://kotobank.jp/itjaword/i1>（閲覧日：2024年10月16日）

注 10: 田中、7頁

劇評（※抜粋）

万代 陽子

（芸術文化観光専門職大学3回生）

① 烏丸ストロークロック×但東の人々『但東さいさい』9月16日、畠山 日出神社

- ・昨年よりも地域の特徴が強調されていた。但東の中学生が大人でも難しいといわれる舞を披露し、劇中に但東特有の方言を取り入れていた。
- ・フェスティバル全体で、地域独自の特色を大切にするという姿勢が特徴の一つ。
- ・注目したいのは、観客と演者の関係を超えた参加型であった点。舞台が単なる娯楽ではなく、彼ら自身の生活やコミュニティーの一部であることが思い起こされた。
- ・幕間には但東の神事芸能が披露されるなど、地域の芸能が観客に紹介。これらの伝統芸能は、但東の信仰や歴史に根ざしたもので、演劇祭を通してその価値が再発見された。
- ・特に子どもたちにとっては、地域との繋がりを深め、但東という場所に愛着を感じる大切な経験となるだろう。

② ジェームズ・ハーヴェイ・エストラーダ/額田大志『ケアのためのセレモニー』

9月18日、旧尾畠かばん店

- ・「パクカリンガ」は、フィリピンのタガログ語で「思いやり」や「心遣い」を意味し、「ケア」と訳すことができるが、その言葉が持つ曖昧さや多様性を作品の中で探求している。
- ・最も重要なことは、この作品を通してケアとは何かを深く考えさせられる点だ。日常生活の中で無意識にしている家族や友人に対するケアの行為や、ケアを受ける側としての経験がパフォーマンスを通じて可視化された。この作品は観客自身が日常生活で見過ごしがちな「ケア」に対して改めて意識を向け、自分と他者との関係性を見つめる体験となるだろう。

③ マームとジプシー(藤田貴広)『Chair/IL POSTO』9月14日 静思堂シアター

- ・俳優や舞台といった外側にあった存在が、隔たりを無くして観客の頭の中や身体に入り込む感覚があった。洋服や座席、国境のような内側と外側を隔てるものには何があるのだろうか。内と外を隔てるものが時と場合によって、流動的に変化することを体験することができた。
- ・一見、自分とは関係のない外部で起こる出来事が、観客の内面に深く影響を与えるような感覚を生むことが本作の特徴だといえる。劇中、日本で起きた痛ましい事件を想起させる場面では、その事件が発生した午前4時から、被害者が発見されるまでの午前5時を時間軸に物語が展開する。観客たちはその1時間の様子を想像し、感じ取れる何かを問われる。そして、時間が経つにつれて、その瞬間の悲しみや辛さといった感情が薄れ、忘れてしまう人間の本質が描かれている。この人間の忘却の過程が、規則正しく動く自然と共に巧妙に描かれている。



芸術文化観光専門職大学 芸術文化観光研究センター事業
シンポジウム 報告書

発行日：令和7年3月31日

編集・発行：兵庫県公立大学法人芸術文化観光専門職大学 芸術文化観光研究センター委員会

【キャンパス】

〒668-0044 兵庫県豊岡市山王町7-5-2

TEL 0796-34-8123 / FAX 0796-34-8124

